〈第 4 章　夢と「やりあて」〉

さてこれら、ついには可知の理の外に横たわりて、今少しく眼鏡を（この画を）広くして、いずれにかて（オ）（ワ）ごとく触れた点を求めねば、到底追蹤に手がかりなきながら、（ヌ）と近いから多少の影響より、どうやらこんなものがなくてかなわぬと想わるる（ル）ごときが、一切の分かり、知りうべき性の理に対する理不思議なり。さてすべて画にあらわれし外に何があるか、それこそ、大日、本体の大不思議なり。

［1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.366）

第 1 節, 「やりあて」とは

1-1, 「やりあて」の語源と定義

我々にとって「やりあて」[1]とは、全く聞き慣れない言葉である。また『広辞苑』や『国語辞典』などにも、その語は見当たらない。なぜならそれは、熊楠の造語だからである。「やりあて」が日本語であることは間違いないが、では、それは一体（本来）どのような意味内容を含むものなのであろうか。その語源から考察してみる。

「やりあて」の「あて」とは、端的に「当てること」、つまり「的中させること」であろう。では「やり」とは何か。「遣り send」か「行(おこな)って do」か、それとも「（槍で）目がけて aim at」か――。この「やり」によって、「やりあて」は、その意味合いを大きく変えてしまう。

① 長く思いを馳せた（思い遣った）結果、成功が向こうからやって来ること

② 得られた直観を信じて自ら行為に移した結果、的中させること

③ より能動的に、槍で的を射るように当てること

「やりあて」をその語源から解釈すると、それは、大きく分けて①～③を推測することができる。そしてそれらは、①→②→③の順に、より受動からより能動へその意味合いを

---

[1] 鶴見和子は、「やりあて」に関して以下のように述べる。

> 南方は、「やりあて」を、確率の論理として展開してゆくよりもむしろ、発見の方法として説明しようとした。…（中略）…このように夢のおつげがきっかけとなって探しあてたことが、これまでの分類学上の定説をくつがえす発見につながったのだ。これらは「やりあて」の実例である。
>
> [鶴見 1981:218-219]

このように鶴見は、「やりあて」の実例として、熊楠が、夢のお告げをきっかけとして、（生物の珍種などを）探し当てたことを挙げている。

それにしても熊楠は、どのような意図で「やりあて」という語を用いたのであろうか。「やりあてられるもの」は既に常にそこに在るはずである。熊楠は「発見【やりあて】というは……天地間にあるものを、あるながら、あると知るに外ならず」[1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡]（『全集 7』p.368）（【 】内―唐澤）などとも述べている。我々は「やりあてた」と言って喜び、またそれを不思議がるわけだが、熊楠にとってそれは、「既に常にそこに在るもの」（dasein）を知るというだけのことであったと言えるかもしれない。「やりあて以前にあるもの（存在）」と我々（存在するもの）とは本来、最も近い（同一である）はずだが、我々はなかなかそのことに気がつかない（というより最も近いが故に、その「存在」に気付いていない〔最も遠い〕）のだが、**〈中間〉**に居た熊楠にとっては、そのようなことは、実は「当たり前」のことだったのではないだろうか。しかし、「存在」からの呼びかけ（語りかけ）に対して人間が応答する（それを知る・了解する）ことができる処、あるいは両者が交流する処＝**〈中間〉**について熟思しない人々（つまり日常的覚醒時のみを「真」と信じて疑わない人々）にとっては、やはり「やりあて」は驚くべきことであった。人々（特に近代科学に傾倒する人たち）は、熊楠が頻繁に「やりあて」ることに関して、「なぜ、どうやってそんなことができるのだ？」と、説明を求めたに違いない。熊楠の使用した「やりあて」とは、そのような人々に対する、ある種の「揶揄」のようなものだったと言えるのかもしれない。

変化させていることが分かる。熊楠が用いた「やりあて」は、これらの内どれであったのだろうか。あるいはどれでもなかったのであろうか。熊楠が、実際どのようにこの語を使用していたのかを、以下の二文から考察してみたい。

> 故にこの tact（何と訳してよいか知らず。石きりやが長く仕事するときは、話しながら臼の目を正しく実用あるようにきるごとし。コンパスで斗り、筋ひいてきったりとて実用に立たぬものできる。熟練と訳せる人あり。しかし、それでは多年ついやせし、またはなはだ精力を労せし意に聞こゆ。実は「やりあて」（やりあてるの名詞とでも言ってよい）ということは、口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ（気がつかぬ）、何とも伝うることならぬなり。されども、伝うることならぬから、そのことなしとも、そのこと用なしともいいがたし。現に化学などに、硫黄と錫と合し、窒素と水素と合して、硫黄にも正反し錫にも正しく異なり、また窒素とも水素ともまるで異なる性質のもの出ること多い。窒素は無害なり、炭素は大営養品なり。しかるに、その化合物たる青紫（シアン）は人をころす。酸素は火を熾（さか）んにし、水素は火にあえば強熱を発して燃える。しかるに、この二者を合してできる水は、火とははなはだ中（なか）悪きごとく、またタピオカという大滋養品は病人にはなはだよきものなるに、これを産出する植物の生（なま）の汁は人を殺す毒あるごとし。故に一度そのことを発見して後でこそ、数量が役に立つ（実は同じことをくりかえすに、前の試験と少しもたがわぬために）。が、発見ということは、予期よりもやりあての方が多いなり。やりあて多くを一切概括して運という）。 比例に一例をいわん。鳥卵、殻の堅きは、中の卵肉を保護するが功用なること誰も疑わず。また落つればわれる憂いあればこそ堅きなり。しかるにこの経験たる、くりかえすことならず。何となればちょっとでも破るれば全体が死ぬ故なり。故に自然に、または卵自身の意で改良を重ねしにあらず。なんとなくやりあてて漸次堅くなりしなり。まことに針がねを渡るようなことなり。偶然といわんにも偶然にはあらず。偶然が幾千万つづくものにあらざればなり。故に、すじみちよいやつにやりあてて、はなさざりしという外なし。
>
> [1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡]（『全集 7』p.367）（傍線―唐澤）

亀などは低能な物で、大きな亀が陸上に擲げられた握り飯を食わんと、池の縁に前足を懸けるも、身が重くて容易に上り得ず、空しく気をあせるうち、一廻り小さい亀が、これまた池の縁に前足を懸けては落ち、懸けては落ちたのち、偶然大亀の甲を踏台として上陸し得、握り飯を銜(くわ)えて池へ還り水中で食う。ところを大亀、小亀を追い散らして、全部また幾部の握り飯を奪う。それから味を占めて自然と小亀上陸の踏台となり甘んずる癖が付くらしい。むろん小亀が飯を銜えて池に帰らぬうちにも尽力して、上陸し得るだけは大亀も上陸してみずから飯を取り池に還り食う。小亀の踏台となる大亀、大亀を践んで上る小亀、いずれも種々やり試みて、たまたま中(あた)った通りを漠然記臆して毎度一様に実行するに過ぎず。この亀池は長方形で、その二辺の縁は、池底に直角に石を積み累ねて成るから上りがたきも、他の一辺は石を積まず。池の底に続いて斜めに漆喰を敲き揚げたものゆえ、悠々這って上陸し得べきに、毎日経験しながらこの差別に気づかず。ひたすら握り飯に近い処より上らんとあせり、少しく遠廻りして、容易に上り得る方より上陸したこと一度もない。何の考えなき者が集まって、偶然やりあてたことを、多少記臆し、繰り返し行なうて奏功するまでで、合成本能とはよく名づけたと惟う。

[1930 年 5 月『民俗学 2 巻 5 号』「千疋狼」]（『全集 4』pp.351-352）（傍線―唐澤）

これら二文を見て分かることは、「やりあて」という言葉の前に見られる「なんとなく」や「偶然」などからも、どうやらそれは、より能動的なものではないということである。しかしそれは、単なる「偶然」でもなさそうだ（偶然といわんにも偶然にはあらず）。また自らの行為なしに、他からの働きかけだけによるものでもない。つまり、完全に受動的なものでもない。しかしながらそれは、自らの意志だけで工夫を加えて遂行されるものでもないのである。「的中させよう」・「成功させよう」と息巻かず、だからと言って目標を見失わない――ここに「やりあて」の難しさとポイントがある。

生物には、今まではうまくいかなかったことが、ある時急に、偶然うまくいくことがある。いわゆる「創発 emergence」である。「創発」を起こすまでは、あるいは的中するまでは、生物はその行為を、時間をかけて繰り返さなければならない。しかしその際、意図的に成功を狙ってはいけない。意図的になることで、逆に成功は遠のいてしまうのだ（ひ

たすら握り飯に近い処より上らんとあせり、少しく遠廻りして、容易に上り得る方より上陸したこと一度もない）。

「やりあて」は本来、言語化不可能なものであるようだ（口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ〔気がつかぬ〕、何とも伝うることならぬなり）。しかしそれは、在る。大事なことはそれに「気付く」ことである。鳥や亀など人間以外の生物は、それに気付いていない。いや、人間も大抵はそのことに気付いていない。「気付く」には、やはり確認作業が必要である。確認しなければ、つまり「反省」しなければ、その行為が果たして当たっているのか外れているのかも分からない。とは言え、確認することは勇気がいる。なぜなら、成功への道はそう近くはなく、殆どが外れているからだ。しかし初めから「外れている」と思って確認すべきではないし、ましてその前の行為をすべきではない。得られた直観は、「当たっている」と信じて行為に移さなければならないのだ。

「やりあて」と「共時性 synchronicity」は密接に関係するものである。C.G.ユングは、論文「非因果的連関の原理としての共時性」の中で、ライン（Joseph Banks Rhine 1895～1980 年）が行った超能力実験を取り上げて、興味深い考察を行っている。この実験は、被験者が見えないところにあるカードのマークを当てるというもので、中にはかなりの確率でマークを的中させる者もいた。この実験結果について、ユングは以下のように述べている。

> 【実験に対する】関心の欠如や倦怠は否定的に働く因子であり、熱中、積極的な期待、希望や ESP の可能性に対する信頼は良い結果を産み、それらは、いかなる結果が出るかを決定する現実の条件であるように思われる。
>
> [Jung・Pauli 1955, 河合・村上訳 1976：23]（【 】内、傍線―唐澤）

つまり、「共時的」現象には「希望」・「期待」が大きく関与しているということである。ではなぜ「期待」・「希望」することが、「共時的」現象へとつながるのか。河合隼雄は端的にこう述べている。

「希望する」人は、心が広く開放されるので、共時的現象に他の人よりもよく気づく

とも考えられる。

[Progoff 1973, 河合隼雄・河合幹雄訳 1987：203]

つまり、「やりあて」るには、積極的な「期待」・「希望」が必要なのである（本章・第16 節参照）。それは、ある種の楽観的な姿勢でもある。例えば、動物は決して「失敗するかもしれない」などと怖れて、狩りを止めることはない。反対に「絶対に成功させてやる」と息巻くこともない。そこには無垢な（純粋な・無反省な）行為があるのみである。そうすることで、成功は自ずと向こうからやって来る。しかし、純粋な行為であるが故に、動物はそのことが成功しているのかも知らないでいる。「気付く」ためには、成功から「距離」を置かねばならない。つまり「距離」を置き、振り返る（確認・反省する）ことで初めてそれを知ることができるのだ。「成功」はいつも過去的なものなのである。

「やりあて」とは、おそらく語源的には「遣り」＋「当て」であり（否、そうあるべきであり）、何かを純粋に思い遣った結果、（成功が）向こうからやって来ることである（つまり先述した①の意味）。しかし、得られた直観を信じ、自ら行為をする（確認作業も含む）――それは、実は、他から行為させられているとも言えるのだが――ことを強調するならば、②でもある。その時、意図的に成功を狙ってはいけない。つまり③のように、例えば槍で的を射抜くように、成功を狙ってはいけない。だが、的を完全に見失ってもいけないのだ。

「やり」あるいは「やる」が、「遣り」・「遣る」だけではなく、「して」あるいは「する」という意味を持つことも確かである。語源的には「遣り」・「遣る」で、つまり「さしむけて」・「さしむける」という意味が第一義である。つまり、より受動的で、より自然な（自然の流れに身を任せるような）意味である。一方で、隠語的に「する」・「殺す」・「性行為を行う」・「やっつける」などという意味で用いられることもある。「やりあて」という語が、外面的には（「社会」的には）、大胆かつ破天荒な人物と思われていた、また自身もそのようにパフォーマンスすることの多かった熊楠が用いた語であることを鑑みると、それは、気品のある身のこなしを想像させる「遣り」・「遣る」よりも、前述した隠語的なイメージの方が似合うようにも思われる。その語が、方言などではなく（事実、紀南地方の方言辞典などでも「やりあて」は見当たらない）、熊楠自身の造語となれば、なおさらである。

このように、「やりあて」という言葉には、実に微妙なニュアンスが含まれている。しかし①・②・③いずれにせよ、それは偶然ではない「的中」であることに相違ない。従って本稿では、「やりあて」を、多少の汎用性を持たせつつも端的に「偶然の域を超えた発見や発明・的中」と定義したい（さしあたって、このように定義しておかなければ、後で述べる「tact」〔熟練能的 tact と生得的 tact〕に関する意味づけも困難になる）。しかしその際、「やり」には、これまで述べてきたような「遣り」の意味が含まれていることにも留意されたい。つまり、より受動的な意味での、あるいは本来の語源としての「遣り」である。

1-2 「やりあて」と tact

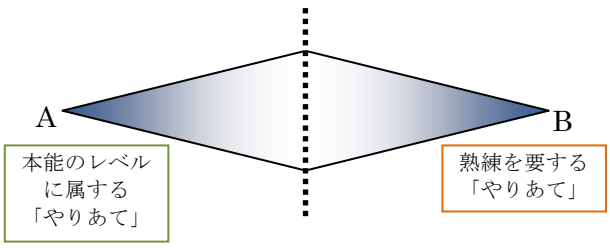
> 実は「やりあて」（やりあてるの名詞とでも言ってよい）ということは、口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ（気がつかぬ）、何とも伝うることならぬなり。されども、伝うることならぬから、そのことなしとも、そのこと用なしともいいがたし。現に化学などに、硫黄と錫と合し、窒素と水素と合して、硫黄にも正反し錫にも正しく異なり、また窒素とも水素ともまるで異なる性質のもの出ること多い。窒素は無害なり、炭素は大営養品なり。しかるに、その化合物たる青紫（シアン）は人をころす。酸素は火を熾（さか）んにし、水素は火にあえば強熱を発して燃える。しかるに、この二者を合してできる水は、火とははなはだ中（なか）悪きごとく、またタピオカという大滋養品は病人にはなはだよきものなるに、これを産出する植物の生（なま）の汁は人を殺す毒あるごとし。故に一度そのことを発見して後でこそ、数量が役に立つ（実は同じことをくりかえすに、前の試験と少しもたがわぬために）。が、発見ということは、予期よりもやりあての方が多いなり。
>
> ［1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.367）（傍線―唐澤）

熊楠がここで言う「予期」とは、数量（データ）に基づく「予期（予測）」である。ふとした瞬間にひらめく「予知」のことではない。ふとした瞬間にひらめき、何かを的中させることが「やりあて」である。つまり上記において熊楠は、発見とは、データに基づく「予期」よりも、ふとした「予知」によるものの方が多いと述べているのである。

では、いかにして「やりあて」は可能なのか。これに対する熊楠の答えは、それが明示化できない暗黙的なものであるためであろうか、判然としない。「なんとなくやりあてて……」と言いつつも、それは「偶然といわんにも偶然にはあらず」と述べている。「やりあて」は、ある。しかし「口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ（気がつかぬ）、何とも伝うることならぬ」ものなのだ。

熊楠が言うこの「やりあて」には、種類が二つあるように思われる。つまり、熟練を要する「やりあて」と、本能のレベル（第六感）に属する「やりあて」である。いや二種類のはっきりとした「区別」というよりも、両者は「グラデーション」のようにつながっていると言うべきかもしれない〔図 13〕。点線を軸に折ると、三角形の両端 A と B は重なる。つまり同じ「やりあて」と言うことができる。しかし、その「質」は異なる（次節以降で詳述）。点線上に通常、我々人間は居る。野生動物などは A のより近くに居るように思われる。

図 13



下に示すように、いわゆる「世紀の大発見」（マルコニによる無線電信の発明やレントゲンによる X 線の発見など）と呼ばれるものは、熟練（豊富な経験と膨大な知識の集積）による「やりあて」（が多い）と言える。本能的あるいは第六感的な「やりあて」とは、生物の生得的（innate）な本能レベルのものでもある。

> 近時、形以下の学大いに発達して蓄音器より、マルコニの無線電信、また X 光線できる。それよりまたラジウムというて、自体に強熱を蓄え、またみずから X 光線を発する原素を見出だす。次には、井の水にかかる性質のもの所々にあることを見出だす。金栗【熊楠の自称】負け惜しみいうにはあらぬが、自分いろいろ植物発見などして知る。発見というは、数理を応用して、または tact にうまく行きあたりて、天地間にあるものを、あるながら、あると知るに外ならず。蟻が室内を巡歴して砂糖に行きあたり、食えるものと知るに外ならず。蟻の力にて室内になき砂糖を現出するにも、今まで毒物なりし砂糖を甘味のものに化するにもあらず。

［1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.368）（【 】内、傍線―唐澤）

確かに数理（データ）を応用して何かを発明したり発見したりすることはあるだろう。しかし、発明や発見はそれだけではない。「tact」によって成し遂げられることもあるのだ。熊楠が特に注目したのは、数理（データ）に基づく発明や発見ではなく、「tact」による「やりあて」であった。

また、いわゆる熟練を要する「やりあて」とは、長い期間の経験と、膨大な知識（それは頭で覚える類のものだけではなく、五感で習得するものも含む）が必要となる。長い間続けた結果、ある時突然何かが出来るようになること（＝創発）は、我々も日常において経験したことがあるはずである（野球で、黙々と毎日素振りの練習をした結果、ある時急にヒットが打てるようになったり、勉強で、毎日の我慢強い積み重ねの結果、ある時急に成績が伸びたりするなど）。

さしあたって、この熟練による能力が「tact」であるとする。そしてそれは「臨機応変の才」あるいは「適否を見定める鋭い感覚、美的センス」と言い換えることもできる（因みに熊楠はこの「tact」を何と訳したらよいか分からないと言っている）。「臨機応変の才」あるいは「適否を見定める鋭い感覚、美的センス」は、確かに熟練によって身につけられるものである。しかし、実はこの「tact」は「センス（sense：物事の微妙な感じを受けとる働き）」でもあるため、一概に「熟練能」とも言い難いのだ。筆者が「さしあたって」としたのはそのためである。経験によらない、生まれ持っての「sense」である「第六感」が働いて、「やりあて」につながることもあるのである。

> 故にこの tact（何と訳してよいか知らず。石きりやが長く仕事するときは、話しながら臼の目を正しく実用あるようにきるごとし。コンパスで斗り、筋ひいてきったりとて実用に立たぬものできる。熟練と訳せる人あり。しかし、それでは多年ついやせし、またはなはだ精力を労せし意に聞こゆ。
>
> ［1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.367）（傍線―唐澤）

「tact」は熟練によるもの（熟練能）だけではないのだ。多年を費やさなくても事を可

能にする、生まれ持っての「sense」でもあるのである。「生まれながらの」・「天性の」という意味では、「sense」より「innateness」の方が良いであろう。ただ、この「innateness」による「やりあて」に気付かない人は多い。「単なる偶然」の一言で片付けてしまうことが殆どである。

これまで、熊楠に関する多くの書物の中で、「やりあて」と「tact」は同義として語られてきた。しかし、熊楠のテクストを慎重に読んでいくと、どうも「やりあて」＝「tact」ではないようである。「tact」とは「臨機応変の才」、「鋭い感覚」あるいは「innateness」＝生まれ持っての直観であり、特に「臨機応変の才」などは、経験の積み重ね（熟練）を必要とする。一方、生まれ持っての、本能のレベルに属する「innateness」は、多年の積み重ねは必要としない（場合が多い）。熊楠が「tact」の訳語に悩んだ理由は、この「tact」の背景に、相反する要素（熟練と innateness）が含まれているからだったからかもしれない。

ともかく、このような「tact」によって「やりあて」は可能となるのだ。従って「やりあて」と「tact」は決して同義ではない。

> 科学科学というが、香、味等を熱度や重力のごとく測定する方はまだまだなし。故に、香道や割烹には日本の方が西洋にまされること多し。画の具を合わすに、師匠と同じ分量を精細に計算して和合しても、師匠ほどの彩色は出ず。世間のこと数量や理屈のみで行けぬこと多し。…（中略）…されば数量の学識、万物に及ぼさぬ今日は tact（何と訳するか知れぬが、練熟能ともいうべきか、石切り屋がよそむきて話しながら臼の目を規則通りに角度正しく切り、何の音調の定則も譜表も持たざる芸妓が隣人のくだまく声に合わせて三線を鼓するがごときを tact という）ということ、もっとも肝心なり。東洋のことには tact まことに多し、西洋人にはこのこと少なし。
>
> [1911 年 10 月 25 日付柳田国男宛書簡]（『全集 8』p.220）（傍線―唐澤）

「tact」は数量で表すことはできない。故に近代科学による方法だけでは、それを真に知ることはできない。しかし熊楠は、この「tact」を知ることこそ最も重要だと言う。また熊楠は、東洋にはこの「tact」に関する事柄が非常に多いという。多いというより、西

洋人より東洋人の方が、古来「tact」に関心を示してきたというべきかも知れない。熊楠は、この「tact」を研究することは、当時世界を席巻しようとしていた西洋の近代科学に対抗するための手段の一つになると考えたのではないだろうか。

第 2 節，熟練能的 tact による「やりあて」—生物の発見を中心に—

熊楠が例に挙げている、夢による生物の珍種の発見も「tact」による「やりあて」であった。では、それは「熟練能的(skilled)tact」であろうか、「生得的(innate)tact」であろうか。当然、熊楠自身はどちらかを言明していない。この区別（熟練能的・生得的）は、あくまで筆者による「tact」への見解である。

夢による「やりあて」と聞くと、それは一見、「生得的(innate)tact」によるものであるように思われる。夢と熟練能との結び付きよりも、夢と「innateness」との方が、親和性があるように思われる。しかし、熊楠の場合、こと植物の珍種の発見の場合、筆者は、熊楠には「熟練能的(skilled)tact」が働いていたと考える。

> 一例をいわんに、数量のことは、予期たしかなれば例までもなし、tactのことをいわん。明治二十三年、予、フロリダにありて、ピソフォラという藻を見出だす。これはそれまでは米国の北部にのみ見しものなり。さて帰朝して一昨年九月末、吉田村（和歌山の在）の聖天へまいれば、必ず件(くだん)の藻あると夢みること毎度なり。よりて十月一日、右の聖天へまいりはせぬが、その辺をなんとなくあるくに、一向なし。しかるに、予の弟の出務中なる紡績会社の辺に池をほりあり。（これは小生在国のときなかりしものゆえ、小生知るはずなし。）それに黒みがかった緑の藻少し浮かみあり。クラドフォラという藻と見えたり。それは入らぬゆえ、ほって帰らんとす。されども、何にもとらずに半日を費やせしも如何(いかが)なれば、どんなものか、小児にでも見せて示さんと思い、とりて帰る。さて顕微鏡で見るに、全く夢に見しピソフォラなるのみか、自分米国で発見せしと同一種なりし。[2)]

---

2) 「ピソフォラ」の発見に関する記述は、1904 年 3 月 31 日の小畔四郎宛書簡と、1911 年 6 月 10～18 日『和歌山新報』に掲載された論考「千里眼」にも見ることができる。以下は小畔宛書簡である。
扨此ナギランは小生近来夢の告により発見多し。一昨々年十月上旬、吉田の聖天宮えまいればピソフヲラあ

[1903年7月18日付土宜法龍宛書簡]（『全集7』p.369）（傍線―唐澤）

この「やりあて」は、熊楠が長年の努力によって身に付けた「熟練」のなせる技であった。熊楠がある問題（ここでは、米国で見たピソフォラはなぜ日本にはないのか、という問題）に直面したとき、文献そしてフィールドワークで長年培ってきた知識が、夢の中で「統合」され（結びつき）、ひらめきへとつながったのだ。このような「統合」は無意識下で行われる。故に「口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ（気がつかぬ）、何とも伝うることならぬなり」なのである。

ピソフォラという藻自体（そのもの）、そしてピソフォラに関連する地形や気候、植生などについての様々な知識・情報は、いわばピソフォラという藻を構成する「諸細目」である。それらは熊楠の内部で「統合」され、「やりあて」へとつながった。

「諸細目」の包括的な「統合」は、対象へ深く「入り込むこと indwelling」によってはじめて可能になる。科学哲学者のマイケル・ポランニー（Michael Polanyi 1891～1976年）は、以下のように述べている。

> 事物が統合されて生起する「意味」を私たちが理解するのは、当の事物を見るからではなく、その中に内在化するから、すなわち事物を内面化するからなのだ。
>
> [Polanyi 1967, 高橋訳 2003：40-41]

るべしといふ。…（中略）…あてにならぬことと思ひながら十月三日聖天へまいるに、そんなものなし。因て和歌山市の東端えかかる所にて小生弟社長たりし紡績会社のそばに五年斗り前土取たるあとに水たまり泥池となれり、その中に一団の藻■（王偏に浮の右側）を見るに尋常の藻なり。因て帰らんとするに、何となく気にかかり、試みに右一握手丈の藻をとり帰り験ずるに、乃ち右のフロリダ予の発見と同一種のみならず同一亜種たりし。

[1904 年 3 月 31 日小畔四郎宛書簡]（南方熊楠顕彰会学術部編、『南方熊楠　小畔四郎往復書簡（1）』、南方熊楠顕彰館 2008、pp.44-45）（傍線―唐澤）

以下は論考「千里眼」における記述である。

また、その前年、和歌山にありし日、一朝夢に亡父来たり、ピトフォラ・エドゴニア・ヴォーケリオイデスを獲んとならば、今日日前宮に詣れと誨え、その日晴天なりしを幸い、日前宮に詣り、帰途種々の藻を集めしも、件の種を見ず。夕近くなりしかば、和歌山市の東郊、畑屋敷に入らんとする道傍に、紡績会社用のため新たに掘りたる小池あり。その中に一塊の暗緑色の藻浮かべり。これはその辺に多きヴォーケリア属のものならんと思い、そのまま行き過ぎんとせしが、何となく気に懸かり、また引き還してこれを取り、家に到りて鏡検せしに、夢に見しその種の藻なりし。よってこれを英国に送り、学士会員ハウス氏の鑑定を求めしに、全く予と同見の由、『ネーチュール』雑誌に載せられたり。

[1911 年 6 月 10 日～18 日『和歌山新報』「千里眼」]（『全集 6』pp.8-9）（傍線―唐澤）

事物の外面のみを視覚によって見ることでは、その本当の「意味」、つまり暗黙的に「統合」されたもの（全体像）は決して見えない。対象へ内在化（indwelling）することで初めてそれは可能になるということである。さらにポランニーは、

> 暗黙知は内在化（indwelling）によって包括（コンプリヘンション）＝理解を成し遂げること、さらにすべての認識はそうした包括の行為から成り立っている、もしくはそれに根ざしている
>
> [Polanyi 1967, 高橋訳 2003：94]

と述べている。つまり暗黙知（言語化不可能かつ言語で知りうる以上の知）は、「indwelling」によって可能になり、それは包括的理解（「諸細目」を統合した「全体像」を感じ取ること）を成し遂げることでもあるのだ。我々は、非・明示的に対象に潜む「何か」を確実に感じ取ることができる。「私たちは初めからずっと、手掛かりが指示している『隠れた実在』が存在するのを感知して、その感覚に導かれている」[Polanyi 1967, 高橋訳 2003：50]のである。言い換えれば、我々には、未だ発見されざるものを暗に予知する能力が備わっているということである。しかし、それを発揮するには相当な集中力と継続的努力が必要である。そのような「裏付け」があればこそ、得られたひらめき（予知）を「確信」することができるのだ。ポランニーは、コペルニクスの地動説を例に、以下のように述べている。

> コペルニクス派は、ニュートンが証明するまでの 140 年間にわたり、過酷な弾圧に抗して、地動説は惑星の軌道を計算するのに好都合なだけではなく、紛れもない真理であるということを熱烈に主張していたものだが、彼らが確信していたのも、<u>まさしくこうした種類の予知だったのに違いない</u>。
>
> [Polanyi 1967, 高橋訳 2003：48-49]（傍線―唐澤）

「こうした種類の予知」とは、つまり、「隠れた実在」を暗黙的に、しかし妥当に感じ取ったもの、いわば「ひらめき」である。

熊楠はしばしば「脳力」の働いた結果、「やりあて」が可能になったり、その他不思議な現象に遭遇したりしたというようなことを述べている。「脳力」とは「異常なまでに高ま

った集中力」のことである。その「脳力」をもって、対象へ、あるいは問題自体へ「indwelling」した結果、「諸細目」の暗黙的な「統合」は可能になる。ここで「暗黙的」と書いたのは、このような「統合」は、無意識下で行われる、明示化不可能な、いわば「創発」（突然のジャンプ）だからである。そしてこの「創発」には、やはり多年の努力が不可欠である。努力なしに「創発」はあり得ない。それは、我々の日常における例を挙げ、上でも説明した。

> 世界通常のことは、経験より成れる習慣性により行う。石を切りて火を出だし、背痒くして爪でかくごとし。それより小むつかしきことは少々理論が入用なり。それから暦を作ったり、大砲の速力通り定めて射んとせば、まず太陽の引力を引力のみとして純粋にしらべ、また空気なきところに物体が飛ぶ速力をしらべて後、いろいろ地上の障碍とさし引く。さて効果あるなり。事物心一切至極のところを見んには、その至極のところへ直入（じきにゅう）するの外なし。
>
> ［1904年3月24日付土宜法龍宛書簡］（『全集7』p.455）（傍線―唐澤）

ポランニーが言うところの「対象へ深く入り込むこと・潜入・内在化 indwelling」とは、熊楠がここで言っている「直入」と同義である。熊楠は、物理学が対象とする「物」や、心理学の対象である「心」のみを個別に研究すべきではない、その両者が交わるところに生じる「事」の研究こそが重要であると述べている（「事の学」については第 3 章・第 4 節を中心に既に見てきた）。そしてそれらは、既存の学問によって一応探究可能な事柄であり、特に速度や重力などは物理学によって調べることができる。しかし、より奥深くその内部を探究するためには、そこへ直接潜入つまり「直入」するしかないということを、ここで熊楠は述べているのではないだろうか。

「indwelling」・「直入」をさらに理解するには、例えば、我々が芸術作品を鑑賞する際、どのように感動が呼び起こされるかを考えれば分かりやすいかもしれない。我々は、絵画を鑑賞する際、表面上の「色の配置」や「形状」・「大きさ」を、視覚だけで分析することだけで、本当にその作品を理解できるだろうか。感銘を受けることができるだろうか。そうではなく、芸術作品の世界に参入し、さらには創作者の精神に内在することで、初めて「審美的な鑑賞」が可能になると言える。これは、機械には真似のできない生命体特有の

「共感性」と言えるものかもしれない。

> 人間が物を考えるに、必ずしも論理法に示すがごとき正式を踏んでせず。故ハーバート・スペンセルなども、常人が日常の考慮に順序通りに推理することははなはだ稀にて、多くは直接到達（ジレクト・インフアレンス）を用ゆ、と言えり。仏経に一日一夜に八万四千の念ありと言い、楊朱が当身（とうしん）のこと、あるいは聞きあるいは見るも、万々一を識らず、目前のこと、あるいは存じ、あるいは発するを、千に一を識らず、といえるごとく、何の気も留めずぶらぶら見聞思慮するは忘れ易きものなり。また心理学者のいわゆる閾下（いきか）考慮（サブリミナル・ソーツ）、仏説にいわゆる末那識（まなしき）、亜頼耶識（あらやしき）様の物ありて、昼夜静止なく考慮し働きながら、本人みずからしかと覚えぬ一種の脳力ありとせば、予が多年の経験より類推して、みずから知らぬうちに、地勢、地質、気候等の諸件、かくのごとく備わりたる地には、かかる生物あるも知れずと思い中（あた）れるやつが、山居孤独、精神に異状を来たせるゆえ、幽霊などを現出して指示すと見えたり。
>
> ［1911 年 6 月 10 日～18 日「千里眼」『和歌山新報』］（『全集 6』pp.10-11）
>
> （傍線―唐澤）

熊楠によると、人間の思考は、何事も順序立てて考えるのではなく、多くは「直接到達 direct inference」によって行われているという。つまりそれは、あれこれ考えるのではなく、対象そのものへ直接アクセスする方法である。分析や数値化せずに、対象自体をそのまま捉える方法である。そのようにアクセスし、得られた情報は、心理学で言うところの「閾下考慮 subliminal thoughts」において「統合」される。あるいは、熊楠の言う「末那識」・「亜頼耶識」において、地勢や地質、気候などのいわば「諸細目」は、暗黙的に（自ら知らぬうちに）「統合」されるのだ。そして熊楠のように、孤独な山の中で「脳力」が働き、時に通常時とは異なる精神状態になり、「幽霊」などを現出して、珍物の在り処などを示すこともある。

つまり、「やりあて」において、筆者が最も重要と考える「indwelling」と「暗黙的統合」は、熊楠も「直入」・「直接到達」、そして「末那識、亜頼耶識」の働きという言葉で着目していたことが分かる。

対象の内部に「indwelling」し、諸細目を分断・分析することなく包括的に、あるがままに捉えるためには、固定観念に囚われない柔軟な知識と感受性が必要である。それは、いわば「非常に密に編まれた網」のようなものである。

> しかして小生は、実に耶蘇教に自由平等の意多く、回々徒に勇猛不避の訓え多きを知りて、実にありがたく思うなり。すなわちありがたく思うが心内を楽しむものなり。すなわち水を観ずるときは、山を観ぜずとも水を観ずるが、すなわち心内の妙味なり。また瞑目して諸哲の言行を記臆し出だすも心内の妙味なり。小生は法華門徒の老婆が、ややもすれば一を執して相謗(そし)るを笑う。かつそれ仏教のみ宗教という極印のすわれるものにもあらざれば、何の宗旨のことでも観じて楽しむは、これ真の楽しみなり。
>
> ［1893 年 12 月 24 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.150）（傍線―唐澤）

偏った先入観や固定観念に囚われた知の「網」では、対象の片鱗しか掴むことはできない。そのような知に対して熊楠は、当然否定的であった。上記で熊楠は、老婆が自分の信じる宗教（法華経）のみを絶対的として、固定観念で物事をそしることを非難している。老婆は、偏狭な固定観念と先入見によって編まれた、目の粗い「網」で物事を捕らえようとしているのだ。ここで熊楠は、相対的にさまざまな角度から物事を見ることこそ大事であり、そうすることではじめて「心内の妙味」は生まれると述べている。

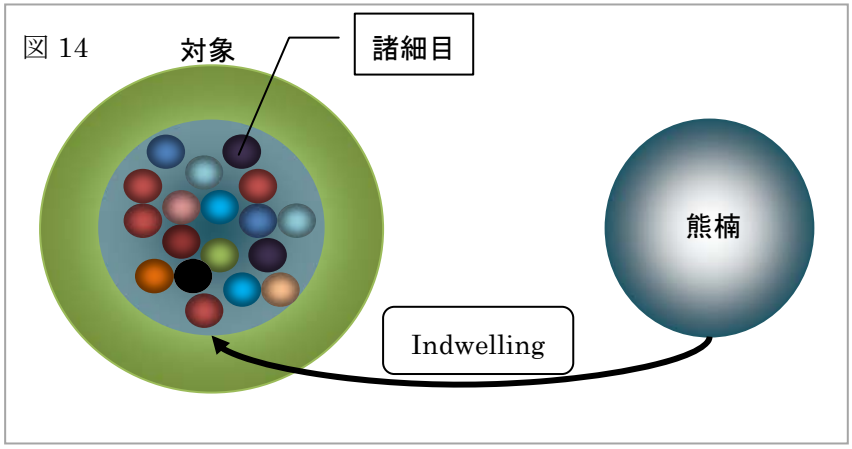
我々は、「我々の網」にかかったものしか知覚していない。その網には、人間という生物種の感覚器官（がもつ限界）も含まれている。つまり熊楠も人間である以上、他の生物が持つ、我々人間からすれば超高度な感覚器官は持ち合わせていなかったが、それでもやはり熊楠は、この網目が非常に密な人間だったように思われる。

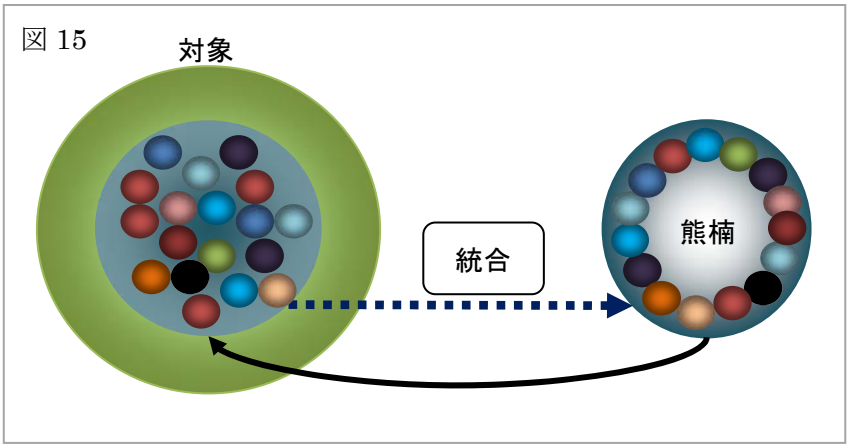
熊楠の「網」は、民俗学・生物学・人類学・宗教学・性愛学……など、膨大かつ先入観や偏見に囚われない柔軟な知識と、鋭敏な五感によって、非常に密に編まれていた。だから、通常の人の偏った知識や感覚器官では捉えられない細かい「暗号」でさえ、熊楠の「網」は捕らえることができたように思われる。いわば事物をあるがままに近い形で捉えることができたのである。そして、このような「密なる網」を編むためには、まずは「遍学」（遍く、広く深く学ぶこと）をしなければならない。

事物多く総攬するには、事物多く知らざるべからず。故に到底事物の識を外にして、われらは心内の妙想なしと思う。

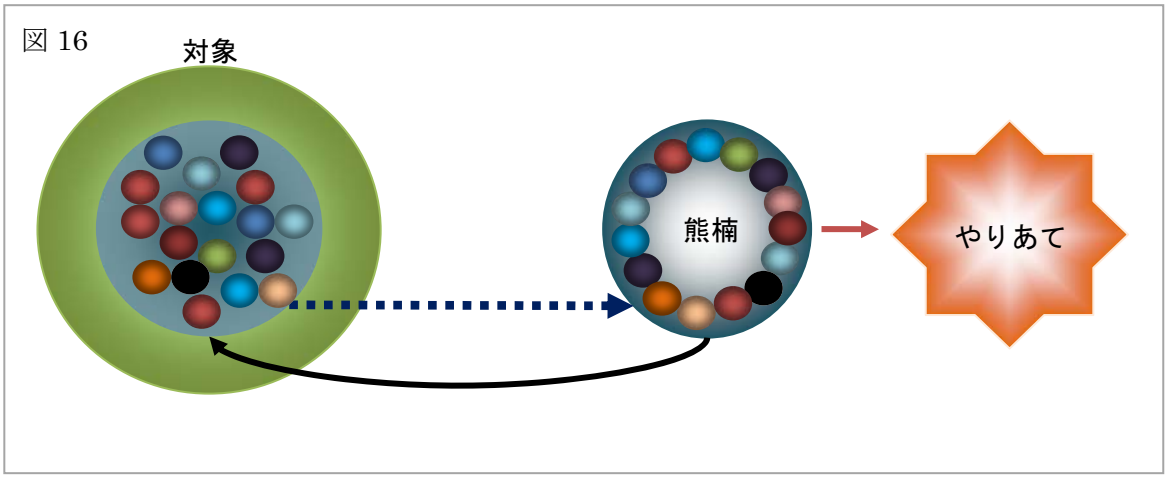
[1893 年 12 月 24 日付土宜法龍宛書簡]（『全集 7』p.161）

熊楠がこう述べるように、多くの事柄をまとめあげる（包括的に理解する）には「遍学」し、知識を蓄積しなければならないのだ。そのような下地があってこそ「妙想」（ひらめき）も生まれる。熊楠は日々の筆写・写生などによって書物等に「indwelling」すると共に、我々が想像もできないほどの膨大な知識をその身に蓄えていった。熊楠はまさに「歩くエンサイクロペディア」であった。





これまで述べてきた「熟練能的tact」による「やりあて」のプロセスを、図を



用いてまとめると、以下のようになる。まず熊楠は、高まった「脳力」をもって、対象の内部へ「indwelling」していた。熊楠の言葉でいうところの「直入」である。そして対象の「諸細目」を、膨大な知識と経験によって編まれた非常に細かい「網」で掴みとっていた〔図14〕。「網」とは純粋な継続と努力（遍学）によって得られるものである。

掴み取ったバラバラの状態の「諸細目」は、意識下（末那識・亜頼耶識）において暗黙的に「統合」される〔図15〕。

「統合」は、時に夢の中で行われる。それは「ひらめき」となり、あるいは「幽霊による示唆」となり熊楠に、生物などの珍種の在り処を教えた。熊楠は、それを信じ、行動した結果、珍種を発見し（「やりあて」る）ことができたのである〔図16〕。

第 3 節，ウチワカズラの発見（やりあて）

上述した「ピソフォラ」以外にも、熊楠による植物の発見（やりあて）はある。

1909 年 4 月 25 日[日]　晴

朝八時頃起。大工来り棚作る。午後成る。狂言記しらべ石神の条見出す。昨夕川島氏所贈菌二種画く。夜おそく迄かゝる。此間片町へ之、入湯（十一時也）。菌標品作り、畢れば鶏鳴也。臥内アービングのアストリア読む。

此昼、石友の昨日乱暴せし男、国へ帰るとて立退く。

此朝夢に、野田馬吉つれ浦上とも覚しき処より田原へありく。壮年の人の家に入り話す。沙浜の道傍魚納屋如きに、ヒルガホ如くにして葉上に蘿蔔の実の内の白毛如き銀色の茸毛密生し、花はコチニール赤なるを見る。予心にこれは Ipomaea capus…と思ふ。次に此羅甸名山羊に縁ある故かゝる毛（山羊毛如き）ありと心づく。さめて後名彙見るに pes-caprae なり。（これ迄四月二十五日記）[追記]〈後に八月十四日頃栗山昇平氏にきく。同氏串本にて此植物をとれりと。九月二日夜記す。〉

Query.　夢には述事前にして理由あとより分るか。

ヒキ六竹にて溝かき、さがしにゆく。

夜石友の小僧梅来る。ヒキ六大に喜び遊び、ねむたきを眠らず久くおき居り、終に臥

す。其後梅は去る。

ヒキ六サムイヨーといふ。又夜自らの指しごき、チヤンといふ。

（『日記3』p.266）（傍線―唐澤）

熊楠は「pes-caprae」（グンバイヒルガオ／ウチワカズラ／学名 Ipomaea pes-caprae Sweet）という植物を「発見」（やりあて）している。その経緯はこうである。夢において熊楠は、田原（串本町田原村）の浜辺近くで、ヒルガオのような葉の上に蘿藦（ガガイモ）[3]の実の中の白毛のようなものが密生しているのを見た。その花は赤色だった。熊楠は、これは「Ipomaea capus…」であると思った。そしてこの植物は、山羊のような白い毛があるから、ラテン語の山羊（の足）（pes-caprae）にちなんで、このような名なのだろうと思ったという（ウチワカズラの葉は先が割れて山羊の足のような形をしている）。夢はここまでである。そしてこの夢の後、熊楠は栗山昇平という人物が串本でこの植物を採集したと聞いた。

同様の内容が論考「千里眼」にも見られる。

またウチワカズラは、朝顔属の一種、熱国の海辺に生じ、小笠原島、琉球にもあり。四国、九州の暖地にもありや否、予は知らず。しかるに、一昨年春夢に、紀州古座（こざ）と串本の間の海浜の林間に、白き羊毛を密生せる葉ある朝顔生えたるを見る。ウチワカズラのラテン名を山羊の足（ペス・カプラエ）といえば、羊の足と毛を取り違えてかかる夢を見しならん、と日記に控え置く。さて後に聞くに、玉置という人、串本近傍にてウチワカズラを採集せり、と。また今年春、富田（とんだ）の朝来帰（あさらぎ）君取りし品を宇井縫蔵氏方で見たり。

[1911 年 6 月 10 日～18 日「千里眼」『和歌山新報』]（『全集 6』p.9）（傍線―唐澤）

ここでは採集者が、「栗山昇平」ではなく「玉置という人」になっている。しかし内容は

[3] ガガイモ科の蔓性多年草。長い根茎がある。葉は長心蔵形、茎葉を切れば白汁が出る。夏、葉腋に淡紫色の葉をつける。果実は長さ 10cm 余の楕円形、種子に白色の長毛がある。種子を乾燥したものは生薬の蘿藦子（らまし）で、乾燥とともに強精薬とし、また種子の毛は綿の代りに針さしや印肉に用いる。

[広辞苑第 5 版 2004：電子辞書版]

「日記」とほぼ同様である。

これはまさに熊楠の「熟練能的(skilled)tact」のなせる技であった。この発見（やりあて）は、ウチワカズラ(あるいは植物全体)に関する膨大な知識がなければ不可能な事柄であった。熊楠は、上記論考の初めに述べているように、ウチワカズラの科・属・種の植生に関する詳細な知識を持っていた。いや「持っていた」と言ってしまっては、軽すぎる。「日々並々ならぬ努力をして蓄え続けていた」と言うべきであろう。しかし、そのようなウチワカズラに関する様々な知識は、熊楠の頭の中ではまだ表面上の知識であり、つまり個々が独立した「諸細目」としてあった。例えば、我々は、英単語を個々何百、何千と記憶し、さらに独立に英文法を覚えるだけではなかなか英会話をマスターすることはできない。それはまだ表面上の知識なのだ。しかし、そのような、つまり知識を蓄える努力は必要である。そしてそのような努力を続けることによって、ふとした時、それらの記憶は我々の内で「統合」される。その結果、英会話が以前より急にできるようになったりする。つまり我々の内で「創発 emergence」が起きるのだ。

筆者は、いわゆる「脳科学」・「神経学」に暗い。しかし、「統合」とは脳のニューロンがつながり、新たな回路を作りだすようなイメージをもっている。一度つながれば、それは意識せずとも事柄を自然とスムーズにこなすことができるようになる。自転車の乗り方然り、ピアノの演奏然りである。

自転車の操縦を例に挙げてみよう。個々バラバラの自転車に関する細かい知識、例えば、①右足でペダルを漕ぐとき左足は少し力を抜く、②右に曲がるとき重心は右に傾けすぎず、左のハンドルを右前に出す、③止まるときはブレーキを握り、ペダルを漕ぐのを止める……など、これらの自転車操縦の知識は知っておくに越したことはない。しかしそれは、練習を始めた時だけで十分である。このような知識と絶え間ない練習（五感を用いた知識の獲得）の結果、我々は自転車をスムーズに乗ることができるようになる。それはある日ある時、急にできるようになったりもする（＝「創発」)。それは我々の内で、自転車操縦に関する個々の知識（諸細目）が「統合」されたからだと言うことができる。いつまでも自転車の操縦に関する個々の知識や、乗っているときの筋肉の動きばかりに意識を取られていては、スムーズに乗りこなすことはできない。

つまり、個々の知識を「包括的」にまとめ上げる（統合する）ことが重要であり、それ

は人間（生物）に備わった能力でもある。しかし、何もせずにその能力を発揮することはできない。まずは知識の吸収が必要なのである。そして対象へ接する際の集中力（対象の内部へ入り込むほどの強力な集中力）も必要である。知識は、初めはバラバラであっても一定の段階で「統合」される。その「統合」を我々は普通、意識できない。それは多くの場合、無意識下で行われるからである。

熊楠は、我々の想像を絶するほどの、驚異的な記憶力を持っていた。同時に驚異的な集中力、熊楠の言葉で言えば「脳力」も持っていた。熊楠は睡眠中、夢の中で行われていた知識の「統合」を見過ごさなかった。注意深く観察し日記に記録した。我々が「何となくできてしまった」・「何となく見つけてしまった」と言って見過ごしがちな、無意識下（特に夢）における知の「統合」のプロセスを、熊楠はこのウチワカズラの発見（やりあて）において示してくれているように思われる。

つまり、ウチワカズラに関する、様々な知識・情報（諸細目）＝〔温暖な地域―小笠原諸島や沖縄にある珍種―串本辺りの海岸―白い毛を密生している葉のある朝顔―山羊―山羊のラテン名―Ipomaea capus…〕が、熊楠の内で連想ゲームのようにつながったのだ。熊楠は、夢の中ではまだそれがウチワカズラだとは分かっていない。目が覚めた後に熊楠は、それは「ウチワカズラ pes-caprae」のことだと文献を調べ確認している。そして夢の通り、この珍種は串本辺りで採集されるに至る。

第 4 節, 主客合一による「やりあて」

筆者は「熟練能的 tact」による「やりあて」のプロセスを上述した。それは、いわば創造的な事柄を成し遂げる方法であった。しかしその方法とは、本当に全て〔図 14～16〕のプロセスだけに当てはめることができるのだろうか。これ以外にも、全く異なる創造の方法はあるのではないだろうか。以下ではこの問題を中心に論を進めていく。

例えば、画家が描いている絵と一体化し、素晴らしい作品を創造するとき、そこには経験や知識によって編まれた密なる「網」で対象の諸細目を掴み取ったり、それらを「統合」したりといったプロセスは省かれてしまっているのではないだろうか。一体化と「ひらめき」、そして行為は同時に行なわれている。それは西田幾多郎（1870～1945 年）の言う

「物となって見、物となって行なう」、つまり「行為的直観」と呼べるものかもしれない。そこには（瞬間的な）自我の滅却があり、主客合一がなければならない。そして主体と客体の「分離」は行なわれないまま、即行為は行なわれる。その結果、何か創造的な事柄を「やりあて」ることができるのである。

確かに〔図 14～16〕は、例えば、ふとした瞬間の「ひらめき」（例えば、思いがけない発見や予知夢）を示すものとしては、間違ってはいないと思われる。なぜなら、ふとした瞬間の「ひらめき」は、主体が対象に「indwelling」し、「諸細目」を捕らえて戻ってきたとき、ある一定の時間を経てから起こるものだからである。つまり「諸細目」が「統合」され、何かがひらめくのは夢の中であったり、全く関係ないことをしているときであったりする。さらに、ひらめいてから行為へ移る時間も同時ではない。また「ひらめき」は、主体の意志（熊楠は主体の強力な意志を特に「Will」と呼ぶ[4]）によって行為に移される。つまり「indwelling 即ひらめき」でもないし「ひらめき即行為」でもない。それぞれには時間差が生じているように思われる。

一方、芸術行為や創作行為においてはどうだろうか。例えば画家は、描きたいと思う対

---

[4] 熊楠の言う「Will」とは、単なる「意志」や「意欲」以上のものであった。1903 年 12 月 2 日付日記に以下のような記述がある。

> 此夜厠に之き紙求るに、マッチすることを思ふて、（マッチ手になし）息吹くこと。これにより見れば、行為は間違ひながらも Will より出るなり。Will ありて必ず行為あり。その行為色々の内、用に的するもの常存。
>
> （『日記 2』p.386）（傍線―唐澤）

夜、厠へ行った熊楠は、紙を手にしようとする。そのとき、マッチを擦ることと間違えて、手に息を吹きかけてしまったという。この「行為」は間違えている。しかしこのような「行為」というものは、自分の意志「Will」から生まれたものである。間違うこともあるが、さまざまな「行為」の中にはその目的に合うものが必ずある、と熊楠は言う。つまり熊楠は、「Will」があれば、いずれ成功への道へ通ずるということを言いたかったのだ。また、熊楠が『燕石考』を書くにあたり描いた「燕石関連図」（1903 年 3 月 20 日付日記）に、

> この式にて、燕窠中の石と相思子の間に真性の関係あるを知る。知り中（あた）ればよいが、中らぬも誤に非ず。
>
> （『日記 2』p.334）

と書き残している。この一文を、橋爪博幸はこう解釈している。

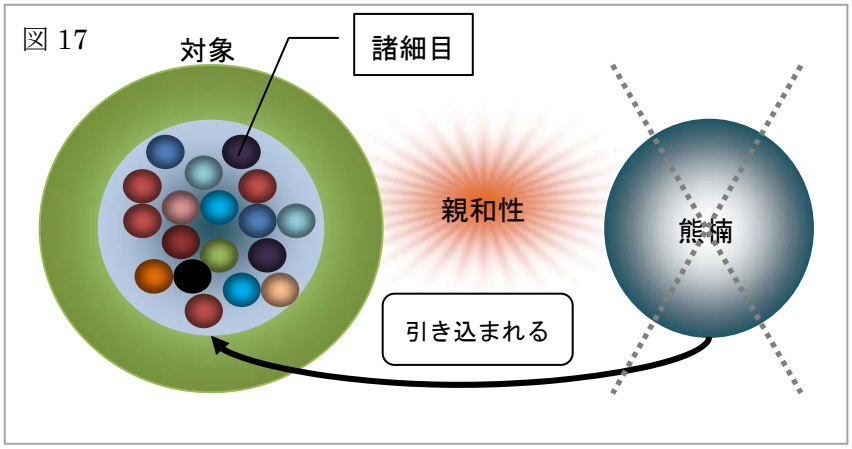
> 「燕石」の起源はもはや不可知である。それでも、それを解明しようとひとつの行為として作図を試みた。描かれた図はその伝承を正しく説明するのかどうかはわからない。しかし作図するという行為は、まぎれもなく自分の「Will」から生まれたひとつの行為であって、それは未知なる筋道をいくための確実な第一歩である。行為すること自体は誤りではない。ひとつの道筋であることに変わりはない。
>
> [橋爪 2005：249]

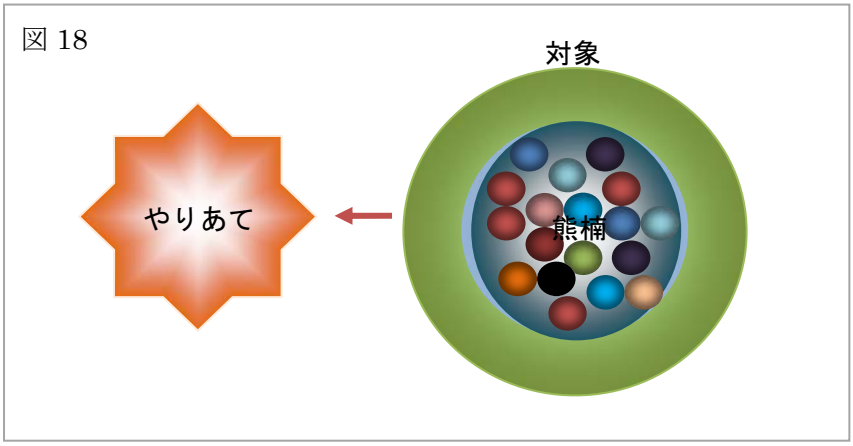
つまり「Will」とは、我々が未知なるもの、不可知と思われる事柄に出会ったとき、諦めたり、失敗を恐れたりすることなく、それを楽しむがごとく積極的に行為に移そうとする、強い「意志」である。それこそ「やりあて」るための重要な要素なのである。あえて「意志」や「意欲」とは言わずに「Will」と言ったのには、それに特別な強い意味を持たせたかったからであろう。また熊楠は、以下のようにも述べている。

> 洋人已に万物は意 Will に結局す。Will は万相自ら顕れ万物自ら生死するの原基たるの説あり。
>
> [1902.04.02 付土宜法龍宛書簡]（南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究第 7 号』、南方熊楠顕彰館 2005、p.166）

どんなものも、主体の「Will」があってこそ現れる。それは生と死をも決定付けるほど強力であり、言い換えればそれは現在そして未来を作り出す基であり、今を在らしめ、新たな未来を作り出す「力」であると言えるかもしれない。

象に引き込まれ、対象と一体になり、あるいは描いているキャンバスと一体になり、そのまま絵筆を動かす。ピアニストが即興で演奏するとき、彼らは音楽に「indwelling」し、ピアノと一体化し、そのまま演奏をしている。そのとき主体が音全体を包括的に捉え「統合」し（comprehend）、そして「ひらめき」が起こり……といったプロセスは省かれてしまっているように思われるのである。つまりそれは「直観即行為」であり、「行為即直観」である。図化すると、以下のようになると考えられる。





まず主体は自我を滅却し、対象と一体化する（しかし、それは決して永続的なものではない）。それは、主体の能動的な意志というより、対象との間の「親和性」（ひきつけあう要素）を背景に、引き込まれる感じであるように思われる〔図 17〕。〔図 14～16〕では、主体は対象へ「indwelling」し、対象の構成要素（諸細目）を「密なる網」で掴み取り自己へ帰ってきたときに「ひらめき」が生じるということを説明した。一方、〔図 17、18〕においては、そのような主客の分離は起こらない。主客合一のまま「ひらめき」は起こり、行為がなされるのである〔図 18〕。いわば「直観即行為」であり、それは主体の意志というよりも、むしろ対象の内側からの働きかけのようにも思われる。それは西田幾多郎の「物となって見、物となって行なう」という「行為的直観」と言うことができるだろう。そこには瞬間的な自我の滅却があり、主客合一がなければならない。そして「分離」は行なわれないまま即行為はなされる。その結果、何か創造的な事柄を「やりあてる」ことができるのではないだろうか。

因みに、「やりあて」の後、主体は再び元の自己へと戻らなければならない。もし仮に、その「退路」を見失ってしまえば、それは自我の死を意味すると言える（この点に関しては第 6 章及び終章で詳述する）。

第 5 節，ひきつける要素あるいは親和性

創造的な事柄を成し遂げたり、発見したり、作りあげたりする（「熟練能的(skilled)tact」による「やりあて」）ためのプロセスには、〔図 14～16〕及び〔図 17、18〕で見た通り、少なくとも二通りあるように思われる。そして熊楠のいわゆる「やりあて」論は、熊楠自身の経験としては、予知夢などによる発見などが主であり、一方熊楠が例を挙げて説明するもの、つまり熊楠以外の人物による「やりあて」の説明では、熊楠はしばしば〔図 17、18〕のような創作・芸術行為に関するものを取り上げているのである。熊楠が「やりあて」に関してどのような事例を挙げているかは次節で詳述する。

ここでは、〔図 14～16〕及び〔図 17、18〕の両者において欠かすことのできない要素、主体と対象との「親和性」について、熊楠と粘菌を例に考察してみたい。

〔図 14～16〕においても〔図 17、18〕においても、主体は対象にまず関心を示し注目する。熊楠は、粘菌に、特にそのドロドロとした原形体に特別な関心を示した。関心・注目は、主体が向かい合う対象に何らかの心をひきつける力を感じるときに生じる。このように主体が対象に対し、魅力・「親和性」などを感受しなければ、主体はその対象に「indwelling」や自我の滅却による主客合一などを行なうことは難しい。

熊楠は粘菌に「indwelling」していた。顕微鏡でそれを観察することは勿論、膨大な量の「写生」も行なっていた。熊楠は将来「日本産の粘菌図譜」を完成させるという夢を持っていた。しかし、おそらく何百枚にも及んだと思われるその図譜は、描く量があまりにも膨大であったことに加えて、精神を病んでいた愛息・熊弥によって修復不可能なまでに引き裂かれ、結局夢と消えてしまったという。

熊楠と粘菌の「親和性」とは何か。それは極端に対立する要素を内に含みつつも、自己を保っているということである。しかもその対立する要素は、互いをつぶしあったり、マイナス要素になったりするどころか、それらは熊楠の大きな魅力となっている。熊楠は、

まさに「粘菌的性質」の持ち主であった。

粘菌は動物と隠花植物の性質を併せ持ち、スライム状になったり、キノコのように硬くなったりしながら生と死を繰り返す。それは考えれば考えるほど多様で複雑、不思議な生命体である。このように、一見対立するさまざまな要素がこれほど多重に共存している生物が、他にいるだろうか。もし、そのような生物（人間）が存在するとすれば、それは南方熊楠その人であろう。

熊楠は「西洋と東洋」の膨大な知識を身につけていた。驚くべき記憶力で多数の言語を操ることもできた。また現在残されている書簡から、彼がバイセクシャル的性質、つまり「男性性と女性性」を併せ持っていたと主張する研究者もいる。また熊楠は「癲癇（てんかん）」であった。そしてそれがいつ精神に荒廃をきたすかもしれない病であることを、熊楠自身認識していた（正常と異常）。「西洋と東洋」・「男性性と女性性」・「正常と異常」――これらは対立するどころか相交わって南方熊楠という人物を成り立たせていた。

しかし、熊楠が粘菌に「親和性」を感じとり、その研究にのめり込んだ理由を、「熊楠自身が粘菌的性質を持っていたからだ」と結論付けることは、実は簡単なことである。その背景には、もっと奥深い何かがあるように思われる。では熊楠は粘菌に何を見、何を映していたのだろうか。なぜここまでその生命体にひかれたのだろうか。

熊楠は青年期、近代科学に非常に傾倒していたことがあった。当時最新の科学理論であった「進化論」などにも興味を持ち、特に各地を転々としたアメリカ時代、大英博物館に通いつめていたロンドン時代は､後世に言われるような民俗学者や粘菌研究者というより、むしろ自然科学者を自認していたふしがある。アメリカ時代には､『ポピュラー・サイエンス・マンスリー*Popular Science Monthly*』という雑誌を熱心に購読したり､『科学論文集』と名付けた抜書ノートなどを作成したりしている｡またロンドン時代には自他共に認める、社会科学の先駆者ハーバード・スペンサーの研究者でもあった。ロンドンのハイドパークで行われていた無神論者の演説を聴きに行くこともしばしばであった。また当時ロンドンで流行（はや）っていた降霊術やオカルティズムを徹底して批判する書簡などを、友人の土宜法龍へ送ったりもしている。そこには自然科学者・南方熊楠の姿を見ることができる。

では論理的・分析的・理性的であるべきはずの科学者が、 なぜ「粘菌」、特に原形体という神秘的あるいは不安定で曖昧なものに特別な関心を持ったのか。そこには「粘菌的

性質」の一言では片付けられない、彼の「無意識的人格部分」とでも呼ぶべきものが潜んでいるように思われる。

――熊楠は「粘菌」という他者に、自身に潜むいわば「アニマ anima」を投影していたのではないだろうか。

> ペルソナとアニマは相補的に働くものである。男性の場合であれば、そのペルソナは、いわゆる男らしいことが期待される。彼の外的態度は、力強く、論理的でなければならない。しかし彼の内的な態度は、これとまったく相補的であって、弱弱しく、非論理的である。
>
> [河合 1967：197]

ユング心理学において「アニマ」とは、男性の深層心理に潜む女性的性質を言う。通常「アニマ」は人格化されたイメージとして現われたり、実際の女性に投影されたりするが、物事や物体がその役割を果たす場合もある。熊楠のそれは表面上の分析的・論理的・理性的な科学者的態度（ペルソナ persona）とは対極にある、彼の内に秘めていたとてつもなく大きな欲望であり、あるいは暗い否定的な側面を持ったものでもあった。

熊楠の「アニマ」はとてつもなく大きく暗く、そのドロドロとしたいわばエロティックな欲望は当然、明るい顕花植物より隠花植物、あるいはそれよりもっと暗く猥雑なイメージをもつ粘菌、その中でも特に、状況によって色や形を自由自在に変化させる、混沌とした原形体に投影されていた。

熊楠には、そのような生命体がある種恐ろしくも魅惑的に映っていたに違いない。そしてその生命体との積極的な「対話」を通じて、熊楠自身の本性、あるいは人間の本質を深く知ろうとしたのではないか。熊楠は論理的・理性的な科学者を自認していたロンドン時代とは異なり、粘菌を本格的に研究し始めた那智時代以降は、自身のエロティシズムをますます隠すことなく受け入れ、また広く世に発表していく。鄙猥なるもの、猥雑さの中にこそ人間の本質があるのではないかとさえ考えるようになる。しかし、このような考え方が、柳田国男との決裂の一因となったとも言われている。

ともあれ、熊楠は粘菌観察、いや粘菌潜入（indwelling）を通じ、自己の本性を深く見

つめていたということができる。

第 6 節，熊楠の挙げる「やりあて」の事例

熊楠は、日記及び書簡において、さまざまな「やりあて」の体験を記している。あるいは自身の体験だけではなく、他者の「やりあて」の経験を例として挙げて説明もしている。以下は、熊楠が挙げている事例の主なものである。

【熊楠自身の主な体験（A）】

(1) 標本用の薬品の調合の割合が的中しうまくいく [5)]

(2) 予知夢によるピソフォラの発見（以下で詳述）

(3) 予知夢によるナギランの発見（本章・第 9 節参照）

(4) ふと友達の突然の来訪を予知する [6)]

【熊楠が挙げる主な例（B）】

〈a〉石切り屋が寸法を測らなくともうまく切ることができる（[1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡] 本章・第 1 節参照）

〈b〉絵画において分量を量らなくても師匠はうまく調合できる（以下で詳述）

〈c〉芸妓が、三線を楽譜なしで隣人の声に合わせて演奏する（以下で詳述）

熊楠自身の経験（A）は、(1)を除いて「予知」や「発見」の事例が多い。一方、熊楠の挙げる例（B）は、いわば創作・芸術に関するものである。

---

5) 例えば、以下のような記述がある。

現に今の人にも tact というがあり。何と訳してよいか知れぬが、予は久しく顕微鏡標品を作りおるに、同じ薬品、知れきったものを、一人がいろいろとこまかく斗(ほか)りて調合して、よき薬品のみ用うるもたちまち敗れる。予は乱妨にて大酒などして、むちゃに調合し、その薬品の中に何が入ったか知れず、また垢だらけの手でいろうなど、まるでむちゃなり。しかれども、久しくやっておるゆえにや、予の作りし標品は敗れず。

[1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡]（『全集 7』pp.366-367）

6) 1904 年 4 月 2 日付の日記に以下のような記述が見られる。

……プレパラートに作る内、有馬市松氏来ると思ふ。暫時にして【有馬】氏来り声す。始は氏とは思はず、しばらくして分る

（『日記 2』p.422）（【 】内―唐澤）

これは、いわゆる友人の来訪を「予知」したものである。

上述したように、「予知」や「発見」に関しては、〔図 14～16〕で説明することができる。例えば、先述したが、ここでもう一度、熊楠の予知夢による発見の事例を見てみよう。

> 一例をいわんに、数量のことは、予期たしかなれば例までもなし、tact のことをいわん。明治二十三年、予、フロリダにありて、ピソフォラという藻を見出だす。これはそれまでは米国の北部にのみ見しものなり。さて帰朝して一昨年九月末、吉田村（和歌山の在）の聖天へまいれば、必ず件（くだん）の藻あると夢みること毎度なり。よりて十月一日、右の聖天へまいりはせぬが、その辺をなんとなくあるくに、一向なし。しかるに、予の弟の出務中なる紡績会社の辺に池をほりあり。（これは小生在国のときなかりしものゆえ、小生知るはずなし。）それに黒みがかった緑の藻少し浮かみあり。クラドフォラという藻と見えたり。それは入らぬゆえ、ほって帰らんとす。されども、何にもとらずに半日を費やせしも如何（いかが）なれば、どんなものか、小児にでも見せて示さんと思い、とりて帰る。さて顕微鏡で見るに、全く夢に見しピソフォラなるのみか、自分米国で発見せしと同一種なりし。
>
> ［1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.369）（傍線―唐澤）

これを〔図 14～16〕に基づいて考察してみる。熊楠は、ピソフォラという藻に関心を寄せ、注目していた。「なぜ北米にしか存在しない藻があるのか、なぜ同じ北半球である日本にはないのか」と日々考えていた。熊楠が粘菌や隠花植物などに対して、特に「親和性」を感じていたことは前述した通りである。おそらく熊楠は、その藻について色々調べていたであろう。ロンドンの大英博物館においてであろうか、それとも日本に帰ってきてからであろうか、どちらにしても熊楠はその藻に特別な関心を寄せて、様々な文献にあたっていたに違いない。そして調べる際には、対象に「indwelling」していた〔図 14〕。さらにそれまでの膨大な植物に関する知識の「網」によって、その藻に関する諸細目・諸情報を掴み、意識下で「暗黙的」に「統合」した〔図 15〕。その結果、夢において「近くに必ずある」とひらめいた。その「ひらめき」を信じ行動に移した結果、発見することができたのだ〔図 16〕。

この事例は「indwelling」→「統合」→「ひらめき」→「発見」という過程を経ており、

それぞれに大なり小なり時間差がある。やはりこれは、〔図 17、18〕のように主客合一と「ひらめき」、そして行為が同時進行で行なわれる、いわば「直観即行為」では説明することはできない。しかしこの藻の発見の事例は、「ひらめき」による独創的な、創造的な発見であることに変わりはない。

では（B）で示される例、つまり芸術や創作行為に関わる「ひらめき」はどのように説明できるだろうか。この言説も前述したがもう一度以下に記す。

> 画の具を合わすに、師匠と同じ分量を精細に計算して和合しても、師匠ほどの彩色は出ず。世間のこと数量や理屈のみで行けぬこと多し。…（中略）…されば数量の学識、万物に及ぼさぬ今日は tact（何と訳するか知れぬが、練熟能ともいうべきか、石切り屋がよそむきて話しながら臼の目を規則通りに角度正しく切り、何の音調の定則も譜表も持たざる芸妓が隣人のくだまく声に合わせて三線を鼓するがごときを tact という）ということ、もっとも肝心なり。東洋のことには tact まことに多し、西洋人にはこのこと少なし。
>
> ［1911 年 10 月 25 日付柳田国男宛書簡］（『全集 8』p.220）

ここで熊楠はいくつかの例を挙げているが、最も分かりやすい芸妓の例を検証してみる。これは〔図 17、18〕によって説明するのが適切かと思われる。

まず、芸妓は隣人の声に集中し入り込む。それは隣人の声に引き込まれるような状態とも言える。あらゆる雑念を捨て、その声、いや隣人そのものと一体化する〔図 17〕。そのときの彼女の自我は滅却されており、まさに「主客合一」の状態であると言える。そしてそのままの状態で、つまり〔図 14～16〕のように、対象の構成要素を「網」で掴み取り自己へ帰ってくるというプロセスは経ないで、「ひらめき」は起こる。そして「ひらめき」と同時に行為は成される〔図 18〕。隣人が次にどのような音程で歌うのかをひらめいたその刹那に三線を奏でなければならない。いわば「直観即行為」である。このプロセスには、〔図 14～16〕のような時間差はない。「一体化即ひらめき即行為」と言うことができる。

芸妓は、演奏（セッション）後、再び元の自己へと戻らねばならない。芸妓が、戻ることができるのは、彼女が元の居場所を心得ているからである。元の居場所――対象と極端

に「近く」も「遠く」もない、その**「中間」**たる、いわば「適当な距離」――その採り方（ポジション設定の仕方）を、暗黙的に知っている（身につけている）からこそ、芸妓は再び自己へと戻ることができるのである。つまり、それは「退路」を確保している、ということである。

第 7 節，発見的創造と芸術的創造

以上から、「熟練能的tact」（skilled）による「やりあて」のプロセスには少なくとも二通りあることが分かった。一つは、予知夢やふとした瞬間の「ひらめき」による独創的な発見であり、これは〔図 14～16〕によって説明をした。もう一つは、瞬間的に自我を滅却したときの「神来」あるいは「行為の自動化」、言い換えると、「主客合一」の状態でひらめいて、そのまま行為に移される芸術・創作行為である〔図 17、18〕。

筆者は、両者とも創造的事柄を成し遂げるプロセスとして、あり得るものだと考える。しかしその質は異なる。前者は「発見的創造」とでも呼べるものであり、主に世紀の大発見などと呼ばれるものは、これに当てはまるものが多い。例えば、ジュール・アンリポアンカレ（Jules-Henri Poincare、1854～1912 年）は、あるとき馬車に足をかけた瞬間、フックス関数における転換と非ユークリッド幾何学における転換は同じものであると直観的にひらめいたという。これはやはり〔図 14～16〕で説明するのが適当かと思われる。後者は「芸術的創造」とも呼べるもので、偉大な画家や音楽家の創作はこれに当てはまるものと考える。そして熊楠は、この両者を行なうことができる人物だった。

熊楠の挙げる、「やりあて」に関する彼自身の体験は、前述したように、「予知」と「発見」に関するものが多い。しかし、熊楠の周りの特に身近な人たちは、むしろ熊楠を〔図 17、18〕つまり「芸術的創造力」の持ち主であるかのように見ていた。例えば、熊楠の娘・文枝はこのようなことを述べている。

――先生は文章はどんな風にして書かれたのですか。

書き出したら決して反古ができないのです。書き損じて破ったりするようなことは一切ないのです。サーッと一気に書くんです、手紙でも原稿でもぶっつけで

[南方文枝 1981：13]

熊楠の書簡はどれも大論文と呼べるほどの量と質である。それを反古なしに書くというのは、驚異的である。熊楠は、書いている文字あるいは絵図と一体化していた。それと同時に書いている相手（書簡の宛先人）にも同化していた。例えば熊楠は、土宜法龍と頻繁に書簡をやり取りし、その思想を深化させていくが、熊楠が法龍にひきつけられたのは、その深層において「親和性」を感じていたからである。当時オカルティズムなどにも関心を示していた法龍に、自然科学者を自認していたこの時期の熊楠は、一種の嫌悪感を示したが、それは自分の深層心理に潜む願望・欲望の表われでもあった。その関係は熊楠と粘菌の深層における関係にも似ている。

熊楠の書簡は、単なる手紙ではなく、一つの著作と呼べるほどのものである。そしてその中には夥しい程の「智」が散乱している。そのような中で、例えば「南方曼陀羅」のように創造的な思想が生まれることもあったのだ。

熊楠の書簡を、著作あるいは作品と考えると、やはりそれは「芸術的創造」であるとも言える。書簡の相手あるいは自分の書いている文字に入り込み、自身が筆となり文字となり絵図となり紙となり、そのまま一気に書き進める。書くという行為と同時に「ひらめき」は起こり（行為即直観）、結果、独創的な思想＝「南方曼陀羅」などが生まれたのである。

第 8 節，ひらめきと創造的活動

ここまで、ひらめきと創造的活動のプロセスを二通りに分類して考察を行なってきた。一つは「indwelling」→「統合」→「ひらめき」→「行為」という段階を経るもので、筆者はそれを「発見的創造」と名付けた〔図 14～16〕。もう一つは自我を滅却し、対象と一体化することによるもので、「ひらめき即行為」による創造、「芸術的創造」である〔図 17、18〕。両者に共通する点は、主体と対象の間にお互いをひきつける「親和性」が生じていることであり、またそれは、対象が主体の鏡となっていると言っても良いだろう。そのとき、主体は自己を対象の中に見ている。

熊楠の「やりあて」は、一つのプロセスだけで説明できるものではない。少なくともこ

こでは二つのプロセスを見出すことができた。そして両者の相違点と共通点を明らかにすることで、熊楠の創造性の源泉に僅かながら近づくことができたと思われる。

本節を終えるにあたり、補足しておきたいことは、〔図 14～16〕及び〔図 17、18〕に関して、熊楠がまとまった見解を述べているわけではなく、また自らの「ひらめき」と創造的活動のプロセスについてこのような図を描いたわけでもないということである。これらはあくまで筆者が、熊楠の書簡・日記・著作などから、彼の対象との接し方を考察し、そこに見られるキーワードを包括的に紡ぎ合わせて作成したものである。しかし筆者は、今後の南方熊楠研究においてはこのような作業が最も重要だと考えている。熊楠は博覧強記であったが、その論に一貫性がないことが多いと言われてきた。しかしそれぞれの書簡・日記・著作には彼の智を知る上で決して見過ごすことのできない重要なキーワードが散在している。

我々南方熊楠研究者の役割とは、彼の書簡・日記・著作あるいは彩画などに散りばめられている、いわば「諸細目」を包括的に捕らえ統合し、彼の知の体系、ひらめきと創造的活動のプロセスを再形成していくことではないだろうか。そこには必ず、曖昧で明示化し難くとも、科学技術には決して真似のできない、人間特有のポテンシャルを知る重要な鍵が隠されているに違いない。

第 9 節，記述の相違

以下は「ナギラン」の発見（やりあて）に関する記述である。

> 1904 年 3 月 9 日[水]　朝晴、午後陰
>
> 朝今西氏ハガキ一受、ノーツ・エンド・キリス正月二十三日分着、予の答 Red Rag to a Bull；Vicissitudes of Language 出。午後多屋秀、常楠状各一出す。秀吉へハガキ一出す。それより河側歩しヂアンの滝に遊ぶ。ナギラン五株（一に実青きもの二顆あり）（此滝に此蘭あるべしと昨年より何の拠なきに思居しに今日ふと見当る。）エダウチ本宮シダとる。川の南岸にてミツマタ満開せるを取る。ナタネ満開せり。又アセボ如くにして花茎赤からぬものとる。

（『日記 2』p.413）（傍線―唐澤）

1904年3月9日、熊楠は、前年より「（特に根拠はないが）何となく」ヂアンの滝の近くにナギランがあると感じていた。そして実際に見に行くと5本発見することができたという。「何となく」予感していたことが的中したのだ。熊楠はさらに、3月21日に1本、3月23日に20本この珍種を得たことを日記に記している。

1904年3月21日[月]　快　寒風
午後Myers読む。夕ナギランとりにゆく。一本とる。丸石山腹西へ歩し南え直下し帰る。

（『日記 2』p.416）（傍線―唐澤）

1904年3月23日[水]　快
朝新街道に採集。（此前ジアンの滝にてナギラン二十株とる。）

（『日記2』p.417）（傍線―唐澤）

以下は、このナギランの発見についての法龍宛書簡である。

当熊野にナギランというものあり。伊藤圭介先生の祖師に当たる小野蘭山、当郡向島という地でとりしことを手記せるを予は知る。飯沼〔慾斎〕翁の『草木図説』にはその図説あり（見しこと少なしと見え、図も説も実物と多少ちがう）。それより誰も見しものなく、大学にも標本はなく、小説ごときことになりおり、学名もなし。しかるに今月八、九日つづけて予の宿前の禿山のある所にて必ずこれを得んと夢見る。禿山にそんなものある道理なく、この辺のものは蘭と見ればほり来たりて売るなり。故にそんなもののこるはずなし。あまりに幾度も夢見たるゆえ、九日午後その点に行きしに、果たしてナギランの実物（『図説』のは不完全のものなり、実物は『図説』の図よりははなはだ美大なり）五株をとる。その翌日いかにさがすもわずかに一株しかなし。よって右を然るべき人々に托し栽えしむ。しかるに本月二十三日朝、またなお往きて見

るべしと夢みる。そんなはずなしと思いながら往くに、右の五株とりし跡にまた十四株を得。

［1904 年 3 月 24 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.466）（傍線―唐澤）

日記では「何となく」感じていた予感が、この法龍宛の書簡では「夢のお告げ」になっている。因みに採集日と本数は 3 月 9 日に 5 本、3 月 10 日に 1 本、3 月 23 日に 14 本である。下に示す小畔宛書簡においても「夢のお告げ」による発見となっている。

扨此ナギランは小生近来夢の告により発見多し。…（中略）…然るに今年本月九日又夢に丸石山（小生の宿前の禿山）に行ばナギラン有るべしと夢み、これ迄勝浦辺で随分探しこりたから止んと思ひしが、一寸行き見るに果して五株あり。次に二十一日又異所にて一株とる。…（中略）…それより二十三日朝なほ始めと同一の所へ行けと夢み、もはや取尽してなきに極たことと思ひながら行くに、又絶大のもの二十株とる。

［1904 年 3 月 31 日付小畔四郎宛書簡］（南方熊楠顕彰会学術部編、『南方熊楠　小畔四郎往復書簡（1）』、南方熊楠顕彰館 2008、p.44-45）（傍線―唐澤）

小畔宛書簡における採集日と本数は、3月9日に5本、3月21日に1本、3月23日に20本となっている。

さらに、論考「千里眼」では、夢ではなく「（亡き父の）幽霊による啓示」となる。

しかるに予那智にありて、一朝早く起き静座しいたるに、亡父の形ありありと現じ、言語を発せずに、何となく予に宿前数町の地にナギランありと知らす。予はあまり久しく独居する時は、かかる迷想を生ずるものと思いて棄て置きしに、翌朝も、翌々朝も、続けて十余回同じことあり。件（くだん）の地は宿に近けれども、予がその時までかつて近づきしこともなかりしなり。さて縁戚の家の手代来たりしゆえ、このことを話し、共に往（ゆ）いて右の地を探るに、ナギラン一株を得たり。その日いかに探すも一株しかなかりしに、翌日予一人行きて十七株を得たり。その後追い追い探すに、その近傍にかれこれ四十株ばかりありしも、みな取らず、二十余本を取り、田辺と和歌山に送り栽（う）え

たるに、田辺のものは追い追い減りながら今もあり。夏に及び開花するを腊葉にし、去年牧野氏に贈れり。その時持ち行きし友人へ牧野氏の談には、土佐にもありとのことなり。ただし培養品か天然産かは知らず。

[1911 年 6 月 10 日～18 日「千里眼」『和歌山新報』]（『全集 6』pp.7-8）（傍線―唐澤）

上記における採集日と本数は、最初の日に 1 本、翌日 17 本、その後日に 40 本を見つけ、その内の 20 本を採集している。

以下はいわゆる『履歴書』と呼ばれるものである。矢吹義夫宛に書かれたものだが、熊楠はおそらくこれは世に出るものと意識して書いている。ここでもナギランの発見は「幽霊」によってなされている。

かくて小生那智山にあり、さびしき限りの生活をなし、昼は動植物を観察し図記して、夜は心理学を研究す。さびしき限りの処ゆえいろいろの精神変態を自分に生ずるゆえ、自然、変態心理の研究に立ち入れり。幽霊と幻（うつつ）の区別を識りしごとき、このときのことなり。

幽霊が現わるるときは、見るものの身体の位置の如何に関せず、地平に垂直にあらわれ申し候。しかるに、うつつは見るもの顔面に並行してあらわれ候。【図あり：省略】

この他発見せしこと多し。ナギランというものなどは（またstephanosparaと申す、欧州にて稀にアルプスの絶頂の岩窪の水に生ずる微生物など、とても那智ごとき低き山になきものも）幽霊があらわれて知らせしままに、その所に行きてたちまち見出だし申し候。（植物学者にかかること多きは従前書物に見ゆ。）また、小生フロリダにありしとき見出だせし、ピトフォラ・ヴァウレユリオイデスという藻も、明治三十五年ちょっと和歌山へ帰りし際、白昼に幽霊が教えしままにその所にゆきて発見致し候。今日の多くの人間は利慾我執事に惑うのあまり、脳力くもりてかかること一切なきが、全く閑寂の地におり、心に世の煩いなきときは、いろいろの不思議な脳力がはたらき出すものに候。

[1925 年 1 月 31 日付矢吹義夫宛書簡　いわゆる『履歴書』]（『全集 7』pp.31-32）

（【　】内、傍線―唐澤）

以上、ナギランの発見（やりあて）に関する記述を見てきた。

どうやら熊楠がナギランを発見したことは事実であるらしい。しかしその本数や、場所、さらに何によって発見したのかはそれぞれの媒体によって微妙に相違が見られるのである。

「日記」という極めて個人的記録においては、「ふとした思い付き」で発見したとなっており、客観的に大勢の眼に触れる「論考」（上述した通り『履歴書』も世に出ることを意識して書かれたものという点で「論考」に含めて良いであろう）においては、「幽霊が示してくれた」ことになっている。そして「日記」ほど、個人的ではなく、「論考」ほど、大勢の眼に触れることもないであろう「書簡」においては、夢によって発見したことになっている。「日記」＝ふとした思い付きによる発見、「書簡」＝夢による発見、「論考」＝幽霊による発見となっている。つまり、「日記」→「書簡」→「論考」の順に、「発見」のプロセスがよりドラマチックになっているのだ。亡き父が「幽霊」となってナギランの場所を示してくれたとは、何とも劇的ではないか。因みに発見した本数は、日記では〔5 本→1 本→20 本〕、書簡では〔5 本→1 本→14 本及び 5 本→1 本→20 本〕、論考では〔1 本→17 本→40 本〕となっている。論考においては、本数が日を経るごとに徐々に増えている。つまり論考においては、より分かりやすく、より劇的（ドラマチック）に本数は増えているのだ。

これらは熊楠による、いわゆる読み手を意識しての「パフォーマンス」だったのかもしれない。しかし、これら三つの媒体を比較し、一つ一つ齟齬を見つける作業を筆者はこれ以上行わない。筆者が最も重要だと考えることは、熊楠が、このナギランの「発見（やりあて）」において「偶然」の一言では片付けられない「何か」を感じていたことである。このような植物の発見は、決して「偶然」ではないのだ。日々の努力と熟練、そして対象（問題）へ強力な「脳力」をもって「indwelling」した結果なのである。上記『履歴書』に傍線で示した通り、熊楠はこのような「発見（やりあて）」は特に、植物学者には多いと述べている[7]。

---

[7] 熊楠は、植物学者だけではなく、生物学者もこのような「発見」（やりあて）を成すことが多いという。
外国にあった日も熊野におった夜も、かの死に失せたる二人のことを片時忘れず、自分の亡父母とこの二人の姿が昼も夜も身を離れず見える。言語を発せざれど、いわゆる以心伝心でいろいろのことを暗示す。その通りの処へ往って見ると、大抵その通りの珍物を発見す。それを頼みに五、六年幽邃極まる山谷の間に僑居せり。これはいわゆる潜在識が四境のさびしきままに自在に活動して、あるいは逆行せる文字となり、あるいは物象を

第10節，熟練能的tactによる「やりあて」の他の事例

熊楠の植物（生物）の発見（やりあて）の記述はまだある。「日記」に見られる記述を以下に挙げる。

1904 年 4 月 4 日[月]　雨

終日在寓、朝より午後三時過迄プレパレート十二枚一連を作る。Peridinium bipes 一個、昨夕丸石山腹の田中にとりしコンフェルヴァ中より不図見出す。前日来グリフィス及ヘンフレイの顕微鏡類典にて此種必ず見出んと其絵に出たる如きものを思ひ付居りしに、一昨日（勝浦）持来りしストラスバーガール等の植物教科書 p.313 fig. 239 と同きもの見出せる也【図あり：省略】。奇遇なり。……（以下略）

（『日記 2』p.422）（【 】内、傍線―唐澤）

熊楠は以前から、グリフィス&ヘンフレイ（Johon William Griffith & Arthur Henfrey）の『顕微鏡学字彙 *The micrographic dictionary*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋401.02]）の挿絵でPeridinium bipes（渦鞭毛藻）のようなものを見ていた。そして「この種は必ず見つかる」と思っていたという。すると一昨日勝浦（から利助〔南方酒造勝浦支店・番頭〕が）が持ってきたストラスバーガー（Eduard Adolf Strasburger）の『植物教科書 *A text-book of botany*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋440.101]）に載っているものと同じもの、つまりPeridinium bipesをふと見つけることができたのであった。

1904 年 4 月 18 日[月]　雨　旧上巳なり

終日在寓、朝プレパラートに昨夕所集藻作る。午後隣り東屋の裏の田中の小溜水より

現じなどして、思いもうけぬ発見をなす。外国にも生物学をするものにかかる例しばしばあることは、マヤースの変態心理書などに見えおれば、小生は別段怪しくも思わず。これを疑う人々にあうごとに、その人々の読書のみしてみずからその境に入らざるを憐笑するのみ。（弄石で名高かりし木内重暁の『雲根志』を見るに、夢に大津の高観音とおぼしき辺に到りて、一骨董店に葡萄石をつり下げたるを見、さて試みにそこに行きみしに、果たしてみすぼらしき小店に夢の通りの石をつり下げありしゆえ、買い得たりなどいうことあり。これを妄誕とせる人は、その人木内氏ほどそのことに熱心ならざりしか、または脳作用が異(かわ)りおるによる、と小生は思う。）

[1931 年 8 月 20 日付岩田準一宛書簡]（『全集 9』p.25）（傍線―唐澤）

多種の藻発見。ゴニウム・ペクトラル、ステファノスヰーラ・フルヴヰアリス（これは必ず雨中あるべしと思ひ、昨日一ノ滝辺へ、書籍に山中の岩穴の雨溜りとある故、それを求めにゆきしも見中(あた)らず。然るにクックの淡水藻編に pool とあるより思出して右の田中の水溜を探りしなり。）又緑色のヴルチセラ、此様のもの【図あり：省略】。[8]……（以下略）

（『日記 2』p.428）（傍線―唐澤）

熊楠は昨日、ステファノスフィーラ（stephanospara）という微生物（熊楠によると、これはアルプスの絶頂の岩窪の水に生ずる藻類だという）は、「必ず雨中にある」とひらめき、一ノ滝の辺の岩穴の雨溜りへ行った。しかしこの時はそこには見当たらなかった。だが、クック（Cook, M. C.）の『淡水藻編 *Introduction to fresh-water Algae, with an enumeration of the British species*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋 441.063]）にこの藻は pool つまり水溜り・小さな池にあると書いてあったことをふと思い出し、田中の小溜水から見つけた。

1904 年 8 月 26 日[金]　晴

昨朝浜宮にてとりし藻の内デスミヅ一あり、今朝之を求めプレパラート作りにかゝる。午後に至るも見出ず。

午後四時より天満川崎間の川崎橋より浜宮中村孝平氏を訪、不在。海浜歩し帰る。昨日浜宮に必ずイワタレソウあるべしと思ふ。果して今夕中村氏の近処官道の畑の石垣にて多く花さけるを採る。

これは前日酒飲みて同氏方を訪しとき、此辺石垣多きこと何となく串本に似たると思ふ。串本にて此草花なきを一昨冬見しによる。……（以下略）

---

[8] この日記に該当する記述は、1911 年 6 月 10～18 日『和歌山新報』に掲載された論考「千里眼」と 1925 年 1 月 31 日矢吹義夫宛書簡いわゆる『履歴書』にも見られる。（『履歴書』は本文中に掲載）

またステファノスフェラというは、一八五二年ごろ、ステファノスフェラ始めてドイツで見出だされ、次にラプランド、英国等で探出されしが、きわめて稀有の微細なる藻にて、一八九〇年、予米国に留学のころずいぶん学者多かりし米国にすら見出ださざりき。…（中略）…しかるに、予、明治三十七年四月十八日、宿所にありて偶然、隣の裏口の田水にこの物ありと感得し、物は試しとその所に趣き、小瓶に水を取り帰り、鏡検せる第一点滴中にこの奇藻あり。

[1911 年 6 月 10 日～18 日「千里眼」『和歌山新報』]（『全集 6』p.8）（傍線―唐澤）

（『日記2』p.459）（傍線―唐澤）

熊楠は昨日「浜宮に必ずイワタレソウがある」とひらめいた。すると今日の夕方、浜宮にいる中村孝平氏が近所の畑の石垣でイワタレソウを見つけたという。この夕方、熊楠は中村氏を訪れたが不在だったようだ。熊楠は以前、イワタレソウを串本で見たことがあった。そして前日、浜宮を訪れた際、その場所が何となく串本に似ていると思っていたという。

※

「此種必ず見出ん」・「これは必ず雨中あるべし」・「必ずイワタレソウあるべし」と、熊楠はある時ふと思いついている。この「ひらめき」に確かな根拠はない。しかし、熊楠はこれらの珍種が必ず「ある」と直観的に確信していた。それは無意識からの呼びかけのようである。これらの植物・生物に関する膨大な知識が暗黙的に「統合」され、「ひらめき」につながったのだ。そして熊楠はその「ひらめき」に従うことで見事に「やりあて」たのである。

因みに「直観」とはラテン語で「intuitio」であるが、それは動詞「intueor」すなわち「in」（内で）、「tueor」（観る）に由来する。つまり「直観」とは、内側から知る方法、対象に入り込み、内在し、そこに潜む根本原理を直に観ることだと言える。

第11節，生得的tactによる「やりあて」―身近な人の死を予知する―

熊楠は「生得的(innate)tact」も持ち合わせていた。それは特に、身近な人の、「死の予知」として発揮されている。この「予知（やりあて）」には熟練能は必要ない。むしろ、生まれ持っての鋭い感覚がものを言う。熊楠がこの「生得的(innate)tact」に気づいた発端は、「日記」から推測するに、おそらく母の死に関する「予知夢」である。

1896年4月13日[月]

朝父の尸を夢む。母も側にあり。已にして七時頃、国元より母の訃音申し来る状二通、及葬式写真六枚うけとる。

（『日記 1』p.385）

夢に父の尸を見た。側には母もいた。目覚めて後、国元から母の訃報を伝える状と葬式の写真が届いたという。

父の死に関しても、日記には記していないものの、書簡において以下のように述べている。

> 私の父は（父のこと申すもおかしいが）寒邑の里正の子にて、十三のときに志を発し、村を出て、いろいろ難苦して、今の南方の家に入りしとき、家財悉皆（しっかい）売りしに今の一円八十銭ばかりしかなく、それで商売致し、とにかく只今は名前ばかりでも近郷の人々に知れしものとなりおり、平生例の女ぐるいなどということ一切なく、六十四のときまで、倉の米などはきあつめて売り候由。昨春、小生フロリダに八百屋を営み、三度まで西インド諸島に発途しおり候内、腕痛むとて湯治に行き、病を発し和歌山に返り、八月十四日死亡。私、ニューヨークの旅館にありしとき、三度まで父死服して坐すと見て、はや父は死せりと心得、父の伝を和文にて作り……（以下略）
>
> ［1903 年？　日付なし土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.237）（傍線―唐澤）

ロンドンへ向けて出発するため、ニューヨークの旅館に滞在していたとき、熊楠は三度も「父が服して坐す」ところを見たという。熊楠は、これによって、父はもはや死んだのだと心得たというのだ。日記にはこれに該当する記述は見当たらなかった。これ以上、この真偽を確かめる術はない。しかし、次節に示す事例はどうであろうか。

第12節，夢・幻・幽霊

> 1904 年 3 月 28 日［月］　雨
>
> 朝 Myers 読乍ら睡る。枕本に銀貨、銅貨、諸種無数あり、それを幾度も数へ、ふとんをまくれば又多くありとみて、さむれば正午にて、牛肉持来る為宿婦火入れに来る。吉夢はみだりに語らずといふことを思い出し、急に此事語らざりし。可笑。

午後 Myers 読、今西氏状一受。

右夢の前に、予の室外障子のあちら（椽先）へ色川の辺の人二人来りはなしす。大坂に行き失意の由なり。予之を叱す。気の毒の由にて、今度は予の室の次室乃右の椽先と正反対の所にて又はなしすと見ゆ。うつゝにはSpace又方角あり、夢にはなきにや。

[追記]〈又平助も枕本に来り黙し坐す。（記臆のまゝ拾月二日記。平助死しは前日（九月十二日）利助に聞。死し月日未だ知ぬ内に之を記付る也。)〉

又夢は見る人の体長と直角に見る。うつゝは体長と平行乃ち地平に直角に見るにや。

夜臥内 Myers 及グベルナチス動物志怪よむ。

本日迄所得熊野菌

袋入	九百十七	
画添	三百六十	新セリス　六
変形菌	卅七	
〆帰国より	二千二百六十六	

一時に二の夢見ること。

（『日記 2』p.419）（傍線―唐澤）

熊楠の枕元に平助が黙し座していたという。まるで「幽霊」のようである。よく、人が死ぬときに親しい人の枕元に現れるというが、ここで平助はまさに熊楠の枕元に現れている。そして、その年に平助は死去している。しかしここで注意しなければならないのは、この平助が「枕本に来り黙し坐す」というのは、[追記]であるという点である。およそ七ヵ月後の10月2日に[追記]しているのだ。

1904 年 4 月 16 日[土]　雨

終日在寓、朝眠りかけし処え秀吉来る。那智へ来りしが、村役改選とかにて一同天満へ之く由にて、これより引還すなり。秀吉病気快方次第郷里へ一寸帰る由、之に託し多屋氏え拾円四十八銭の為替おくる。

三月十八日秀太郎氏書附。一円五十銭デッキグラス、二十六銭オブエットグラス、三十二銭テレビン油、四円四十銭プレパレート入小箱二十個代、〆六円四十八銭。外に

今度頼しプレパレート入小箱二十代四円四十銭の内四円払ふ。のこり四十銭及樟脳代一円かり也。

午後臥し眠る。平助来り話す。宿屋へ客九人来り、狭しとて予の隣室に入れんとするを、予不服の色あり、平助又同説と見る内さめる。平助枕元に畳に垂直に坐しあり。うつゝなり。さむれば宿に餅つき前にてさわぎ居る。又なにか漢文を夢み一々記せんと心がけ読むに従ひ忘れゆく。夜臥内にてグベルナチス読む。

今西氏ハガキ一受く。

（『日記 2』p.427）（傍線―唐澤）

しかし、その平助の「幽霊」を見て一ヵ月もたたないうちに、今度は明らかに平助が熊楠の枕元に現れている。これは[追記]ではない。平助は熊楠の枕元に、畳に垂直に座していた。熊楠によると地平に垂直に現れるものは夢ではなく「幽霊」であるという（第 3 章・第 2 節参照）。

しかし、熊楠の「うつつ」の使い方にはしばしば混乱が見られる。熊楠の記述において「うつつ」は「幻覚」であったり「幽霊」であったりする。また「うつつ」は顔面に平行に現れると言っていることもあり、上記日記のように「うつつ」が垂直に現れると言っていることもある。「うつつ」とは夢なのか「幻覚」なのか「幽霊」なのか。その使い分けにおいて熊楠自身にも混乱が見られる。[9]しかし、見方を変えれば、熊楠にとって「現実（うつつ）」

---

[9] 熊楠の論考「千里眼」には、幽霊と夢に関して以下のような記述がある。

かくて時間、郵便物の到着、近いうちに死すべき人、その他いろいろ言い中（あ）つること上手なり。追い追いは白昼にも幽霊を見るようになり、示現し教えくれる者が、幽霊か夢か分からぬこととなりしゆえ、いろいろと攷察してついに大発明とみずから惟う結果を得たり。そは、人間は生来直立を常とするものなれば、夢に見る一切の現象は、坐臥とも夢見る人の顔面平行して見（あら）わる。換言すれば、自分の顔面に直角をなせる平面を舞台として見わる。しかるに、睡裏ならぬ醒覚中に見わるる幽霊はどは、見る人の顔面の位置方向の如何（いかん）を問わず、ただただ地面また畳面を舞台として見わるという一事なり。

[1911 年 6 月 10 日～18 日「千里眼」『和歌山新報』]（『全集 6』pp.9-10）（傍線―唐澤）

熊楠によると、夢とは、坐臥ともに夢を見る人の顔面に平行に現れるものだという。一方、「幽霊」は見る人の顔面の位置方向の如何を問わず、地面に垂直に現れるという。

さらに、1904 年 3 月 28 日付の日記には、

1904 年 3 月 28 日[月]　雨

又夢は見る人の体長と直角に見る。うつゝは体長と平行乃ち地平に直角に見るにや。

（『日記 2』p.419）（傍線―唐澤）

という記述が見られる。夢とは、直立した人とは直角に、つまり仰向けになって寝ている人には平行に見えるものである。一方、「うつつ」とは直立した人と平行に、つまり仰向けになって寝ている人には直角に見えるものであるという。そうすると、やはり夢≠「幽霊」＝「うつつ」ということになる。

とは、夢や幻と区別がつかない程、曖昧なものだったと考えることもできる。

幽霊が現わるるときは、見るものの身体の位置の如何(いかん)に関せず、地平に垂直にあらわれ申し候。しかるに、うつつは見るものの顔面に並行してあらわれ候。

［1925 年 1 月 31 日付矢吹義夫宛書簡いわゆる『履歴書』］（『全集 7』p.31）

この定義に従うと、上記日記で見た平助は「幽霊」ということになるであろう。ともかく、平助は何か(ゝゝ)を伝えるように熊楠の枕元に座し、そして亡くなっている。

第 13 節，死の予知夢

13-1，事例①—宇治田虎之助の戦死—

次の「死の予知夢」はどうであろうか。

1904 年 9 月 19 日[月]　雨

朝汽船にのり或外国港出発におくるゝとき川田鷹来訪すと夢む。又宇治田虎之助の霊をよぶに来る。今徴兵招集主務少佐なりといふと思ふ。

午下中村孝平氏来訪。午後サンゼルマノの緬甸を読む。

夜も然り。

（『日記 2』p.467）（傍線—唐澤）

宇治田虎之助は、熊楠と同郷の友人で軍人であった。宇治田は野戦砲兵第九総隊長として日露戦争に出征、1905 年 3 月 1 日、四方台の戦闘で壮絶な戦死を遂げたという。熊楠がこの日記を書いたのは 1904 年 9 月 19 日である。つまり宇治田はこのときまだ存命であった。それにも関わらず熊楠は、「宇治田虎之助の霊」を呼んで話をしている。熊楠が体験したこの出来事に該当する論考を以下に示す。

それからまた、川瀬氏がわれらよりはよほど親交のあった宇治田虎之助氏は、予六、七歳のころよりの友で、その名の示すごとく寅年生れで、予より一歳の年長だった。小さい米屋の倅から身を起こして陸軍大佐までなったが、奉天の戦いに一戸将軍の副官として奮戦中、大砲のために胴より上を粉砕され、壮烈なる戦死を遂げた。そのころ予那智より田辺へ移る途中、大瀬の大黒屋という宿に留まると、夜中たちまち電燈を点じたように明るくなり、眼を醒まして見ると、宇治田氏が軍服きて洋刀を鳴らして室内を横切り去ると同時に真の闇となった。同行した荷持男は全く熟睡しおり、へんなこととは思うたが、そのまま打ち過ぎおるうち、田辺へ来たり氏の戦没を聞き知った。

［1922 年 5 月 6 日「上京日記」『牟婁新報』］（『全集 10』p.75）（傍線―唐澤）

夜中寝ているとき、たちまち周りが明るくなり、眼を覚まして見ると、宇治田が軍服を着て洋刀を鳴らして室内を横切った。それと同時に室内はまた暗くなったという。熊楠が宇治田の戦没の由を聞いたのは、田辺に来てからであった。

13-2, 事例②―目良三柳の長男の病死―

もう一つ「死の予知夢」の事例を挙げておこう。

1913 年 12 月 19 日[金]　晴

午下起く。午下考古学会へ状かき了り、出す。

夕紀伊新報社の二三少年（活版職工）隣り吉田幸八氏持家庭に入来る。毎々のことに付き予怒りに行く。小山邦松氏来り、社にも此頃此事毎々あるを知る人ありとのことにて、所分すべしとの返事也。

夜九時過頃考古学会へ、状成る。十時過下女して出す。三時高木、牟婁新報へのハガキ各一近所へ投函に之、臥す。

今朝、目良三柳氏今二人と盆の明きに鶩食ひに登桜す（和歌山丸ノ内、内川に臨める所）るを、予四丁町浜より見ると夢み、さむれば、松枝喜多幅氏より帰り、目良氏長

男大病危篤とのこと也。午後死せしと油岩にて聞く。成次郎氏帰郷のことも病気のことも一向知ざりし也。昨日松岡香翠方へ書物かりに之しとき、不在故、目良氏へ之きしかとは思ひたり、病人有てのこととは不知、年二十五にて歿せし也。東京早稲田専門学校に在しが昨年より脊髄病にて廃学。

（『日記 4』p.330）（傍線―唐澤）

友人で、また町医者でもあった目良三柳と、あと二人が共にいるところを、熊楠が傍観者のように見ているという夢である。眼を覚ました後、熊楠は妻・松枝から目良氏の長男が危篤の由を聞いた。そしてその長男は、その日の午後に死亡したという。熊楠は目良氏の長男が病気であることは一切知らなかった。因みに熊楠は、目良三柳の子の中でも純（死亡したのは純の兄）を非常に可愛がり、しばしば写真を一緒に撮っている。

13-3, 事例③―羽山芳樹の病死―

続いては、羽山芳樹（羽山家・四男）に関する「死の予知夢」である。

羽山家の第四男は久しく精神病者たりしがおいおい平治し、家伝の売薬を売り弘め、一万円ほどの身代にてどうかこうか暮らしおりたるが、昨年七月ごろ中風を発し、また多少精神病も起こり、十一月に死亡致し候。十一月十六日の朝三時より五時の間に小生二階に独り臥しおりしに、この第四男（名は芳樹）畳の上に直立す。電灯を見るにこの男の影で電灯見えず、横顔のみ見えて黙しおる。眼を閉じ神を鎮めてまた開くに依然見ゆる。五、六回も左様にてそのうちに小生は眠り了る。夜明けて鏡検に多忙で打ち紛れ、このこと忘れおりしが、午下（ひるさがり）庭園の方やかましきより椽先に出でしに、下女ら、安藤ミカンとて当町に限り生ぜし、旧幕時代には当藩外へ出さざりし、始終酸味の少しもなき大なるミカンが、今は拙宅にのみ三本高さ一丈―二丈の大木あり、その実を下女らが集めおる。それに付けて今朝枕頭に見えし人のことを思い出し、七月に中風起こりしと聞きしが如何なりぬらん、そのミカンは珍しきものなれば送りやるべしとて一箱につめさせ、ハガキとともに発送せり。さて三時五十分にその妹（山

田氏妻）より電報著、「羽山今日死去、信恵」とあり。妙なことと思い、死去の時間を問いにやりしも、羽山の家は妻が去年死し夫が今月死し、旧家絶滅せしことゆえ取り込みはなはだしく返事なし。月末になり山田氏の従兄塩路（前年御目にかかりし者）へ問合わせしに、十一月三十日にやっと返事着く。芳樹は十一月十六日午後〇時三十分死去と言い越せり。すなわち小生下女らがミカンを拾うを見て羽山へおくるべく荷物の箱を買いにやりし時なり。されば人死するとき遠方へ像を現ずるということが実にあるにしてからが、息を引き取る時に現ずるにあらず、死する前およそ六時間に（この例に限り）現じたことと存じ候。それは死する前六時に、六つのときに別れたる小生にその年の一月に四十五年めにあいしことなどを思い出し、いろいろ思い運らしたる一念が届きしほどのことと察し候。

小生は生来脳力がへんな男なるも、いろいろとみずから修練して発狂には至らざりし。また霊智の不思儀のということは一向信ぜず。ただ科学的にこんなことを何とか研究して些少なりとも物心関係の次第の端緒を知りたく思う。

[1930 年 3 月 16 日付白井光太郎宛書簡]（『全集 9』pp.512-513）（傍線―唐澤）

羽山家には六人の男子がいたが、四男・芳樹を除いてみな結核で早世している。熊楠はこの日の明け方、芳樹の「（熊楠が定義するところの）幽霊」を見ている。芳樹は畳の上に直立していた。横顔のみ見えて黙していた。眼を閉じ、精神を鎮めて、再び眼を開けてもやはり芳樹が見えた。熊楠は、五、六回同じように眼を開閉したが、やはり芳樹の姿が見えたという。昼になり、芳樹は確か中風（半身の不随、腕または脚の麻痺する病気）だったので、熊楠は、お見舞いに安藤みかんを送ろうと準備をしていた。その最中、芳樹の死亡の由を伝える電報が届いたのだ。熊楠は芳樹が死亡した時間を、芳樹の親戚に調べさせている。芳樹は「11 月 16 日午後 0 時 30 分」に死去したとのことであった。それは熊楠が安藤みかんを芳樹へ送るべく、女中に箱を買いに行かせていた時であった。芳樹は息を引き取るおよそ 6 時間前に熊楠の枕元に現れたのだった。

熊楠とは縁の深い羽山家のことだからであろうか（熊楠と羽山兄弟の関係については第 2 章参照のこと）、この出来事に関する熊楠の記述は非常に詳細である。

終りに申す。山田妻の第四兄は昭和四年の一月八日に小生山田方を辞し田辺へ帰りしが最終の相見にて、その歳の十一月十六日早朝、小生自宅の二階に眠りおりしに、ふと目を開きみれば電燈と小生の眼のあいだに黙して立ちあり。小生は深山などに独居し、また人殺しのありし宿にとまりなどして、かようの幻像を見ることたびたびあり（年老いてははなはだ稀（まれ）なり。これは九年来酒を全く止めしによるか）、一向何とも驚かず、眼を閉じて心を静め、また開くに依然あり。かくのごとく数回して消失、小生はまた眠り候。前後より推すに午前四時ごろなりし。さて、ちょっと一眠りして午前五時に起き、かの幻像のことは洗うたごとく忘失して検鏡にかかる。午後一時ごろ、宅地の安藤みかん（この田辺特有の大果を結ぶみかん、拙第に大木比類なきもの三株あり、はなはだ西洋人の嗜好に合えるみかんなり）の辺が喧しきゆえ、走り行ってみると、長屋におる人々と小生方の下女がその木に登り果実を取り収めおる。よって今朝早く見たる幻像のことを思い出し、一木箱にそれを十九個入れ、午後二時過ぎ、山田方へ送り、その妻の第四兄へ転致せしめたり。（二月ほど前より何病と聞かず、病気にて山田方へ移り療養中と申し来たりありしなり。この人は去年妻に死なれ家に人なきゆえ、妹の夫方へ移り介抱されおりしなり。）

それより鏡検を続くるうち、午後三時四十分山田妻が出せし電報が四時に到着、ハヤマケフシキヨスノブヱ（羽山　今日　死去す　信恵）、とありたり。今日死去とばかりあって何時に死去か知れず、山田方は混雑なるべしと思い打ちやりおき、山田の従兄（上に出でたるごとく、妻木師に小生塩屋村へ来たれりと衆中で告げた人）へ問い状を出せしに、十六日の午後〇時三十分、先日小生が一度忘れありし幻像を思い出して家人が取りいたる蜜柑十九個を荷作りして差し出すべく指揮したる時死去せしなり。

故に変態心理学者がよくいうごとき幻像wraith（レース）（羽後由利辺にはスコットランド同様このことほとんど普通にて幽魂という。人死する時に幽魂現われざれば、その人は情義薄き信切（しんせつ）げのなきものと嘲笑さるる由。スコットランドの諸地方の凡衆も今にさよう信ずるもの多し）はその人臨終に現わるるものならず。臨終には自分の生命さえとり留め得ぬに、いかにして他処まで推参するの力あらんや。人のまさに死なんとする前に、もはや覚悟をきわめて、平生や旧時の交友などのことを静思する。その際その思いが池に石を抛げて渦紋を生ずるごとく四方へ弘がり、もはや遠くひろがりて影

を留めざるに至り、そこに受動に適せる葦の一本もあらんか、一旦ほとんど消滅せる渦紋がまたそれによって強く現出するごとく、かかる力を受くるに適せる脳の持ち主に達してたちまち現出することかと存じ候。ラジオに似たることなり。ただし、たびたび人つねに見るを得るものならねば、この上多くの実験を要し、また不偏頗なる、その即座の記載を要す。小生はかかることを少しも信ずるものにあらず。しかし、研究材料としてかかるものを見るごとに記録しおくなり。

［1931 年 8 月 20 日付岩田準一宛書簡］（『全集 9』pp.42-44）（傍線―唐澤）

内容は「白井光太郎宛書簡」とほぼ同じである。しかし、ここには「死の予知夢」に関する以下のような考察が記されている。

人がまさに死のうとするとき、その人は覚悟を決めて、日頃のことや昔の交友などのことを思い出す。その際の強い思いは、池に石を投げたとき渦紋が生ずるように、あるいはラジオの電波が四方八方に発信されるように広がるという。しかし、熊楠は、それを「受信」できるのは、そのような力を受けるに適した脳の持ち主だけだと言う。つまり、筆者の言い方をすれば「生得的(innate)tact」の持ち主だけが、その人の死を事前に知る（やりあてる）ことができるのである。

第 14 節, telepathy への関心、マイヤーズへの傾倒

1904 年 2 月 12 日、熊楠はマイヤーズの『ヒューマン・パーソナリティー　*Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋 150.12]、[洋 150.13]）を取り寄せている。届くや否や、熊楠はこの大著を読みふけっている。「虜」になったと言っても良いであろう。それと並行するように、日記にはいわゆる「オカルト現象」の記述が増えていく。確かに、『ヒューマン・パーソナリティー』を読んだために、熊楠がそのような「オカルト現象」にはまったという面もあるだろう。しかし、もともと熊楠にそのような「素地」があったからこそ『ヒューマン・パーソナリティー』をわざわざ取り寄せ、「オカルト現象」が熊楠にはまったとも言える。「素地」とはつまり、論理的・分析的・理性的・自然科学者的思考を重視し、自分がそのような思考

の持ち主だと自認していた熊楠の、正反対にある、曖昧・感覚的・非合理的・心霊主義者的思考である。前者つまり自覚的な熊楠は「ペルソナ（仮面）」である。その正反対にある、ここで言う「素地」は熊楠のいわば深層心理に潜む「アニマ（理想像、魂）」である。いわゆる「那智隠栖期」（1901～1904 年）の熊楠は、ロンドン時代には決して目を向けようとしなかった自身の「アニマ」に「関心」を示すようになったのだ。

これまで述べてきた「生得的(innate)tact」とは、「テレパシー」の概念に近い。熊楠がこの「テレパシー」に関心を示していたことはあまり知られていない。

> 四年計り前に英国科学奨励会にて予「日本斎忌考」を読り。此ときの会長テレパシー（神通乃ち人の思ふことをそのまま知る法、又他に伝る法）は今後望みあり、尤も験究すべしといひ居たり。又催眠術などにも、熊楠の心作用を貴下の心に伝え、一人を他人に、他人を一人になし畢る方あり。これらは決して一笑に附し去るべきに非ず。研究せば物心以上、乃ちせめては精神界の原則を知る端緒ならん。
>
> [1902 年 3 月 26 日付〔推定〕土宜法龍宛書簡]（『高山寺資料』p.277）（傍線―唐澤）

この「テレパシー telepathy」という語は、マイヤーズ〔写真 9〕の造語である。「テレパシー」とは、熊楠が示す通り、他人の思っていることをそのまま知る方法、また自分が思っていることを他人に伝える方法である。熊楠は早くからこの「テレパシー」に関心を示していた。それはやはり上に示してきたように、熊楠自身の個人的な、特殊な体験があったからであろう。

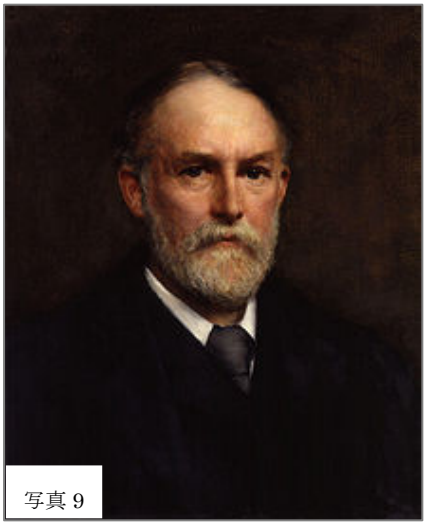


写真 9

Frederic W. H. Myers 肖像画
（William Clarke Wontner、〔1857～1930 年〕、Wikipedia）

因みにマイヤーズ自身が「テレパシー」の研究を始めた理由も、やはり個人的な体験があったからであった。マイヤーズには、思いを寄せながらも結婚できなかった女性（従兄の妻、アニー・マーシャル）がいた。1876 年にアニーは自殺する。彼女が自殺してからは、マイヤーズは彼女があの世から接触してきているという証拠を必死になって探し求めたという。マイヤーズには「テレパシーや催眠、潜在自己などの研究が、人類

の心の仕組みを解明する手がかりになるはずだ」という、崇高な学的目標があった。しかし、その背景には、このような個人的な、忘れられない体験があったことも見逃すことはできない。またマイヤーズは、当時の心理学に、「魂の科学」の役割を果たすことを望んだという。

「魂の科学」――「魂」と「科学」という正反対の言葉を並列させた奇妙な語である。この言葉からは、マイヤーズが、まるで 19 世紀に確立された「近代科学」と、「信仰」の間の境界線を越えようとしていたように感じられる。マイヤーズは、近代科学と宗教の古い対立を崩そうと考えていたのだろうか（ここで筆者は、熊楠は「事の学」において、「物」や「心」を別個に研究することよりも、「物」と「心」が交わる「事」の研究こそ重要だ、と主張したことを思い出さずにはいられない）。

熊楠は 1911 年 8 月 19 日の『ノーツ・アンド・クエリーズ』に掲載された“Twins and Second Sight”において「テレパシー」という言葉を使っている。[10)]

> The late Frederic W. H. Myers in his ‘Human Personality and its Survival of Bodily Death,’ 1903, vol. i. p. 272, speaks of a butler named James Carroll, who has had “another psychical experience, not visual－a feeling of extreme exhaustion and sadness, coupled with the idea of his twin-brother, on the first day of his distant twin-brother’s fatal illness; and again just before the receipt of a telegram summoning him to the death-bed. It is an interesting observation based by Gurney

---

10) 以下の論考「多乳房と多胎産」は、“Twins and Second Sight”が下敷きとなっていると思われる。

三十年ほど前、余の知人に双児の扱いにいささか片落ちのあったを、親が気付かずに過ごしたところが、兄の方が痴呆化して行方不知（しれず）、数日後に近所の林下に自殺しあった一例に遭うた。ガルトンやマヤースの大著によると、双児、三ッ児の相互の連関は微妙を極め、往々万里を隔てて同日同刻に同じ夢を見、同じことを予知し、一方は変死し一方は急病で終わることなどもあるようだ。

[1941 年「多乳房と多胎産」『大日 257 号 10 月 15 日』]（『全集 5』p.563）（傍線―唐澤）

日記においても「テレパシー」という言葉を用いている。

1914 年 9 月 17 日[木]　晴、朝雨雷鳴

朝十時頃起、午後甲子夜話抄す

午後、湯嵜より薯賣る老婆来り、予南方なりと聞、一度あひたかつた、日本一の人と聞た、田村検事に願ふてでも逢せもらはうと思ひ居たといふ、此婆言ふ、濱本熊五郎吉〔？〕今年六七月貸し金六百円とれぬを苦にして死だと、予もと有田屋に奉公せしりせといふ下女のことを問ふに、今田辺海藏寺町大谷といふ方に嫁し二子あり、乃ち其聟の為に熊五郎六百円倒されたと、Telepathy?

朝雷鳴、予眠り居り、夢に長島氏父と争論す、長島父立ながら罵る、頭の後に日光如きもの惣ち去る、これは長島父母昨日大喧嘩せし也、（今朝も右夢みる中にせしか）又日光は此夢みる中電光りしか、又は昨夜強電光見し故か（以下略）

（未刊行日記・岡本清造翻刻）（傍線―唐澤）

on his analysis of relationships in **telepathic** cases that the link of *twinship* seems markedly to facilitate this kind of communication.（以下略）

[“Twins and Second Sight”、*Notes & Queries* 11s. iv. iii. 469; iv. 54、1911 年 8 月]

（『全集 10』p.177）（傍線―唐澤）

フレデリック W. H. マイヤーズの近著『人間個性とその死後存続』（1903 年 1 巻 272 頁）に、ジェームス・キャロルという名の執事の話が載っている。彼は〔可視的なものとは〕別の、不可視な心霊的な経験を持っていた。――遠くにいる彼の双子の兄弟に、命にかかわる病が襲った最初の日、その双子の兄弟に対する漠然とした思いと共に、極端な疲れと悲しみの感情が、彼に起こったのである。そして再び、臨終に彼を呼び出す電報を受けとる直前に、同じことが起こった。それは、ガーニーによる、テレパシーの事例における関係性の分析の、つまり「双子間の親密な関係」が明らかにこの種の意志伝達を容易にするような分析の、興味深い観察記録である。

（和訳―唐澤）

ここで熊楠は、双子のような親密な間柄は「テレパシー」による交流を助長するということを説明している。因みに、ガーニー（Edmund Gurney 1847～1888 年）とは、イギリスの心理学者であり、マイヤーズと同様、S.P.R.（英国心霊現象研究会）の一員であった人物である。

上松蓊宛書簡においても「テレパシー」という語が見られる。

拝復　十一日御状昨日朝拝受、五月十一日に鎌倉に行れ候砌、吉村勢子女史を訪ふ御心組の処、雨にて御止めになりし様拝承致候。然し読みやうによりては女史を訪はれたるやうにも存じ候、丁度其月十二日出の女史の状、当方へ着致し有之候。或は貴殿が訪はれたる故、此状を送り越し候ものか、然らずんば所謂 telepathy の通ぜしものかと被存申候。

[1928 年 6 月 10 日付上松蓊宛書簡]（中瀬喜陽編、『門弟への手紙』、日本エディタースクール出版部 1990、p.88）（傍線―唐澤）

「テレパシー」以外にも、熊楠がマイヤーズ及び『ヒューマン・パーソナリティー』に言及した論考は多くある。

七年前厳冬に、予、那智山に孤居し、空腹で臥したるに、終夜自分の頭抜け出で家の横側なる牛部屋の辺を飛び廻り、ありありと闇夜中にその状況をくわしく視る。みずからその精神変態にあるを知るといえども、繰り返し繰り返しかくのごとくなるを禁じえざりし。その後 Frederic W. H. Myers, 'Human Personality,'1903, vol. ii, pp.193,322 を読んで、世にかかる例尠なからぬを知れり。

[1911 年 8 月「睡眠中に霊魂抜け出づとの迷信(1)」『人類学雑誌』27 巻 5 号]

（『全集 2』p.260）（傍線―唐澤）

ここで熊楠は、夜中、自分の首が身体から抜け出して飛び回ったと述べている。この出来事は、以下の日記に該当する。

1904 年 4 月 25 日[月]　雨、夜大風雨

夜大風雨、予、灯を消して後魂遊す。此前もありしが、壁を透らず、ふすま、障子等開き得る所を通る故に迂廻なり。枕本のふすまのあなた辺迄引返し逡巡中、急に自分の頭と覚しき所へひき入る。恰も vorticella が螺旋状に延し後急に驚きひき縮る如し。飛頭蛮のこと多少かゝることより出しならん。

（『日記 2』p.431）（傍線―唐澤）

vorticella とはツリガネムシのことである。熊楠はツリガネムシが螺旋状に伸びた後急に縮まるように、自分の頭が抜け出たのち、また元の位置に戻ったという。「此前もありしが」と述べているが、それは、おそらく日記に見られる以下の出来事であると思われる。

1904 年 3 月 10 日[木]　朝晴、午後雨 蛙連声して鳴はじむ

うつゝにて（幻想といふこと知りながら）黒き紐ある人形如きものとなり、龍動のア

ンダーグラウンド鉄道の上り路如き所を進み又却退し（進退とも頭は同一方に向ひ）又下におりる一所、家の外に一男一女（日本人）あるを見るをわざと見ず、人形如きものに自分の意志集る。注意点と見ゆ。

（『日記 2』p.413）（傍線―唐澤）

熊楠は、黒い紐のある人形のようになってロンドンの地下鉄の登り道のような所を進み、また戻ったという。この、いわゆる「体外離脱」は、「那智隠栖期」の熊楠が経験した「神秘体験」として、必ず、熊楠に関する小説や漫画などで取り上げられる程、有名なものである。

また、いわゆる「死人のさとし」についても論考で言及している。これは自分の死期を意識した者が、身近な人の前に現れるという「wraith（レース）」に類似するものである。以下では、「wraith」は睡眠中のみならず、覚醒時にもあり得ることを示している。「wraith」については、先述したように、熊楠自身が羽山芳樹の死の際、経験したことでもあった。

臨死の人の魂が寺に往く話は西洋にも多く、マヤースの『ヒューマン・パーソナリチー』（一九〇三年板）一巻三二三頁以下に、大病で起居もならぬ父が、階上に眠らずにいた娘を誘いに来たり、見たことなき墓地に伴れ行き、ある地点で立ち止まったが、二ヵ月ばかり経ってその父死し、葬所に往って見ると果たして右の墓地であり、上件の地点に父は埋められた、とある。こればかりでは証拠が弱いが、この外に近親の者へも、睡眠中でなく現実に、この死人のさとしがしばしばあったという記事もある。

［1914 年 11 月「臨死の病人の魂、寺に行く話」『郷土研究 2 巻 9 号』］

（『全集 2』 pp.273-274）（傍線―唐澤）

熊楠は、人間のみならず、動物の「幽霊」の存在も認めていた。熊楠は十数年に及んで、犬に「幽霊」があることを研究してきたという。

欧米に、近年も犬に幽霊あるを見しと確言する人あり。一九〇三年出版、マイヤースの『ヒューマン・パーソナリチー』一巻六三五頁を見よ。

［1913 年 5 月「南天の葉と二股大根 紙上問答」『郷土研究 1 巻 3 号』］

（『全集 3』p.214）（下線―唐澤）

さて一寸の虫にも五分の魂で、マヤースの『ヒューマン・パーソナリチー篇』に犬にも幽霊あることは、予も十数年研究していささか得たところがあるが、不幸にも観る人の心を離れて幽霊というものある証拠を一も得ない。しかしもし人に幽霊あらば畜生にも幽霊あるべしで、『淵鑑類函』四三一に、司農卿楊邁（ようまい）が兎の幽霊に遇った話を載せ、『法苑珠林』六九に、王将軍殺生を好んでその女（むすめ）兎鳴の音（こえ）のみ出して死んだ、とある。

［1915 年 1 月「兎に関する民俗と伝説」『太陽 21 巻』］（『全集 1』p.74）

（傍線―唐澤）

犬にも「幽霊」があることは『ヒューマン・パーソナリティー』にも載っており、熊楠もそれを長年の研究により、確信していたようである。1904 年の日記には以下のような記述がある。

1904 年 3 月 24 日[木]　雨

獣畜、言詞、心なけれども生物のこと分る。科学者はこれを人間に分らぬといふのみ。乃ち霊妙也。

（『日記 2』p.418）

熊楠は、人間と会話を交わすことのできない動物（生物）のことが分ると述べている。言葉や目に見えるものだけが全てではない。熊楠には、それ以外に感じるものがあったのであろう。それを動物の「幽霊」と言うべきか分らない。しかし、熊楠は、目に見えるもの以外の何かを感じ、それらと交流していたようだ。いわば「集合的無意識」における、言語化不可能な「交感」のようなものである。

以下では、「精神変態」を起こす人が、頭頂から香液を出すという不思議な現象があることを述べている。この経験は熊楠自身にもあるという。これも『ヒューマン・パーソナ

リティー』に依拠している。

香材の出処実に思いの外なるもあって、一九〇三年板、マヤースの『人品および身死後その残存論』(ヒューマン・パーソナリチー・エンド・イツ・サーヴィヴァル)二巻第九章付録に、精神変態な人が頭頂より二種の香液を他(ひと)の望み次第出した記事と弁論あり。予これを信ぜなんだところ、七、八、九年前の毎春引き続き逆上して頭腫れ、奇南香また山羊にやや似た異香液不断出た。人により好き嫌いあるべきも、香油質のやや粘ったもので、予自身はなはだ好きだったが、医者が頑癬(たむし)の異態だろうとて薬を傅(つ)けても今に全癒せぬが、香液は三年きりで出で止んだ。

[1918 年 11 月「馬に関する民俗と伝説」『太陽 24 巻』]（『全集 1』p.312）

（傍線―唐澤）

次に示すものは、上述した“Twins and Second Sight”を下敷きに書いたものと思われる。双子や三つ子の「テレパシー」のような不思議な意思疎通について述べている。「マイヤースの大著」とは当然『ヒューマン・パーソナリティー』のことである。

三十年ほど前、余の知人に双児の扱いにいささか片落ちのあったを、親が気付かずに過ごしたところが、兄の方が痴呆化して行方不知(しれず)、数日後に近所の林下に自殺しあった一例に遭うた。ガルトンやマヤースの大著によると、双児、三ッ児の相互の連関は微妙を極め、往々万里を隔てて同日同刻に同じ夢を見、同じことを予知し、一方は変死し一方は急病で終わることなどもあるようだ。

[1941 年 10 月「多乳房と多胎産」『大日 257 号 10 月 15 日』]（『全集 5』p.563）

（傍線―唐澤）

以下は、いわゆる「サブリミナル効果」と呼ばれるような、意識せずとも、無意識に「影響」を与える効果を述べたものである。

一九〇三年板、マヤースの『個人性とその身後の存留』一巻五七五条および付記に、

少しも霊符の効を信ぜざる多人が、試しにこれを佩びて、たちまちその病患を除き得た例を列ねた。その実表面霊符の効を信ぜざる人も、往々その不自覚心（サブリミナル・セルフ）に霊符の力を感受して、病が癒えるという。

[未発表手稿「自分を観音と信じた人」]（『全集 6』p.408-409）（傍線―唐澤）

熊楠は「subliminal self」を「不自覚心」と訳している。表面上は「信じない」と豪語しつつも、潜在意識ではしっかりとその力を感受していることがあるという。因みに、いわゆる「サブリミナル効果」は 19 世紀の半ばから研究されているが、いまだ科学的には証明されていないという。

「空中浮遊」についても述べている。以下では、精確な科学の目を持った者であっても、その詐巧は見出すことはできなかったことを挙げている。熊楠は、ここでも『ヒューマン・パーソナリティー』を参照している。

欧州には、四世紀のヤムブリクスや十七世紀のクペルチノのヨセフス、十九世紀のホウムやモセス、もっとも泛空で著われ、英科学士院のサー・ウィリヤム・クルックスごとき精確なる科学眼もて、ホウムがまるで床板を離れて空中にあるを、異日三度まで目撃して、何たる詐巧を見出ださざりし由。（『天中記』三六。『広博物志』一二。『古今図書集成』神異典二六二所収、南宋の曽慥『集仙伝』序。一九三〇年板、マヤース『個人義とその身後の存留』一巻、「用語解」一八頁。一九二九年一四輯『大英百科全書』十三巻九七九頁）

[未発表手稿「巫女が高処に上る」]（『全集 6』p.413）（傍線―唐澤）

次に挙げる記述も、『ヒューマン・パーソナリティー』の内容と熊楠の体験に基づくものである。熊楠は蚯蚓が大の苦手であった。夢で蚯蚓を見て起きると、大きな蚯蚓が横たわっていたという。これを熊楠は「特殊感覚（ヘテレステシア）」であると述べている。

視る聞く嗅ぐ等普通の感覚の外に地下に水や金あるを感じたり、見ず聞ずして馬や薔薇の存在を知たりするを心理学者は特殊感覚（ヘテレステシア）と名け、人により猫

が近くにあるを見も躾ぎもせずに感知して不安を感ずるを其一例とす(一九〇三年板、マヤースの『箇人格及其身後の残存』、一巻四八三頁)

其起源発達に就いては議論区々だが、自ら知る所を以てすれば、予は少時少しも蚯蚓に頓著せず、毎度爪で生た奴を切て魚を釣た。然るに十一歳の時小学教室で教授されおる最中、山崎堅次郎とて只今和歌山県庁で衛生の方に奉職する人が其時予と等しく十二三歳で、喧嘩の仕返しに予の背中へ後から、蚯蚓を落し込だのが色々と動き廻るを気味悪く覚へて、密かに帯を解き一寸立て振ひ落した。其より太く蚯蚓嫌ひになり、十七年前熊野の最難所たる安堵峯の木小屋に宿る内、一夜蚯蚓が自分の蒲団の中え這込むと夢み、忽ち寤て十二月の寒きに蚯蚓が畳の上に来る筈なしと考へたがどうも不安で成ず。首を転じて敷居を眺めると其上に、方言勘太郎てふ大蚯蚓長さ六七寸厚さ三分許り、孔雀の尾の珠の様に瑠璃色に光る奴が横たわり有た。這はしてみるに音もせず。蚯蚓が這ふ音を聞た事も無れば、特殊感覚で之を夢みた程其時自分は蚯蚓大嫌ひに成居たと想ふ。

[『続々南方随筆』草稿中の未発表原稿「猫や鼠と男女の関係」](南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究 6』、南方熊楠顕彰館 2004、pp.290-291)(傍線―唐澤)

ロンドン時代には、友人・土宜法龍に対して、「オッカルチズムごとき腐ったもの[1894 年 3 月 3 日付土宜法龍宛書簡](『全集 7』p.218)」と徹底してこのような不思議な現象を否定していた熊楠であったが、『ヒューマン・パーソナリティー』を読む頃には、次第にそれを肯定するようになっている。1904 年 2 月 12 日に取り寄せたこの書物に、熊楠は痛烈に共感したのだ。いわゆる「那智隠栖期」、認めたくなくとも認めざるを得ない不思議な現象が、熊楠の身の周りには多々起きていた。いわゆる「精神的危機状況」にあった熊楠の心の隙間に、この大著はぴったりと、完全に、はまり込んでしまったのだった。また熊楠が『ヒューマン・パーソナリティー』を引用するときは、大抵、同時に自身の似たような経験を述べている。

ロンドン時代、熊楠はハイドパークで連日のように行われていた無神論者の演説をしばしば傍聴している。熊楠はこの頃、完全に近代科学に傾倒していた。例えば法龍に対して以下のように、近代科学の重要性を切々と述べている。

仁者、欧州の科学哲学を採りて仏法のたすけとせざるは、これ玉を淵に沈めて悔ゆることなきものなり。小生ははなはだこれを惜しむ。

［1893 年 12 月 24 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.149）

しかして仁者いたずらに心内の妙味のみを説いて、科学の大功用、大理則あるを捨つるは、はなはだ小生と見解を異にす。

［1893 年 12 月 24 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.153）

このような言葉からは、当時の熊楠の姿勢＝「自然科学者・南方熊楠」の姿を見ることができる。結局、アメリカ遊学中を含め在外中に、熊楠がオカルティズムに本格的に関心を示すことはなかった。とはいえ、ロンドン時代、熊楠がブラヴァツキー（Helena Petrovna Blavatsky 1831～1891 年）の大著『神智学の鍵　*Isis unveiled. A master-key to the mysteries of ancient and modern science and theology*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋 150.01]、[洋 150.02]）に目を通していることは、注目に値する。ブラヴァツキーは霊媒師として世界各国を放浪し、キリスト教や仏教、ヒンドゥー教などさまざまな宗教・神秘思想を融合させ「神智学」を創唱した人物である。1875 年に、ニューヨークに「神智学協会」を設立し、その思想と活動はシュタイナー（Rudolf Steiner 1861～1925 年）にも大きな影響を与えている。

またオッカルチズムのことは小生も少々読みしが、名ありて実なきようのことにあらずや。たとえば霊験とか妙功とかいうほどのことで、一向その方法等は聞き申さず。ブラヴァツキのこのことの傑作前後二篇四冊のうち二冊、ずいぶん大冊なるが、前年読みしも、ただかかる奇体なことあり、かかる妙な行法あり、というまでにて…（中略）…一向核のなきことなりし。この書もし入用ならば、仁者帰国の後、貸し申すべし。

［日付の記入なし　土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.242）（傍線―唐澤）

やはりここでも、熊楠はオカルティズムに批判的である。しかし、熊楠が法龍に対してオカルティズムをここまで痛烈に批判したのは、実は、熊楠がオカルティズムに「関心」があったことの裏返しだったのではないか。法龍が書簡にオカルティズムのことを書いていても、「関心」がなければ、ここまで真剣に答えなかったのではないか。ましてブラヴァツキーの書物を読むこともなかったであろう。因みに、あれだけ批判した（「一向核のなきことなりし。」）ブラヴァツキーの書物であったにもかかわらず、熊楠は帰国後、1901 年 6 月から 7 月にかけてしっかりと読み込んでいる。そして、「『ヴェールをはがされたイシス』第二巻では『カルデアのユダヤ人による宇宙起源図（Chaldeo-Jewish cosmogony）』が図解されており、その図は、南方の描いた『猶太教の密教の曼陀羅』の構図と驚くほど一致している」[橋爪 2010：143]という。つまり、熊楠は帰国後、ブラヴァツキーの大著を読み込み、その要素を自分の思想に取り込もうとしていたのである。

ロンドン時代の熊楠は、オカルティズムへの「関心」を抑え込んでいた。それが完全に開放されたのは、帰国後、那智に隠栖したときであった。深山幽谷の那智山における孤独、不本意の帰国と親族からも理解してもらえないことによるストレス、渾身の論考「燕石考」の不掲載による落胆……などが重なりこの時期熊楠は「精神的危機」に陥っていた。特に 1903～1904 年頃の日記には、オカルトと呼ぶ以外ない不思議な現象の記述が多々出てくる。「体外離脱」・「幻視体験」・「予知夢」・「他心通（テレパシー）」などである。これらについては既に本章を中心に述べてきた。

ロンドンに居た頃は、近代科学やロジカルな思考を重視し、オカルティズムを馬鹿にさえしていた熊楠だったが、帰国後は一変する。いくら熊楠が「一切智（一切のものについて完全に知る智慧）」を志していたとはいえ、その「在り方」は、あまりにも「極端」である。そしてこの「極端」さが、我々を惑わすのである。通常、**「中間」**（適当な距離）に居る我々にとって、熊楠のこのような「極端」から「極端」への移行は、非常に理解しがたいものである。しかし、それは同時に、我々にとってはある種、魅力的なことでもある。我々は、熊楠のように、軽やかに「極端」へ移行することなどできない。「文化」・「社会」（あるいは「世間体」）という「枠」が我々を捕え、移行を妨げるのである。それを熊楠は、いとも簡単に飛び越えてしまうのだ。「文化」や「社会」の「枠」の中に居れば、とりあえずは「正常者」とみなされ、ある種容易に生きていくことができる。しかし、熊楠のよう

な人間は、この「枠」のせいで「異常者」扱いをされることさえある。我々にとっては、熊楠の「在り方」は魅惑的なものだが、熊楠にとっては、自身の「在り方」は、この「社会」においては、非常に辛いものだったと言えるかもしれない。

第 15 節, 密かなる「やりあて」の実験

熊楠が夢を日記に記録し続けた理由の一つは、「やりあて」を実証するためであった。この話題に入る前に、しばしば熊楠の前に「幽霊」として現れている、「平助」という人物について述べておかねばならない。「平助」という人物はいったい何者であろうか。1904 年前後の日記には、二人の「平助」の記述が見られる。一人は「田中平助」であり、もう一人は「南方平助」である。

「田中平助」は、熊楠が滞在していた那智山麓・市野々の大阪屋近く、井関の三隅万蔵方に世話になっていたようだ（市野々と井関は歩ける距離である）。日記には、「井関の三隅方に田中平助を訪……」（1902 年 12 月 26 日付日記）などとある。また、以下に示す日記からも分かるように、「田中平助」の職業は植木屋だったらしい。

> 1902 年 12 月 15 日[月]　晴
>
> ……利助方に夕飯、夜中野氏に宿す。植木屋田中平助来話、此人年来中野氏出入也。
>
> （『日記 2』p.300）（傍線―唐澤）

一方、「朝平助大坂より来る。」（1900 年 11 月 23 日付日記）や「常楠平助を大坂よりつれ帰り……」（1901 年 10 月 24 日付日記）という記述も見られる。

> 1901 年 10 月 24 日[木]
>
> 朝オトに車ひかせ垣内に至り、五円やり、永次郎氏を訪、それより午下松村藤楠を訪、飲で夕に至り車にのり帰り、永次郎氏方に貞造氏にあふ。それより永次郎氏方に臥し、八時前帰れば、常楠平助を大坂よりつれ帰り、兄もあり。平助、熊、弥兵衛、常楠、貞造及予、会議徹暁。

（『日記 2』p.219）（傍線―唐澤）

日記にこのように記されているところを見ると、この大阪在住の「平助」は、熊楠の親戚筋の者であることが推測される。しかもかなり熊楠とは関係の深い人物のようだ。この日（1901 年 10 月 24 日）、熊楠を含む兄弟（姉）が一同に集まって、亡き父の遺産をめぐって会議がなされた（因みに貞造とは長〔永〕岡貞造で、熊楠の母方の親類である）。その中に「平助」はいるのだ。この「平助」は、おそらく「南方平助」である。

熊楠がアメリカで日本人仲間とともに発行したといわれる『珍事評論』にも「南方平助」が出てくる。

> 又直（すぐ）に事を大くし南方の意表外に出で、こまらせてやらんなど被思召候節は、和歌山市中橋筋板屋町三番地南方平助と申し、もと小生の養父たりしもの有之、家内犬猫共五人余り二疋にて暮し居候。それえ御掛け合ひ被下度候。
>
> （「珍事評論」第一号）[長谷川・武内 1995：11]（傍線―唐澤）

ここで「南方平助」は、「もと小生の養父」とあるが、熊楠が養子に出されたという話はこれまで聞いたことがなく、真相は不明である。この頃、「南方平助」は和歌山県中橋筋という所に住んでいたようだ。

「南方平助」は最初（少なくとも熊楠がアメリカにいる頃までは）、和歌山市内に住んでいたが、上述したように、後に大阪へ（父・弥兵衛の遺産相続についての会議の頃には）転居しているようだ。日記に以下のような記述がある。

> 1902 年 12 月 18 日[木]　晴
>
> 昨夜附にてハガキ出す。多屋秀（これは止め）、那須孫、喜多幅、おいく、さかゑ、愛子、松子、小光ハガキ出す。午後佐藤氏店に之、野呂氏に面しリウビンタイを渡す。同家より常楠へ状一出す。それより佐藤虎次郎邸に之、奉公人と話し、一度帰宿フロックを着し、佐藤常氏を問、ビール三本のみ五時頃迄話す。此間二時頃勝浦より西野浅吉荷持人足として着す。夜早く臥す。

大阪府泉南郡多奈川村大字東畑四十番地　田中平助

（『日記 2』p.300-301）（傍線―唐澤）

ここには「田中平助」と記されている。これは熊楠の誤記であろうか。筆者は、南方熊楠顕彰館において熊楠のこの日の直筆日記を見たが、「田中」の文字はつぶれており、特に「中」の字は何か書き直した跡があった。因みにこの頃はまだ熊楠は「田中平助」としばしば遊んでいる。「田中平助」が大阪にいたとすれば、こう頻繁に会うことはできなかったのではないだろうか。

しかし、「田中平助」は当時、三隅万蔵方に世話になっており、「本家」は別の所にあったようだ。

1902 年 12 月 26 日[金]　快　西風強く寒

……午後三時過中野店の植松友次郎に風呂敷包（書籍と薬品）二個おふごにてかたげさせ、天満の西端に至り（途中牛肉かふ）、それにて別れ、右荷物もち歩して井関三隅方に田中平助を訪、本家にありとてあふこと不得。

（『日記 2』p.302）（傍線―唐澤）

「本家」がどこにあるのかは不明である。しかし、もしこの「本家」が先述した大阪の住所ならば、1912 年 12 月 18 日の住所の宛名「田中平助」は熊楠の誤記ではないことになる。

さらに気になることは、「平助」は、どうやら 1904 年の春に亡くなったようだが（1904 年 9 月 12 日の日記に、「平助今春死去」とある）、これ以降、熊楠が「田中平助」と遊んだ、あるいは連絡をとったという記述が、ぱったりとなくなっていることである（勿論、1904 年の 10 月に熊楠は、那智山から下山し田辺へ向かうことになるので、物理的にそう頻繁に会うことはできないわけだが）。

可能性として、「南方平助」＝「田中平助」という推測も成り立つ。熊楠の実父・弥兵衛は、前妻（南方家の女）と死別し、すみ（熊楠の実母）と結婚している。因みに弥兵衛と前妻との間には男子が二人いたが、熊楠が生まれる前に死去したという。この前妻には

夫（おそらく婿養子）がいた。この夫〔図 19―○印箇所〕は亡くなったのか、離婚したのか定かではない。離婚し存命であったのならば、もしかしたら「南方」姓をそのまま名乗っていたのかもしれない。旧姓が「田中」だったという可能性が考えられる。「平助」が那智に居たのは、南方酒造の勝浦支店に何かしら関わりがあったからではないだろうか。

まとめると、「南方平助」という人物は、もとは、和歌山在住で、熊楠が「養父」と呼ぶほど身近な人物であった。遺産相続会議にも参加しているところを見ると、相当な近親者であったようである。後に大阪に移住している。もし、「南方平助」と「田中平助」が同一人物であれば、この「平助」は、熊楠の父・弥兵衛の前妻の前夫という可能性が高い。しかし、現時点ではこの「平助」を特定するには、あまりにも資料が少なすぎると言わざるを得ない。[11)]

飯倉照平、『南方熊楠―梟の如く黙坐しおる―』、ミネルヴァ書房 2006、xviii 他を参照に作成

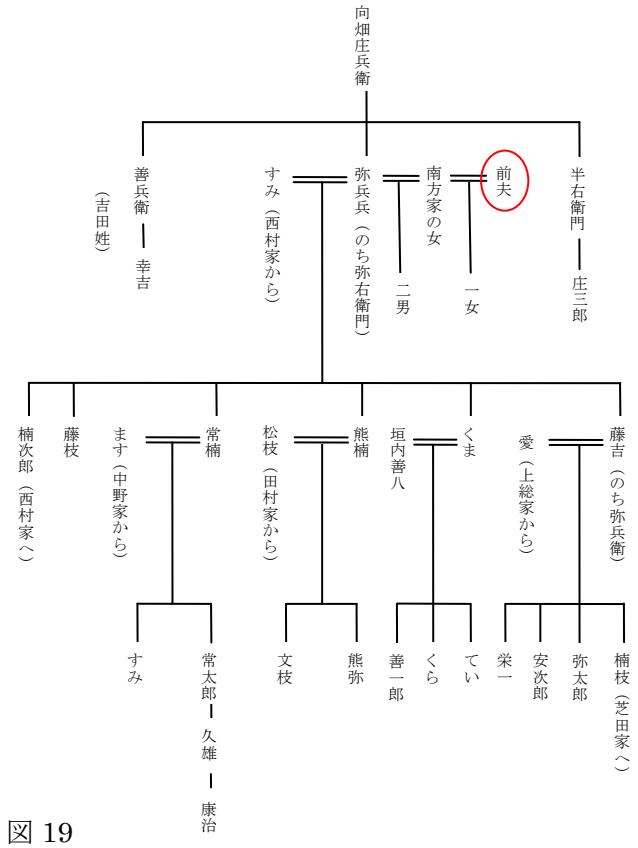


図 19

---

11) 熊楠の母・すみが残した日記にも平助の名が見られる。

明治 19 年 2 月 27 日

垣内よりたい五枚くださる。同しんたくより三枚もらう。東京よりやよもん、楠熊（ママ）、藤助かゑる。たけ中和助ちぬ三枚もらう。平助より大はまち二枚まいる。一本へたい一枚つけて上る。ちぬ二枚、たい一枚藤助方へやる。木政より、するがやおり一箱もらう。

[中瀬　1993:261]（傍線―唐澤）

以下は、熊楠から弟・常楠への書簡である。

右様の次第にて、木下氏は和歌山え帰ったら必ず間違いなく何とか其許等に明答を与ふる旨くりかえし／＼いはれたれど、前方も多忙、又以前とかはり（其許の家人とても昔しの平助・藤助如く主家を己れの家の如く念入れ心配するものは一人もなき如く）烏合の雑輩、たゞ紀州侯に伴（とも）して演説してあるいたらましといふ日傭日前のもの斗りで、なるべく自分に関せぬことに背折りたくなき輩のみなれば、取り逃（にが）さぬよう和歌山へ帰るをまちて早速つめかけ返事處分を聞れたきこと也。

[1914 年 8 月 1 日付南方常楠宛書簡][吉川　1999:58]（傍線―唐澤）

因みに昭和 10 年の日記にも南方平助の名が見られる。

1935 年 3 月 26 日[火]　晴　やゝ冷

昨夜不眠、今朝六時半頃臥す。〇時二十五分起る。

ともかく、熊楠の前に「幽霊」としてしばしば現れたのはこの「平助」であった。

> 小生も八年前に自分の家の主管たりしもの、小生と不快なりしゆえ音信久しく絶えたり。無言で小生の前へ出で来る、よって当座にこれを日記に扣(ひか)えおき今に口外せず。後日、その寡婦（小生の従姉、大阪現在）に親しくあい、またその女死しなんにはその子にあい、右の出できたりし男の死んだ年月日と時刻をたしかに調査し、いわゆるwraith(レース)（死際に他所へ見(あら)わるること）の在否をたしかめんとし秘しおれり。（今これをいいちらすと、前方の遺族多少事実をまちがえ虚構するおそれあり。）右の男はその年に死去せしことだけはたしかに知りおるなり。
>
> ［1912 年 2 月 11 日付柳田国男宛書簡］（『全集 8』pp.273）（傍線―唐澤）

「自分の家の主管たりしもの」とは、「平助」のことであろう。熊楠の兄（南方家長男）・弥兵衛（藤吉改め）ではないと思われる。熊楠は「右の男はその年に死去せしことだけはたしかに知りおるなり。」と述べている。兄・弥兵衛は 1924 年に死去している。つまりこの書簡を書いた時点で兄・弥兵衛はまだ存命だったのだ。

八年前というと、1904 年になる。ちょうど熊楠が、那智山で様々な不思議な体験をしていた頃だ。「平助」が無言で熊楠の前に現れたのはこの頃である。

熊楠はこの「平助」が、その死の前に無言で現れたことを、本章・第12節で見たように、確かに日記に控えている。そしてその理由は、「wraith（死に際に他所へ現れること）」を実証するためだというのだ。

熊楠には「生得的(innate)tact」があった。それは親しい人の死を事前に知ることができる鋭い感覚でもある。熊楠はこの「生得的(innate)tact」をもって、宇治田虎之助、目良三柳の長男、羽山芳樹等の死を「やりあて」た。

そして、「平助」が無言で現れたことを日記に控えている理由は、「wraith」が実際にあ

この間八時少し前久しく夢に何れかの宅にて大勢紋付羽織に装ひにて饗宴あり。その一人は井戸鈴子の叔父南氏なり。杉山菊女、黒装束紋付にてこてぬりに顔を作り幾度も幾度も坐を換て坐したる。又高田屋女将も絃■〔歌？〕す。此内故南方平助もあり。予何か理屈をいふに平助退席す。夢さめて後もやや久しく絃歌の声耳に留まる。予となりの中山氏の小児蓄音器を弄びおるかと思ふ。後に聞に其事なしといふ。昨夜大空の風の音久しく絶えざる。その余謨〔韻？〕にや。

（未刊行日記・中瀬喜陽氏に指示を仰ぎ翻刻）（傍線―唐澤）

りうるのかを実証するためであった。つまり、死をどのように「やりあて」たかを明らかにするためであった。熊楠は後に、死んだ時刻を「平助」の妻やその子に聞いて調査するつもりだという。先に見たように、羽山芳樹の時も、息を引き取った時刻を親類に尋ねている。熊楠にとって、人が息を引き取るどれくらい前に、その死を感知できるかということが、どうも重要だったらしい。

第 16 節, 何が「死の予知」を可能にするのか

16-1, C.G.ユングの「共時性」の概念を手掛かりに

心理カウンセラーは、いわゆる「生得的(innate)tact」による「やりあて」をしばしば経験するという。優秀なカウンセラーとは、日頃の鍛練はもとより、おそらく他者の心を感じ取る「センス」に長けている者であろう。そういったカウンセラーは、クライエントとの間に「共時的な」体験をすることが多いようである。例えば以下のような例がある。

ある精神科医は、クライエントと話している最中、ふと自分の左膝が痛くなってきた。別に体調が悪いわけではなかった。精神科医はふと気がついて、クライエントに「左膝が痛くありませんか」と尋ねた。クライエントは驚き、実は数日前から痛くて困っていると言ったという。[湯浅 1987：69 参照]

カウンセリングという場（カウンセラーとクライエントが情動的に深く結びつく場）には、このような「共時的な」力が漂っているようである。「共時的な」体験とはつまり「偶然」の一言では片付けられない、特別な意味を感じるような「一致」のことである。それはいわば「予知」であり、筆者の言葉でいえば「生得的(innate)tact」による「やりあて」ということになる。また、クライエントとの深い心の結びつきがそのような「やりあて」の背景にはある。いわば「集合的無意識」における心の交流である。しかし、いかに「集合的無意識」において我々がつながっているとしても、この暗黙的な、ノンバーバルな交流を感じ取り、意識化するには、やはり相当な訓練と注意力と、何よりも「innateness」（生得的な素質）がいる。少々長いが、以下に C.G.ユングの自伝の一節から「共時的な」体験の事例を挙げる。熊楠が記している「生得的(innate)tact」による「やりあて」を思い出しつつ、読

んでいただきたい。

私の妻の家族が死ぬ前にも、私は似たような経験をした。私は、妻のベッドが石の壁に囲まれた深い穴になっている夢をみた。それは墓で、何か古めかしい感じがした。私は、それは誰かが最後の息を引きとりつつあるかのような深いため息を聞いた。妻に似た姿が穴の中に坐っていて、上に浮かんできた。それは白いガウンで黒いシンボルが織りこんであるものを着ていた。私は目覚め、妻を起こして時刻を確かめた。午前三時であった。あまりにも奇妙な夢だったので、それが死を意味するのではないかと、私はすぐに思った。七時に、妻の従姉が午前三時に死んだという知らせがとどいた。

予知は、しばしば生じるが、認知されないことが多い。このようなことを私は、次のような夢で経験した。私は園遊会に出席している夢を見た。そこで私は妹をみて驚いてしまった。というのは、その妹は数年前に亡くなっていたからである。死んだ友人の一人もそこにいた。他の人たちは未だ存命中の人ばかりだった。そこで、妹が私のよく知っているある婦人と一緒にいるのをみた。夢の中でさえ私は結論を下していて、その婦人は死ぬのだと思った。「彼女は刻印を押されている」と思った。夢の中で、彼女が誰かをはっきりと私は知っており、バーゼルに住んでいることも解っている。しかし、目が覚めるや否や、夢全体は生き生きと心に残っているのに、彼女が誰であったか、いくら思い出そうとしても思い出せなかった。私はバーゼルにいる知人の顔を全部思い浮かべて、その記憶像が夢の記憶をよびおこしてくれるかどうかをこころみてみた。しかし、全然駄目であった。

二週間程して、私の友人が事故死したとの知らせを受けとった。すぐに、私はそれが私の夢に出てきながら、誰か解らなかった女性であることに気づいた。彼女は死ぬ一年前まで、私の患者であり、相当長い間会っていたので、彼女については、明確で詳細な記憶を私はもっていた。

[Jung 1963, 河合他訳 1973：142-143]（傍線―唐澤）

熊楠同様、ユングも同じような「死の予知夢」をしばしば経験していたようだ。おそら

く誰しもこのような経験ができるわけでもなく、その確固たる方法（メソッド）があるわけでもない。しかし、このような経験は決して「創作」と言えるものではないのだ。熊楠は、このような体験を嘲笑する者に対して、以下のように述べている。

> 貴下等は、小生がかかるへんなこと【羽山芳樹の死の予知夢】を、かく長文に綴りて肝心の菌の写生を懈（おこた）り、おびただしき時間と力を空費せしを笑うかも知れず。貴下等門外漢にそんなに軽笑さるるほどのつまらぬことを、かく何の必要もなきに多大の紙筆時間を費やして書くところかが小生が友愛に厚きなり。それを笑う人は自分がそんな目にあいしことなく、そんなことを聞いても何をも感ぜざるによる。
>
> ［1931 年 8 月 20 日付岩田準一宛書簡］（『全集 9』p.44）（【　】内、傍線―唐澤）

熊楠は、「人々はこのような体験を嘲笑するかもしれない。しかし、嘲笑する人々は自分たちがそのような体験をしたことがないからで、またそのような体験を聞いても何にも感じない、いわば鈍感な人間なのだ」と言っている。

> これ【夢や「幽霊」の啓示によるさまざまな珍種の発見】を疑う人々にあうごとに、その人々の読書のみしてみずからその境に入らざるを憐笑するのみ。（弄石で名高かりし木内重暁の『雲根志』を見るに、夢に大津の高観音とおぼしき辺に到りて、一骨董店に葡萄石をつり下げたるを見、さて試みにそこに行きみしに、果たしてみすぼらしき小店に夢の通りの石をつり下げありしゆえ、買い得たりなどいうことあり。これを妄誕とせる人は、その人木内氏ほどそのことに熱心ならざりしか、または脳作用が異（かわ）りおるによる、と小生は思う。）
>
> ［1931 年 8 月 20 日付岩田準一宛書簡］（『全集 9』p.25）（【　】内、傍線―唐澤）

「熟練能的（skilled）tact」による「やりあて」に関しては、熊楠の言葉はさらに辛辣になる。「このような『やりあて』を信じない者は、ただ読書のみして自ら動かない（考えない）者だ。このような体験を妄誕とする人は、熱心さが足りない。あるいは脳作用が変なのだ（脳が自分のように冴えていないからだ）。」と述べている。

ユングもそうであったが、熊楠もこのような体験は「体系化」して言語によって明示化できるものではないことを理解していた。今は、ただ体験した事実を述べることしかできない。しかし、だからといってそのような体験が妄誕だと言うのはあまりにもナンセンスなのである。

16-2, rapport について

自己と他者とは「深層」において結ばれている。両者が通い合う場所がある。言語化できない次元での交流がある。それが「ラポール rapport」である。それは特に親和的で、相互に信頼感のある関係や雰囲気のことでもある。

熊楠は、「ラポール」にいち早く着目した日本人の一人であろう。現代のカウンセリングにおいても、この「ラポール」が非常に重要視されている。クライエントとカウンセラーの間に言葉を超えた交流が生まれたとき（それは往々にしてカウンセラーが共感性を持ってクライエントへ接することで生まれる）、そこには「ラポール」が生じていると言うことができる。この「ラポール」によって、カウンセリングは飛躍的にうまくいくと言われている。

以下では「ラポール」について言及している熊楠の言をいくつか取り上げる。

> 小生旅行して帰宅する夜は、別に電信等出さざるに、妻はその用意をする。これはrapport（ラツポール）と申し、特別に連絡の厚き者にこちらの思いが通ずるので、帰宅する前、妻の枕頭に小生が現われ呼び起こすなり。東京にありし日、末広一雄など今夜来ればよいと思い詰めると何となく小生方へ来たくなりて来たりしことしばしばあり。
>
> [1925 年 1 月 31 日付矢吹義夫宛書簡]（『全集 7』p.32）（傍線―唐澤）

熊楠は旅行から帰宅する際、特に妻に連絡を入れなくても、妻はその日に熊楠が帰宅することを察し、その準備をして待っているという。これを熊楠は、「ラポール」によるものだと言うのだ。

変態心理学にrapport（往腹とでも訳すべきか）と申すことあり。末広一雄氏は小生大正三、四年ごろより文通すれど面識なかりしが、大正十一年上京してのち小生旅館へしばしば来られ候。小生が旅館にありてひまなる余り末広氏が来ればよいと思うと二時間も立たぬうちに来たりしことしばしばなり。何というて用件あるにあらず、ただ一訪してみようという気になって来るなり。また来てみれば小生熟睡中ゆえそのまま帰宅されしこともあり。こんなことは双生児に至って多きことの由、一向不思議とか霊妙とかいうことを主張せざる科学一点張りの学者が単に統計上より申すことに候。貴下より書信あるとほとんど同時に小生より不図思い立って貴下へ郵便物を差し出すことしばしばあるもこのラッポールの一つに御座候。

［1927 年 9 月 15 日付三田村玄龍宛書簡］（『別巻 1』p.519）（傍線―唐澤）

これは、文通上の友人・末広一雄氏が「来ればよいのになぁ」と思っていると、本当に氏がやって来たという事例である。「このような『一致』が多く生じるのは、双生児のみだと主張するのは、ただ科学一点張りの学者であり、単に統計を出しただけである。双生児でなくとも『ラポール』は生じる」と熊楠は主張している。上記書簡において、熊楠は「ラポール」を「往腹（往復）とでも訳すべきか」と述べている。勿論、それは表面上の会話（言語）による「往復」ではなく、深層心理、ノンバーバルな領域での「交流」あるいは「交感」のことである。この領域では、通常我々が認識している時間も空間も無視される。遠距離であろうが同時に事柄が起こり得る。この領域は「集合的無意識」であり、そこは不可視であり、また時空を超えてつながっている「場」のことである。つまり、自己と他者の区別が不鮮明になる「場」であり、最も「生得的tact」が働く「場」――その「場」こそ、「南方曼陀羅」で言うところの「理不思議」の領域なのである。

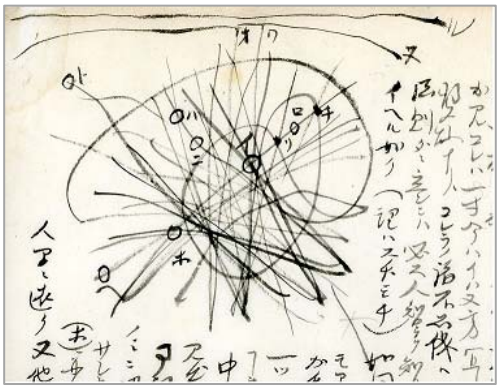


写真 10　いわゆる「南方曼陀羅」（『全集 7』、p.365）
画像提供：南方熊楠顕彰館

……（ヌ）ごときに至りては、人間の今日の推理の及ぶべき事理の一切の境の中で、（この図に現ずるを左様のものとして）（オ）（ワ）の二点で、かすかに触れおるのみ。（ル）ごときは、あたかも天文学上ある大彗星の軌道のごとく、（オ）（ワ）の

二点で人間の知りうる事理にふれおる（ヌ）、その（ヌ）と少しも触るるところないが、近処にある理由をもって、多少の影響を及ぼすを、わずかに（オ）（ワ）の二点で人間の事理にふれおる（ヌ）、その（ヌ）と少しも触るるところないが、近処にある理由をもって、なにか一切ありそうなと思う事理の外に、どうやら（ル）なる事理がありそうに思わるというぐらいのこと想像しうるなり。…（中略）…さてこれら、ついには可知の理の外に横たわりて、今少しく眼鏡を（この画を）広くして、いずれにかて（オ）（ワ）ごとく触れた点を求めねば、到底追蹤に手がかりなきながら、（ヌ）と近いから多少の影響より、どうやらこんなものがなくてかなわぬと想わるる（ル）ごときが、一切の分かり、知りうべき性の理に対する理不思議なり。さてすべて画にあらわれし外に何があるか、それこそ、大日、本体の大不思議なり。

［1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡］（『全集 7』p.366）（傍線―唐澤）

この書簡で言われている（ヌ）や（ル）とは、図〔写真 10〕の上部を彗星のように流れる二本の線を表している。まず「大不思議」とは一体何かについて、ここで簡単に述べておく（詳細は第 6 章で論ずる）。「大不思議」、それは全てを包み込む、いわば「一」である。そこには内も外も、区別も対立もない、人間にとっては「不可知」の領域である。「大不思議」が「不可知」である一方、「理不思議」は、まだかろうじて知ることができる「可知」の領域である。「大不思議」が、完全に自他未分化な場だとすれば、「理不思議」はまだ辛うじて自己が残っている（つまり知が働く）、自他不鮮明な場だと言うことができる。

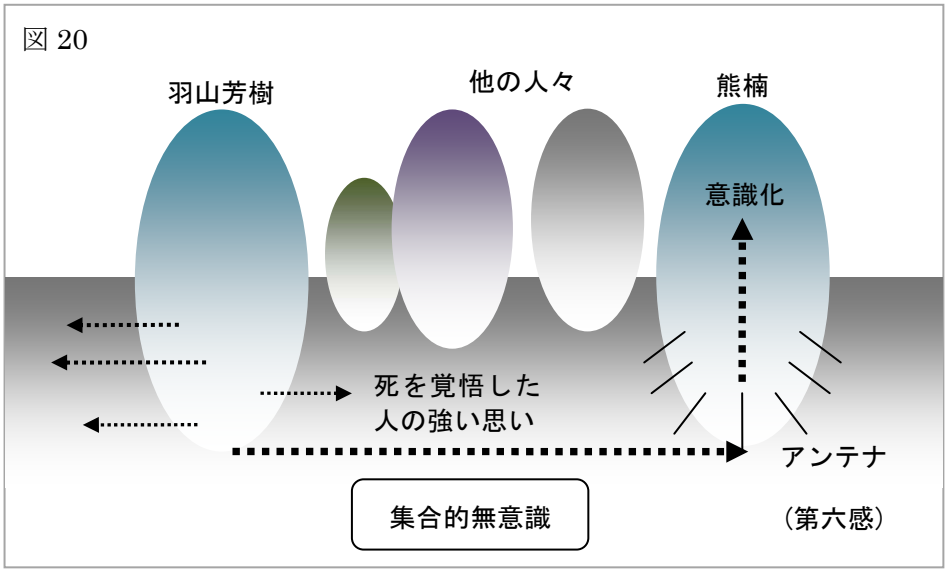
「理不思議」は、明示化され得る領域（＝「事」・「心」・「物」の各不思議――それらは、図における直線と曲線が入り乱れる処である）に少しだけ触れている線（ヌ）から近いので（要するにそれが、線（ル）にあたる）、「どうやらこんなものがなければならない（どうやらこんなものがなくてかなわぬと想わるる）」というように推論・予知によって知られる領域でもある。それは、「知りうべき性の理」に対するもの、客観的理性である「理論」・「論理」（熊楠が言うところの「可知の理」）に相対する、直接的「推理」・第六感が働く場なのである。熊楠は、そこにこそ「一切の分かり」が隠れていると言う。また熊楠は、我々人間にはこのような領域でも知る能力があると言う。

この領域において「やりあて」を可能にするためには（この自他不鮮明な領域での「交

感」に気付くか気付かないかは)、その人の「第六感」が鋭敏かどうかにかかっていると思われる。

> 人のまさに死なんとする前に、もはや覚悟をきわめて、平生や旧時の交友などのことを静思する。その際その思いが池に石を抛げて渦紋を生ずるごとく四方へ弘がり、もはや遠くひろがりて影を留めざるに至り、そこに受動に適せる葦の一本もあらんか、一旦ほとんど消滅せる渦紋がまたそれによって強く現出するごとく、かかる力を受くる適せる脳の持ち主に達してたちまち現出することかと存じ候。ラジオに似たることなり。
>
> [1931 年 8 月 20 日付岩田準一宛書簡]（『全集 9』pp.43-44）（傍線―唐澤）

ラジオ局からは、四方八方へ目には見えない電波が発信される[12]。そしてそれを受信するには「アンテナ」が必要である。つまり、熊楠は非常に高感度の「アンテナ」の持ち主だったと言える。熊楠によると、死を覚悟



[12] 熊楠は、いわゆる「生得的 tact」、「第六感」に関して、以下のような無線電信を例に出し、述べている。
さて妙なことは、われら時々、一向自分一生にかつて経験もなく、縁もゆかりもない人や事物を夢に見ることある。熊楠は身に覚えのないことながら、右様の夢が中(あた)った例も世に少なくない。殺人の場を夢に見て、精細に調べると、何たる凶器も遺骸その他の物は少しも残留せぬに、以前そこで人殺しがあったと分かる類だ。これらは夢と現の差違こそあれ、前述のごとくその夢を見た所の幻気とでもいうべき物に、殺人場の事相を印し留めたのを、のちそこに眠った人が感受して夢に見たと解する外はない。果たして然らば、無線電信は何人も何物も感受せぬが、それ相応の設備した受信機に感受さるるごとく、右述の幻想や夢想は、それに相応した性質の人々には容易(たやす)く感受さるるので、研究さえ進まば不思議でも何でもなく、無線電話同様、物理学上の一事項たるを出でずと思わる。それを何の研究の手掛りも求めず、空しく不思議呼ばわりするは学者の所為でないと述べて、それから手掛かりを求むる方法を論じたが、話が素敵に長くなるから、ここには細説せぬ。
[1922 年 5 月『牟婁新報』5 月 4 日「上京日記」]（『全集 10』p.72）（傍線―唐澤）
つまり、ここで熊楠は、ある種の「やりあて」においては、「感受」する素質（innateness）が必要であることを述べている。

した人の強い思いは、ラジオの電波が四方八方に発信されるように広がるという。熊楠は、それを受信し、意識化することができた〔図 20〕。上記書簡を読んでも分かるように、熊楠自身、受信に適した「アンテナ」（第六感）を持っていることを自覚していたようである。

電波が目には見えないから「ない」という者はいない。同じように、熊楠によると、人の思い（特に死の直前の強い思い）も電波の如く言語化されずとも発信されているという。熊楠はそれを受信する鋭敏な「第六感」を持っていた。他の人々は、そもそも「第六感」がある・ない以前に、ノンバーバルな領域における交流（交感）を知らないために、受信することはできないのだ。このようなノンバーバルな交流は、「無意識」よりもさらに深い、生物の根底とも言うべき「集合的無意識」で行われるものであろう。ユングによると、人間（生物）は皆その層で溶けあい、つながっているという。

この鋭い「第六感」は生まれつき、と言ってしまえばそれまでだが、信じる者と信じない者では、状況はまったく異なってくるであろう。つまり、信じて感度は悪くとも「アンテナ」を用意するのか、信じないで無視するのか――この差は大きい。つまるところ「注意力」が重要なのである。常に自身の「心の揺れ・動揺」を敏感に感じ取ろうとし、その意味を考えようとする「構え」が必要なのだ。

ユングは、論文「非因果的連関の原理としての共時性」の中で、ライン（Joseph Banks Rhine 1895～1980 年）が行った超能力実験を取り上げて、興味深い考察を行っている。この実験は、被験者が見えないところにあるカードのマークを当てるというもので、中にはかなりの確率でマークを的中させる者もいた。この実験結果について、ユングは以下のように述べている。

> 【実験に対する】関心の欠如や倦怠は否定的に働く因子であり、<u>熱中、積極的な期待、希望や ESP の可能性に対する信頼は良い結果を産み</u>、それらは、いかなる結果が出るかを決定する現実の条件であるように思われる。
>
> [Jung・Pauli 1955, 河合・村上訳 1976：23]（【 】内、傍線―唐澤）

つまり、「共時的」現象には「希望」・「期待」という心的要因が大きく関与していると思われる。ではなぜ「期待」・「希望」することが、「共時的」現象へとつながるのか。河合

は端的にこう述べている。

「希望する」人は、心が広く開放されるので、共時的現象に他の人よりもよく気づくとも考えられる。

[Progoff 1973, 河合隼雄・河合幹雄訳 1987：203]

勿論、熊楠が身近な人の死を「希望」していたはずはないが、夢を通じて得られた、自身の直観に対しては、「当たる」と信じていた。それがたとえ身近な人の死に関してでさえ、そうであった。

熊楠は、いわゆる「超心理的事象」を「偶然」として片付けずに、そこに存在する意味に「気づき」、それを広く解放された心で「受容」していた。また熊楠は、得られた直観に「期待」をしていた。さらにその直観を信じ、そして「行動」をしている（例えば、羽山芳樹の死の場合、死んだ時刻をわざわざ聞き出している）。「行動」がなければ、「やりあて」ることはできないのだ。[13)]

第 17 節，娘・文枝の話より

熊楠の娘・文枝の話（インタビュー：聞き手―谷川健一）などからも、熊楠の「やりあて」について知ることができる。

（熊楠の勉強ぶりについての質問から）

――すっと見られるわけですか。私たちは本を捜し、捜しでなければ……。

文枝　パッとあけますね。よく「何ページにあると思ったら、やっぱりあった」と言って喜んだりしていました。「まだ、頭、気づかいないな」なんて言いまして。

[南方文枝 1981：12]

---

13) 脳科学者・茂木健一郎は、「セレンディピティ（serendipity）」には、三つの要素―「行動」「気づき」「受容」―が必要であるという。「セレンディピティ」とは、「偶然の幸運に出会う能力」と訳されることが多い。茂木は「セレンディップの三人の王子」の例を挙げ、「『行動』、『気づき』、『受容』が『偶然を必然にする』セレンディピティを高めるために必要なのです。」と述べている。[茂木 2005：112-113 参照]

熊楠はよく、探していた本のページを的中させている。これも「やりあて」と呼べるものである。

1911 年 4 月 29 日[土]　晴

午後四時、日記こゝ迄書畢りて、別坐敷に行き、春告鳥、続気質全集、大和文庫を見るに、昨夜しらべしこと（心理上の事）なし。偶然手にあたる珍本全集中巻、風流夕霧一代記を見るに、昨日必死に成て捜せしことあり。

（『日記 4』p.40）（傍線―唐澤）

1924 年 1 月 9 日　陰　夕より波荒るる、風はなし、夜に及び風出　寒

五時それより福田氏へ状かくに結願禅師一銭を飛脚に乞ふとて数里従ひ行し話を求むるに、十時過に至るも見出ず、西鶴文集下巻を一度見るになし、十時過又見るに俗つれづれ三に南都大仏建立の勧進坊のことあり、似たる話なり。但したしかに結願師のことを他の書にて見しことありしと記憶すれど今夜は其本拠を得ずして止む。それより佐伯大太郎氏へ状書き、此程中苦しみ居りし末廣一雄氏より問れたる平野次郎の歌（世はかり菰と乱れつつ）を故羽山大学の彗星夢物語にあることもやと倉より三十余冊取出して見るに、初めに手に取りし卅七巻の中に夫々果たしてあり。因て写して明朝末廣氏へ出すこととす、それよりノーツエンドキーリスえ「人皮の太鼓」を書き徹暁不眠。

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）（傍線―唐澤）

上に示した二つの日記の記述では共に、熊楠は偶然手にした本の中に、探していた話があったという出来事を述べている。ここで熊楠は「偶然」と述べているが、何かしら「ひらめき」のようなものがあったのであろう。あるいは何かしらそこに「意味」を感じたのであろう。だからこそ日記に記録したのだ。上記の事例以外にも、似たような記録は日記にいくつか見ることができる。

また、自分の「思い」が通じてその通りにうまくいくこともあったようだ。これも「や

りあて」と呼ぶことができる。

（晩年と死についての質問から）

――先生はたいへん神秘的なところもおありだったようですが、何かお話になられたことはございませんか。

文枝　自分が祈っておると、それがちょうどそのとおりになるとか言っていましたが、そのときは険しい顔をしていました。顔の変る人で、すごい表情になるときもあるのです。ほんとに恐い表情になる、目がほんとうに鋭くなりますね。激して泣いたところは私は見たことはございませんが……。普通に話しているときは目尻が下がってやさしく、笑っているときは可愛らしいのですが。

[南方文枝 1981：68]（傍線―唐澤）

食事はとにかく読書しながらなので、いつ終るとも知れず、いつも一人で食べていた。床につくとたちまちバタンキュウで高いびきなのであるが、プツンと高いびきが急に止み、むくっと起き出し着物を着るとそそくさと庭にでていった。そんな夜の翌朝は上機嫌で、今一度見たいと思っていた変形菌が、自分の念力が通じたのか夢で教えてくれたので、すぐ起きてその場所に行くと、不思議にもそこで見つけたと、大満足気であった。

[南方文枝 1989、飯倉・長谷川 1991 所収：317]（傍線―唐澤）

熊楠は、夢で見た場所に行くと、探していた粘菌を見つけたという。この類の「やりあて」はすでに「熟練能的(skilled)tact」による「やりあて」として本章で検証してきた。熊楠は日記に記すだけでなく、家族にも「やりあて」についてよく話をしていたようだ。

また、熊楠は「祈念」ということを信じていた。上記からも分かるように、自分が祈っているとその通りになるということは勿論、他者による「祈念」も信じていた。

小生は生来事に臨んで神仏を祈るということかつてなし。しかるに欧米の心霊学者などにして、小生と等しく一向神仏など信ぜぬものにして、祈念ということは多少きく

ものと主張する人多し。

ラジオが遠くへきくごとく、人の一念が（善悪如何に拘らず）もっぱらなる時はきくという主張なり。小生はまた自分のために祈念しくるる人ある間は、自分がむやみなことをするとその人の好意に対してすまぬというところから、自然むやみな言行を慎むということだけはたしかにききめありと思う。

［1929 年 4 月 15 日付山田栄太郎宛書簡］（『全集 9』p.469）（傍線―唐澤）

山田の妻信恵は幼少多難のとき小生が不断専念しやりし返礼この時なりと、一日かかさず行幸すむまでは、とにかく小生に事なかれと専念しおり候（これは写真にみえたる、小生四十二年前宿泊の夜明けに生まれた婦人）。小生は剛情なるものにて、かかる際にも宗教心はなきものか、仏神に祈請するという念は少しも起こらず候。ただし女など弱きものが自分のために無事を念じくるると知ったら、その女にあまり失望せしむるようなことは致さぬだけの斟酌は致し候。それがすなわち大いに益あることと存じ候。願わくは貴下も小生の無事ならんことを専念されよ。俗にいう「うまく行けばよいになあ」くらいのことで宜しく候。

［1929 年 4 月 30 日付上松蓊宛書簡］（『全集 9』p.484）（傍線―唐澤）

「小生は生来事に臨んで神仏を祈るということかつてなし。」、「小生は剛情なるものにて、かかる際にも宗教心はなきものか、仏心に祈請するという念は少しも起こらず候。」とは述べつつも、熊楠は「祈念」について信じていた。自分が祈られていると思うと、その祈っている人を失望させないように報いようとするため、うまくいくと述べている。言い換えるならば、熊楠は、「祈念」が深層心理に与える影響（サブリミナル効果）は、あり得ると考えていたのだ。上記二つの書簡は、熊楠が昭和天皇に御進講（1929 年 6 月 1 日）をする前のものである。「願わくは貴下も小生の無事ならんことを専念されよ。俗にいう『うまく行けばよいになあ』くらいのことで宜しく候」とは、御進講に際しての熊楠の気持ちがよく表れている。

本章では熊楠による「人の死の予知」に関して精査してきたが、そのことに関して文枝は以下のような興味深い出来事も述べている。

神坂　近しい人が亡くなるときは、予知的な幻視でぴたりとそれを当てられたそうですね。

文枝　「ゆうべ風の玉が入ってきて、書斎を突き抜けて西へ行った」と言って……。そしたら必ず、訃報が届くんです。不思議でした。そういうことは他にもいろいろありました。

[神坂・南方文枝 1993：154]

「風の玉」の話については、筆者は「日記」において今のところまだ見つけていない。それにしても、熊楠の「死の予知」はしばしばあったようだ。文枝も「そういうことは他にもいろいろありました。」と述べている。今後、翻刻されるはずの「日記」にも必ず熊楠による「死の予知」に関する記録は出てくるはずである。その中に「風の玉」の話があるかもしれない。

第 18 節, 資料　『ヒューマン・パーソナリティー』に言及した論考

『ヒューマン・パーソナリティー *Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*』（1903、Kessinger Pub Co.）は未だ和訳・刊行されていない。英国心霊現象研究協会（The Society for Psychical Research 通称 S.P.R.）を創設し会長を務め、心霊研究において多くの業績を残したマイヤーズだが、彼の研究成果が当時（19 世紀末～20 世紀初頭）どのように世に受け入れられ、またどのように浸透していったのかは、未だまとまった研究はないのが現状である。「テレパシー telepathy」や「超常 supernormal」などは、マイヤーズの造語であり、それらは現在でも用いられている。それにも関わらず、日本において彼の名を知る者は非常に少ない。日本人の誰もが聞いたことがあると言っても過言ではない「テレパシー」という言葉を造った人物がマイヤーズその人であることが知られていない事実は、実に奇異なことである。その背景には何があるのか――筆者は『ヒューマン・パーソナリティー』が日本において和訳されておらず、一般に普及しなかった点にあると考える。そのような中で、おそらく、アメリカ・キューバ・

イギリスを十数年に渡り遊学し、十数ヶ国語を解した熊楠のみが、日本においてマイヤーズを評価し、その著作の和訳・刊行さえ構想していた。熊楠は同書を「抄訳し、それに小生の注を付し、最後に小生の論を付し……」[1904 年 3 月 24 日付土宜法龍宛書簡]（『全集 7』p.465）などと述べている。しかし結局それは実現されることはなかった。熊楠は、この書を「近来希なる著作」[1904 年 4 月 17 日～6 月 15 日・土宜法龍宛書簡]（「〔資料〕土宜法龍宛南方熊楠書簡」、紹介：武内善信、『和歌山市立博物館研究紀要』第 25 号 2010、p.69）とまで評価しており、彼に与えたであろうその影響力の大きさが覗える。同書は、「序論」・「人格の分裂」・「天才」・「睡眠」・「催眠術」・「知覚上の自動作用」・「死者の幻影」・「筋肉上の自動作用」・「トランス・憑依・エクスタシー」・「結語」の全 10 章から成っている。この書物はマイヤーズの数十年に渡る心霊主義に対する論考の集大成とも言うべき大著である。

以下では、熊楠が論考（未発表手稿も含む）において『ヒューマン・パーソナリティー』（引用・参照ページ数を明らかに表記しているもの）に言及している箇所を抜き出し、さらにその箇所の、『ヒューマン・パーソナリティー』において該当する箇所を和訳した。熊楠の思想に多大な影響を与えた同書を少しでも知る端緒になればと思う。

まずは、熊楠が『ヒューマン・パーソナリティー』に言及している論考を、以下にまとめて挙げておく。

- 「睡眠中に霊魂抜け出づとの迷信」、『人類学雑誌』27 巻 5 号、1911 年 8 月（『全集 2』p.260）
- “Twins and Second Sight”、*Notes & Queries* 11s. iv. iii. 469; iv. 54、1911 年 8 月（『全集 10』p.177）
- 「南天の葉と二股大根　紙上問答」『郷土研究』1 巻 4 号、1913 年 6 月（『全集 3』p.214）
- 「臨死の病人の魂、寺に行く話」『郷土研究』2 巻 9 号、1914 年 11 月（『全集 2』pp.273-274）
- 「馬に関する民俗と伝説」『太陽』24 巻 14 号、1918 年 11 月（『全集 1』p.312）
- 「自分を観音と信じた人」未発表手稿（『全集 6』pp.408-409）
- 「巫女が高処に上る」未発表手稿（『全集 6』p.413）

・　「猫や鼠と男女の関係」未発表手稿（『熊楠研究 6』pp.290-291）

まず、熊楠が、初めて『ヒューマン・パーソナリティー』を参照したと思われる論考「睡眠中に霊魂抜け出づとの迷信」（1918 年『人類学雑誌』）を見てみる。

> 七年前厳冬に、予、那智山に孤居し、空腹で臥したるに、終夜自分の頭抜け出で家の横側なる牛部屋の辺を飛び廻り、ありありと闇夜中にその状況をくわしく視る。みずからその精神変態にあるを知るといえども、繰り返し繰り返しかくのごとくなるを禁じえざりし。その後 Frederic W. H. Myers, 'Human Personality,'1903, vol. ii, pp.193, 322 を読んで、世にかかる例尠なからぬを知れり。
>
> [1911 年 8 月「睡眠中に霊魂抜け出づとの迷信」、『人類学雑誌』27 巻 5 号]
>
> （『全集 2』p.260）（傍線―唐澤）

上記の論考で示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の参照個所（vol.2, p.193 と p.322）の内容は、以下の通りである。

> CAPTER IX, TRANCE, POSSESSION, ECSTASY, p.193
>
> 905. The next main subject which fell under our description was *sleep*. And this state—the normal state which most resembles trance—has long ago suggested the question which first hints at the possibility of ecstasy, namely, What becomes of the soul during sleep? I think that our evidence has shown that sometimes during apparent ordinary sleep the spirit may travel away from the body, and may bring back a memory, more or less confused, of what it has seen in this clairvoyant excursion. This may indeed happen for brief flashes during waking moments also. But ordinary sleep seems to help the process; and deeper states of sleep—spontaneous or induced—seem still further to facilitate it. In the coma preceding death, or during that "suspended animation" which is sometimes taken for death, this travelling faculty has seemed to reach its highest point.

APPENDICES, TO CHAPTER VII, p.322

Dr. Wiltse's narrative is followed by corroborative statements from five persons who were present in the sick-room, viz., his wife and sister, the physician in attendance, and two friends. These statements are given in full in the *Proceedings*, and show that the description of his experience given by Dr. Wiltse immediately after recovering consciousness was in all essential details the same as the account printed above. They also confirm what he reports of the actual external facts of the case, the illness and attendant circumstances.

Here, at any rate, whatever view we take as to the source or the content of Dr. Wiltse's vision, the fact remains that the patient, while in a comatose state, almost pulseless, and at a temperature much below the normal, did, nevertheless, undergo a remarkably vivid series of mental impressions. It is plain, therefore, that we may err in other cases by assuming prematurely that all power of perception or inference has ceased.

Setting aside the manifestly dream-like or symbolical element of the vision, we observe that Dr. Wiltse believes that his perception of the people in the room, and of the rain-washed streets outside, was of a clairvoyant type. But this cannot be proved; for the picture of the streets might be due to unconscious inference; and some acuteness of perception, like that of the lethargic hypnotised subject, might account for his knowledge of movements in the room made after his eyes were closed. However this may be, it is probable that if he had actually died, and if some kind of message from him had been subsequently received, that message might have included facts as to the scene of death which the survivors would have believed to have been unknown to him while still living, but which he did in fact acquire during his comatose condition.

I may add that since the first publication of Dr. Wiltse's narrative both Dr. Hodgson and I have made his personal acquaintance, and have further

corresponded with him on psychical experiments, with the result that the experience just cited, though it cannot, of course, he made *evidential*, has risen in importance in our eyes. See also another experience of Dr. Wiltse's in 663 A.

第九章 「トランス、憑依、エクスタシー」 193 頁

905. 我々が次に記述すべき話題は「眠り」についてであった。そしてこの状態――最もトランス状態に似ている常態――は、古来、エクスタシー〔忘我〕の可能性、つまり眠っている間、魂はどうなっているのか？という問いに対する第一のヒントを示し続けている。我々の証言は、時に明らかに普通の眠りの間、魂は肉体から出て回るのではないか、そして多かれ少なかれ混乱しつつもこの透視的[14]〔体外〕離脱において見たことの記憶を持ち帰っているのではないか、ということを示すと思われる。これは、起きている間にも、一瞬の突発的なものとして、確かに起こり得るものであろう。しかし、通常の眠りは、この過程〔プロセス〕を助けるようである。そして、深い眠り――自発的あるいは誘導的な深い眠り――は、さらにそれを容易にするようである。死に先立つ昏睡において、あるいは時に死と見なされる「仮死状態」において、この〔魂の〕出回りの能力〔体外離脱〕は、その頂点に達するようである。

（和訳・〔 〕内―唐澤）

第七章 「付録」 322 頁

ウィルツ博士の話は、病床にいた五人の人々による言葉によって裏付けられる。五人の人々とは、即ち、彼の妻と妹〔あるいは姉〕、居合わせた医者、そして二人の友人である。彼らの言葉は、『〔S.P.R.の〕紀要』に全て載っており、また、ウィルツ博士が意識を取り戻した後すぐに彼の体験を記したものも載っている。それは上述の報告と同じくらい非常に重要な詳論を含んでいる。それらは、またその事例の外的事実、病気、そして周囲に居合わせた人々に関する彼による報告を裏付けるものでもある。

さて、いずれにせよ、ウィルツ博士のヴィジョンの原因や内容に関して我々が取り

[14]「透視」とは、超心理学の用語で、障壁を通して内部にある事物を普通の感覚以外の特殊な感覚によって感知することである。[広辞苑第 5 版 2004：電子辞書版参照]

あげる視点が何であれ、昏睡状態にあり、ほとんど脈がなく、体温も通常よりはるかに低かったその患者が、そのような状態にもかかわらず、非常に鮮明な一連の精神的影響を受けた事実がなくなるということはない。それゆえ、我々が知覚の力や推論〔予知〕の力全てがあり得ないものだと早まって決めてかかることによって、他の事例においても間違いをおかすかもしれないということは明白である。

我々は、そのヴィジョンの明らかに夢のような、あるいは象徴的な要素は横に置いても、ウィルツ博士の、部屋にいた人々に対する知覚、そして外の雨の通りの知覚は、透視型のものであることを、彼が信じていることを述べることができる。しかし、これは証明することはできない。〔外の雨の〕通りの映像は無意識の影響によるものかもしれないからである。そして、何らかの鋭敏な知覚、つまり深い催眠にかけられた人の知覚のようなものは、彼の眼が閉じられた後、部屋において成された動向に関する情報を説明するかもしれない。これがどのようなものであっても、彼が実際に死んで、次に彼からの何らかの〔あの世からの〕メッセージを受け取ったなら、そのメッセージが、生きている者が、生きている間には、未知であると信じていた死の場面、そして事実上、昏睡状態の間に得た死の場面に関する事実を含んでいるということは、ありえそうである。

ウィルツ博士の話の最初の出版以来、ホジソン博士と私は彼の個人的な知り合いであり、心霊体験に関して彼と文通をしており、あの体験が引用された結果、もちろん彼が「証拠」を作ることは不可能であるが、我々の目においてそれは重要なものとして挙げられていることを、私は付け加えておこう。また、ウィルツ博士の他の体験は、663A 節を参照のこと。

（和訳・〔 〕内―唐澤）

以下は、1918 年 8 月、*Notes & Queries* に掲載された熊楠の論考 “Twins and Second Sight” である。

The late Frederic W. H. Myers in his ‘Human Personality and its Survival of Bodily Death,’ 1903, vol. i. p. 272, speaks of a butler named James Carroll, who

has had “another psychical experience, not visual—a feeling of extreme exhaustion and sadness, coupled with the idea of his twin-brother, on the first day of his distant twin-brother’s fatal illness; and again just before the receipt of a telegram summoning him to the death-bed. It is an interesting observation based by Gurney on his analysis of relationships in telepathic cases that the link of *twinship* seems markedly to facilitate this kind of communication.

［“Twins and Second Sight”、*Notes & Queries* 11s. iv. iii. 469; iv. 54、1911 年 8 月］（『全集 10』p.177）（傍線—唐澤）

フレデリック W. H. マイヤーズの近著『人間個性とその死後存続』（1903 年 1 巻 272 頁）に、ジェームス・キャロルという名の執事の話が載っている。彼は〔可視的なものとは〕別の、不可視な心霊的な経験を持っていた。——遠くにいる彼の双子の兄弟に、命にかかわる病が襲った最初の日、その双子の兄弟に対する漠然とした思いと共に、極端な疲れと悲しみの感情が、彼に起こったのである。そして再び、臨終に彼を呼び出す電報を受けとる直前に、同じことが起こった。それは、ガーニーによる、テレパシーの事例における関係性の分析の、つまり「双子間の親密な関係」が明らかにこの種の意志伝達を容易にするような分析の、興味深い観察記録である。

（傍線・和訳—唐澤）

この論考において示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の参照個所（vol.1, p.272）の内容は、以下の通りである。

CHAPTER VI, SENSORY AUTOMATISM, p.272

I quote a case from *Phantasms of the Living*. The informant, a butler named James Carroll, was personally known to Edmund Gurney, and has had another psychical experience, not visual—a feeling of extreme exhaustion and sadness, coupled with the idea of his twin-brother, on the first day of his distant twin-brother’s fatal illness; and again just before the receipt of a telegram

summoning him to the deathbed. It is an interesting observation based by Gurney on his analysis of relationship in telepathic cases, that the link of *twinship* seems markedly to facilitate this kind of communication.

第六章　「知覚上の自動作用」　272 頁

『生者の幻影〔*Phantasms of the Living*〕』からある事例を引用する。情報提供者は、ジェームス・キャロルという名の執事であり、彼はエドワード・ガーニーの個人的な知り合いであった。そして彼は〔可視的なものとは〕別の、不可視な心霊的な経験を持っていた。――遠くにいる彼の双子の兄弟に、命にかかわる病が襲った最初の日、その双子の兄弟に対する漠然とした思いと共に、極端な疲れと悲しみの感情が、彼に起こったのである。そして再び、臨終に彼を呼び出す電報を受けとる直前に、同じことが起こった。それは、ガーニーによる、テレパシーの事例における関係性の分析の、つまり「双子間の親密な関係」が明らかにこの種の意志伝達を容易にするような分析の、興味深い観察記録である。

（和訳・〔 〕内―唐澤）

以下は、1913 年 6 月、『郷土研究』に掲載された熊楠の短文である。

欧米に、近年も犬に幽霊あるを見しと確言する人あり。一九〇三年出版、マイヤースの『ヒューマン・パーソナリチー』一巻六三五頁を見よ。

[1913 年 6 月「南天の葉と二股大根　紙上問答」『郷土研究』1 巻 4 号]（『全集 3』p.214）

（傍線―唐澤）

この短文において示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の参照個所（vol.1, p.635）の内容は、以下の通りである。

APPENDICES, TO CHAPTER VI, p.635

I quote an instance from the *Proceedings* S.P.R., vol. xiv. p. 285. The account was

received in December 1890[1], from Mrs. Bagot, writing from The Palace, Hampton Court. Both Mrs. Bagot and her daughter, who confirms the account, are known to me.

In the year 1883 we were staying at the Hôtel des Anglais, at Mentone. I had left at home (in Norfolk), in the care of our gardener, a very favourite little dog, a black and tan terrier, named Judy. I was sitting at table d'hôtel and suddenly saw my dog run across the room, and unthinkingly exclaimed, "Why, there's Judy!" There was no dog in the hotel, and when I went upstairs I told my daughter, who was ill, what I had seen. A few days after I got a letter saying that Judy had gone out with the gardener as usual in the morning quite well, but when he returned at breakfast-time she was suddenly taken ill, and died in half-an-hour. At this distance of time I cannot distinctly remember whether the dates agreed, but my impression is that she had died the day I saw her.

MARY BAGOT

Mrs. Bagot's daughter, Mrs. Wodehouse, sent me on February 9th, 1896, the following corroboration, stating that the quotations were an exact copy of the references to the dog in her diary for March 24th and 28th, 1883. It will be observed that there is no proof that the dog was seen on the day of its death, but it is clear that Mrs. Bagot had not heard of its death till afterwards.

56 CHESTER SQUARE, S. W.

(*Copy of Diary.*) *March* 24th, 1883. *Easter Eve* (Mentone). — "Drove with A. and picked anemones. Lovely bright day. But my head ached too much to enjoy it. Went to bed after tea and read Hettner's 'Renaissance'. Mamma saw Judy's ghost at table d'hôtel!"

March 28th, Wednesday (Monte Carlo).— "Mamma and A. came over for the day. Judy dead, poor old dear."

NOTE.—I distinctly remember my father and mother and sister (Mrs. Algernon Law) and my cousin (Miss Dawnay) coming into my bedroom all laughing and telling me how my mother had seen Judy (black and tan terrier) running across the room whilst they were at table d'hôte. My mother was so positive about it, that one of the others (I *think* my father) had asked the waiter if there were any dogs in the hotel, and he answered in the negative. I can find no further mention of the time or day of the dog's death in my diary.

I may also be mistaken in the day on which my mother saw Judy, for although I usually write my diary every evening, I sometimes leave it for two or three days and then write it in as best I can remember. But I *distinctly* remember lying in my bed at Mentone when they told me the story, and equally clearly I remember receiving the news of Judy's death at Monte Carlo.

ADELA H. WODEHOUSE.

1 In February 1896, Mrs. Bagot wrote a second account of the same incident, which was printed in the *Journal* S.P.R. for April 1896 (vol. vii. p. 243), with her daughter's confirmation, then obtained for the first time. The earlier account, here given, is practically identical with the latter one, so that Mrs. Bagot's recollection of the circumstances does not seem to have varied.

第六章　「付録」　635 頁

S.P.R.の『紀要』16 号 285 頁からある事例を引用する。その報告は、1890 年 12 月[1] に受け取ったものである。それはバゴット夫人がハンプトン・コートの邸宅から書いたものである。その報告を裏付ける、バゴット夫人と彼女の娘は、二人とも私の知り合いである。

1883 年、私たちはマントンのホテル・デ・アングレイスに滞在していました。私はノーフォークの家に、私たちの庭師の世話の下、とてもお気に入りの小さなブラック・

アンド・タン・テリアのジュディーという名前の犬を残してきました。私はホテルのテーブルにつき、そして突然私の犬が部屋の中を走って横切ったのを見て、思いがけず叫びました。「なんでジュディーがいるの！」ホテルには犬はいませんでした。そして私は二階に上がって、病気の娘に私が見たことを話しました。数日後、私はジュディーが死んだことを知らせる手紙を受け取りました。庭師によると、朝はいつも通りとても元気だったのですが、彼が朝食時に戻ってきたとき、彼女〔ジュディー〕は突然病気になり、そして 30 分後になくなったとのことでした。これだけ時間が経ってしまったので、私は、日付が一致しているかどうかはっきりとは思い出すことができませんが、私の記憶していることは、彼女〔ジュディー〕が、私が彼女を見た日に死んだということです。

マリー・バゴット

1896 年 2 月 9 日、バゴット夫人の娘のウッドハウス夫人は、この事例を裏付ける以下のもの、つまり彼女の 1883 年 3 月 24 日と 28 日の日記において、その犬について言及した正確なコピーを私に送ってくれた。それは、その犬が死んだ日に〔バゴット夫人によって〕見られたことの証拠ではないが、バゴット夫人が後になるまでその死を聞いていないことを明らかにするものとして認められるものである。

サウス・ウエスト，チェスター・スクエア，56 番地

（日記のコピー）1883 年 3 月 24 日、復活祭の前夜（マントン）――A と一緒にドライブをし、アネモネを摘みました。とても素敵な天気の良い日でした。しかし、私は頭痛がひどくて楽しむことができませんでした。お母さんがホテルのテーブルで、ジュディーの幽霊を見たのは、私がお茶をした後、ベッドへ行き、ヘットナーの『ルネッサンス』を読んでいるときでした。

3 月 28 日水曜日（モンテカルロ）――お母さんと A が昼間に来ました。可哀そうに、年老いたジュディーは亡くなりました。

（メモ）――私は、父と母と妹〔あるいは姉〕のアルジャノン・ロウ夫人と、いとこのドーネイ嬢のみんなが笑いながら私のベッドルームに入ってきて、私にどうやって母が、彼らがホテルのテーブルについている間に、部屋を走り回るブラック・アン

ド・タン・テリアのジュディーをはっきり見たかを話しました。母はとても肯定的でしたが、他の誰か、たぶん父だったと思いますが、ホテルに犬がいたかどうかを接客係に訪ねたところ、答えは否定的なものでした。私はこれ以上この時あるいはジュディーが亡くなった日の事を書いたものを、日記に見出すことはできません。

私は大抵、日記を毎晩書くのですが、時々二、三日忘れて、後で思い出すことができることを書くことがあるので、もしかしたら、私の母がジュディーを見た日を間違っているかもしれません。しかし、私は彼らが私にその話をしたとき私はベッドに横になっていたことをはっきりと覚えています。同時に、モンテカルロでジュディーの死のニュースを聞いたこともはっきりと覚えています。

アデラ　H　ウッドハウス

1 1896 年 2 月、バゴット夫人は同じ出来事について二つ目の報告を書いている。そしてそれは、1896 年 4 月の S.P.R.の『機関誌』（7 号、243 頁）において活字にされている。その報告は、彼女の娘の証言と共に書かれており、それは初めて得られたものであった。先の報告は、実際、後の手紙と同じものだった。したがってバゴット夫人の出来事の回想は、変更が加えられたものだとは思われないのである。

（和訳・〔 〕内―唐澤）

次に、1914 年 11 月に『郷土研究』に発表された、「臨死の病人の魂、寺に行く話」を見てみる。

臨死の人の魂が寺に往く話は西洋にも多く、マヤースの『ヒューマン・パーソナリチー』（一九〇三年板）一（ママ）巻三二三頁以下に、大病で起居もならぬ父が、階上に眠らずにいた娘を誘いに来たり、見たことなき墓地に伴れ行き、ある地点で立ち止まったが、二ヵ月ばかり経ってその父死し、葬所に往って見ると果たして右の墓地であり、上件の地点に父は埋められた、とある。これぱかりでは証拠は弱いが、この外に近親の者へも、睡眠中でなく現実に、この死人のさとしがしばしばあったという記事もある。

[1914 年 11 月「臨死の病人の魂、寺に行く話」『郷土研究』2 巻 9 号]

（『全集 2』pp.273-274）（傍線―唐澤）

この論考において示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の参照個所（vol.2, p.323〔熊楠は一巻と書いているが、二巻が正しい）の内容は、以下の通りである。

APPENDICES, TO CHAPTER VII, p.323

Miss C. A. writes:—

July 12th, 1888.

About two months before the death of my dear father, which occurred on December 10th, 1887, one night about from 12 to 1 A.M., when I was in bed in a perfectly waking condition, he came to my bedside, and led me right through the cemetery at Kensal Green, stopping at the spot where his grave was afterwards made.

He was very ill at that time and in a helpless condition—so far as his ability to walk up three flights of stairs to my room was concerned. I had at that time never been in that cemetery, but when I went there after his interment the scene was perfectly familiar to me.

He led me beyond his grave to a large iron gate, but my recollection of this part is confused. I there lost sight of him.

第七章　「付録」　323 頁

C.A.婦人は以下のように書いている――

1888 年 7 月 12 日

私の親愛なる父の死の約二ヵ月前、それは 1887 年 12 月 10 日、午前 12 時から 1 時くらいの夜に起こったことでした。私が完全に起きた状態でベッドにいたとき、父が私のベッドサイドへ来て、私をケンサル・グリーンの共同墓地へと導き、後に彼の墓が作られる場所で止まったのです。

そのとき父は大変な病気で、もはや助からない状態でした。――考える限り、父が

私の部屋に来るには三つの階段を歩いて上ってくる力がなければなりませんでした。そのとき私は、決してその共同墓地を見たことはありませんでした。しかし、父の埋葬の後そこに行ったとき、私にとってその光景ははっきりと見覚えのあるものでした。

父は墓を飛び越して私を大きな鉄の門まで導きました。しかし、私のこの箇所の記憶は混乱しています。私はそこで父の姿を見失いました。

（和訳―唐澤）

次に示す論考は、1918 年 11 月、雑誌『太陽』に掲載された「馬に関する民俗と伝説」である。

香材の出処実に思いの外なるもあって、一九〇三年板、マヤースの『人品（ヒューマン・パーソナリチー）および身死後（エンド・イツ・サーヴィヴァル）その残存論』二巻第九章付録に、精神変態な人が頭頂より二種の香液を他（ひと）の望み次第出した記事と弁論あり。予これを信ぜなんだところ、七、八、九年前の毎春引き続き逆上して頭腫れ、奇南香また山羊にやや似た異香液不断出た。人により好き嫌いあるべきも、香油質のやや粘ったもので、予自身はなはだ好きだったが、医者が頑癬（たむし）の異態だろうとて薬を傅（つ）けても今に全癒せぬが、香液は三年きりで出で止んだ。

［「馬に関する民俗と伝説」『太陽』24 巻 14 号、1918 年 11 月］（『全集 1』p.312）

（傍線―唐澤）

この論考において示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の参照個所（vol.2 補遺, p.528）の内容は、以下の通りである。

APPENDICES, TO CAPTER IX, p.528

Bearing all this in minds, let us return to certain passages which have perhaps hitherto seemed among the most grotesque and incredible which the records of Mr. Moses' séances contain. I refer to the frequently attested welling or stillation of various "liquid scents," mainly verbena and woodruffe, and on one occasion at

least *altering* on request, from a circumscribed patch on the top of Mr. Moses' head. The guides affirm that this secretion is restorative; and on one occasion especially, when Mr. Moses is tried and depressed by sitting long amidst a rough crowed, it is stated that the scent is produced and evaporated in unusual quantities in order to protect him from the exhausting influence of his sorroundings.[1]

1 I may give here another instance of this phenomenon, contributed by Mr. J. F. Collingwood to *Light* of November 2nd, 1892. "I was one evening sitting with him," says Mr. Collingwood, "when he complained of not feeling well. I perceived a very sweet perfume, and remarked, as it increased. 'What a delicious scent! Where does it come from?' 'From me, the top of my head,' he replied. I felt the crown, which was wet with a pleasant odorous substance. I dipped the corner of my handkerchief in it, and kept it for months hardly diminished in potency. Mr. Stainton Moses told me that the development of these perfumes was intended as a healing process, and he was often relieved in that way." It may be observed that circumscribed patches of hyperidrosis occasionally occur on the scalp; so that we have here, in my view, an evolutive phenomenon taking the same form as a morbid or dissolutive one. It should be added that in bromidrosis the odour has been in various cases compared to that of various flowers and fruits.— (Hyde's *Diseases of the Skin*, p.102.)

第九章 「付録」 528 頁

これら全てを心に留めたまま、モーゼス氏の降霊術会による記録に含まれている、おそらく今までで最も異様で信じられない、ある一節へ戻ることにしよう。頻繁に証明されている、さまざなな「液体の香り」の噴出あるいは留出について引用する。それは主に、バーベナ〔クマツヅラ〕とクルマバソウの香りであり、少なくともある場合には、要望に応じて「変化」し、それらはモーゼス氏の頭の上部の特定の部位から発せられる。その記録は、その分泌物は復活することを主張している。特にある場合には、モーゼス氏が粗野な観衆の真っただ中に座ることによって、〔この実験を〕やら

され憂鬱になるとき、彼の周りの、その心身を疲れさせるものごとから彼を守るため、普通ではない量の香りが作られそして気化することを述べている。[1]

[1] ここに、1892 年 12 月の初め、つまり 2 日に、J.F.コリンウッド氏によって与えられた、もう一つのこの現象の事例を挙げようと思う。コリンウッド氏は「私はある夜、彼と一緒に座っていた。それは彼が、気分がすぐれないと訴えているときだった。私はとても甘い香水の匂いが次第に増していくのに気づいた。そして言った。『なんて良い匂いなんだ！どこから来ているんだろう？』『私からです。私の頭のてっぺんからです。』と彼は答えた。私は非常に香りのよいもので湿っている頭頂部に気づいた。私はハンカチの端をそれに浸した。そして数ヵ月間その効力は全く失われなかった。ステイントン・モーゼス氏はこれらの香りの発達は、癒しのプロセスとして意図され、彼はしばしばこの方法で安心するということを私に話した。それは時折、頭皮の多く汗をかく特定の部位で起こると言えるかもしれない。つまり私の見解では、我々はここに、病的なものあるいは溶解したものとしての何か同じ型である、発達の可能性のある不思議なものを持っているということである。臭汗症においては、匂いはさまざまな花や果物のそれと比較される多様な事例においてあることを付け加えておくべきであろう。（ハイド『皮膚の病』〔*Diseases of the Skin*〕p.102）

（和訳・〔 〕内―唐澤）

次は未発表手稿「自分を観音と信じた人」である。

一九〇三年板、マヤースの『個人性とその身後の存留』一巻五七五条および付記に、少しも霊符の効を信ぜざる多人が、試しにこれを佩びて、たちまちその病患を除き得た例を列ねた。その実表面霊符の効を信ぜざる人も、往々その不自覚心（サブリミナル・セルフ）に霊符の力を感受して、病が癒えるという。

［「自分を観音と信じた人」未発表手稿］（『全集 6』pp.408-409）（傍線―唐澤）

この論考で示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の該当箇所（vol.1, p.211, 575

条）の内容は、以下の通りである。

CHAPTER V, HYPNOTISM, p.211

575. The schemes of self-suggestion which have actually been found effective have covered, not unnaturally, a range as wide as all the superstition and the religion of men. That is to say, that each form of supernatural belief in turn has been utilized as a mean of securing that urgently-needed temporal blessing—relief from physical pain. We see the same tendency running through fetichistic, polytheistic, monotheistic forms of belief. Beginning with fetichistic peoples, we observe that *charms* of various kinds, — inert objects, arbitrary gestures, meaningless words,—have probably been actually the most general means which our race has employed for the cure of disease. We know how long some forms of primitive belief persisted in medicine,—as, for example, the doctrine of *likenesses*, or the cure of a disease by some object supported to resemble its leading symptom. What is, however, even more remarkable is the efficacy which charms still continue in some cases to possess, even when they are worn merely as an experiment in self-suggestion by a person who is perfectly well aware of their intrinsic futility. The experiments on this subject, given in 575 A, seem to show that mere continual contact of some small unfamiliar object will often act as a reminder to the subliminal self, and keep, at any rate, some nervous disturbances in check. Until one reads these modern examples, one can hardly realize how veritably potent for good may have been the savage amulet, the savage incantation.

第五章 「催眠」 211 頁

575. 実際に効果が認められている自己暗示の体系は、不自然なことはなく、人類の全ての迷信や宗教と同じくらい広範囲に及んでいる。つまり、その超自然的な信仰のそれぞれの形態は、差し迫って必要な、現世における天恵――つまり肉体的苦痛から

解放されること――を手に入れる方法として代わる代わる利用され続けている。我々は、同じ傾向が、物心崇拝的、多神教的または一神教的な信念形態において一貫していることを目にする。物心崇拝的な人々から話を始めるならば、我々はさまざまな種類の魔除け――自動力のない物質、恣意的なジェスチャー、意味のない言葉――がおそらく実際、我々人類が病の治療に対して採用している最も一般的な方法であると言うことができる。我々は原初的な信仰形態がどれほどまじないに固執しているかを知っている。――例えば、「似たもの」による教義、あるいはその主症状に似た何らかの物による病の治療としての信仰形態である。だが、より顕著なことは、魔除け〔霊符〕が未だある場合においては、所持され続けており、それらが、完全にそれらの本質的な無益をよく意識している人による自己暗示の実験において、ただ身につけられるときでさえ、効き目があるということである。575A 節で与えられたこの話題の実験は、ある小さな見慣れない物の単純・連続的な接触が暗示として、しばしば潜在自我〔サブリミナル・セルフ〕に機能して、いずれにせよ、検査において、何らかの神経的動揺を示し続けることを表すようである。誰もこれらの現代の事例を読むまで、未開人の魔除けやまじないが、どれほど多様な効果があるかをいつまでも認識できないであろう。

（和訳・〔 〕内―唐澤）

以下は、未発表手稿「巫女が高処に上る」である。

欧州には、四世紀のヤムブリクスや十七世紀のクペルチノのヨセフス、十九世紀のホウムやモセス、もっとも泛空で著われ、英科学士院のサー・ウィリヤム・クルックスごとき精確なる科学眼もて、ホウムがまるで床板を離れて空中にあるを、異日三度まで目撃して、何たる詐巧を見出ださざりし由。（『天中記』三六。『広博物志』一二。『古今図書集成』神異典二六二所収、南宋の曽慥『集仙伝』序。一九〇三年板、マヤース『個人義とその身後の存留』一巻、「用語解」一八頁。一九二九年一四輯『大英百科全書』十三巻九七九頁）

［未発表手稿「巫女が高処に上る」］（『全集 6』p.413）（傍線―唐澤）

この論考で示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の該当箇所（vol.1, p.18「用語解説」）の内容は、以下の通りである。

GLOSSARY, p.xviii

Levitation.—A raising of objects from the ground by supposed supernormal means: especially of living persons; asserted in the case of St. Joseph of Copertino, and many other saints; of D. D. Home, and of W. Stainton Moses.

「用語解説」　p.xviii

空中浮揚――普通ではありえない方法によって、地面から物体が浮揚すること。特に生きている人の浮揚。コペルティーノの聖ヨセフの事例や、他の多くの聖人たち、D.D.ヒュームや W.ステイントン・モーゼスの事例において示されている。

（和訳―唐澤）

最後に、未発表手稿「猫や鼠と男女の関係」を示す。

視る聞く齅ぐ等普通の感覚の外に地下に水や金あるを感じたり、見ず聞ずして馬や薔薇の存在を知たりするを心理学者は特殊感覚（ヘテレステシア）と名け、人により猫が近くにあるを見も齅ぎもせずに感知して不安を感ずるを其一例とす(一九〇三年板、マヤースの『箇人格及其身後の残存』、一巻四八三頁）

其起源発達に就いては議論区々だが、自ら知る所を以てすれば、予は少時少しも蚯蚓に頓著せず、毎度爪で生た奴を切て魚を釣た。然るに十一歳の時小学教室で教授されおる最中、山崎堅次郎とて只今和歌山県庁で衛生の方に奉職する人が其時予と等しく十二三歳で、喧嘩の仕返しに予の背中へ後から、蚯蚓を落し込だのが色々と動き廻るを気味悪く覚へて、密かに帯を解き一寸立て振ひ落した。其より太く蚯蚓嫌ひになり、十七年前熊野の最難所たる安堵峯の木小屋に宿る内、一夜蚯蚓が自分の蒲団の中え這込むと夢み、忽ち寤て十二月の寒きに蚯蚓が畳の上に来る筈なしと考へたがどう

も不安で成ず。首を転じて敷居を眺めると其上に、方言勘太郎てふ大蚯蚓長さ六七寸厚さ三分許り、孔雀の尾の珠の様に瑠璃色に光る奴が横たわり有た。這はしてみるに音もせず。蚯蚓が這ふ音を聞た事も無れば、特殊感覚で之を夢みた程其時自分は蚯蚓大嫌ひに成居たと想ふ。

［「猫や鼠と男女の関係」未発表手稿］（『熊楠研究 6』pp.290-291）（傍線―唐澤）

この論考で示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の該当箇所（vol.1, p.483）の内容は、以下の通りである。

APPENDICES, TO CHAPTER V, p.483

541E. And next as to the heteræsthesiæ alleged to be evoked by dead organic substances, or by living organisms. We may begin by observing that some of our senses, at any rate, form the subjective expression of certain chemical reactions. But many kinds of chemical reactions go on in us besides those which, for example, form the basis of our sense of taste. And some persons are much more affected than others by certain special reactions, which from a purely chemical point of view may or may not be precisely the same for all. Some persons have a specific sensibility to certain foods, or to certain drugs;—the presence of which their stomach detects, and to which it responds with extraordinary delicacy. Now, if it were an important object to discover the presence of a certain drug, such a sensibility would be regarded as precious gift, and the discovery might be quite as valuable when made by the stomach as it would have been if made by the nose. These are nascent heteræsthesiæ, which, however, are not fostered either by natural selection or by human care.

第五章 「付録」 483 頁

541E. そして、次のヘテレステシア〔heteræsthesiæ〕に関しては、死んでいる有機物質あるいは生きている有機体によって引き起こされると言われている。いずれに

せよ我々は、我々のいくつかの感覚が、ある化学反応に対する主体的な表れを形成することを注視することによって、〔この事例の考察を〕始めることができる。多くの種類の化学反応は、例えば我々の味覚の基礎を形成するもの以外にも、私たちにおいて起こるものである。そして、ある特別な反応によって、他の人よりはるかに影響を受ける人々もいる。そして、全て〔の感覚〕において同じことが、純粋な化学の視点から、正確であると言えるかもしれない。ある食物、またはある種の薬物に対して特殊な感覚を持っている人々もいる。――つまり、彼らの胃が見つけ出すものであり、そしてそれは並はずれた敏感さをもって反応するものである。現在、それがある種の薬物の存在を発見する重要なものであれば、そのような感覚は貴重な才能と見なされるであろう。そして、発見がもし鼻によってなされるなら、胃によってなされる時と同じくらい、かなり貴重かもしれない。これらは初期のヘテレステシア〔heteræsthesiæ〕であり、しかしながらそれらは、自然淘汰や人間の注意によって促進されるものではない。

（和訳・〔 〕内―唐澤）

ここまで、八つの熊楠が『ヒューマン・パーソナリティー』について言及している論考を見てきたが、果たしてその引用・参照箇所に、何らかの一貫性を見出すことはできるであろうか。

(1) 魂が肉体から出る事例（いわゆる「幽体離脱」）

(2) 双子間の意志伝達（いわゆる「テレパシー」）

(3) 動物にも幽霊がある事例

(4) 死人のさとし

(5) 頭頂から香液を発する事例

(6) 霊符の効力（潜在意識への影響）

(7) 空中浮揚

(8) 特殊感覚（ヘテレステシア）（いわゆる「やりあて」）

ここで分かることは、(7)の「空中浮揚」以外は、全て熊楠も類似の体験をしているということである。ごく簡単に述べると、(1)は、熊楠の日記（1904 年 3 月 10 日及び 4 月 25

日付日記、本章・第 14 章参照）に類似の事例（睡眠中に首が抜け出て飛び回る経験）を見出すことができる。(2)は、本章・第 14 節の初めに、熊楠が「テレパシー」に関心を示していたことを述べた。そして熊楠自身も「テレパシー」を経験していることを書簡（1928 年 6 月 10 日上松蓊宛書簡参照）にも記している。(3)は、例えば 1904 年 3 月 24 日付の日記において熊楠は「獣畜、言詞、心なけれども生物のこと分る」などと述べ、動物と何かしらの「交感」を行っていたことが覗える。また熊楠は、1915 年 1 月の「兎に関する民俗と伝説」において「犬にも幽霊があること」を、自身も十数年来研究してきたことを述べている（本章・第 14 節参照）。(4)は、死に瀕した羽山芳樹が睡眠中の熊楠に会いに来た事例（本章・第 13 節 13-1 参照）などがある。(5)は、上に挙げた「馬に関する民俗と伝説」において、まさに同じような事が熊楠自身にも起きたことを述べている。(6)は、本章・第 17 節で述べたように、「祈念」というものを熊楠が強く信じており、そのことは御進講に際しての書簡（1929 年 4 月 15 日付山田栄太郎宛書簡、同年 4 月 30 日上松蓊宛書簡）で述べている。(8)は、いわゆる「やりあて」であり、また大嫌いな蚯蚓を事例に、上に挙げた論考「猫や鼠と男女の関係」の中でも述べている。

つまり熊楠による『ヒューマン・パーソナリティー』への言及は、自分が体験したことを「裏付け」として述べていると思われる。あるいは逆に、自分の体験を裏付けるために『ヒューマン・パーソナリティー』を引用・参照したのかもしれない。しかしどちらにしろ、熊楠はそのような出来事が、なぜ起こり得るのかということまでは語り得なかった。確かに明示化し難い事例ばかりではあるが、そこに熊楠自身の考察結果がなければ、やはりこれらは「事例の列挙」と言う他ないであろう。とは言え、これらの論考は、熊楠がマイヤーズに傾倒し、またマイヤーズから多大な影響を受けていたことを十分に表すものである。我々にとって、熊楠がなぜこれほどまでにマイヤーズにはまったのか、その「背景」を知ることが最も肝要な事柄である（本章・第 14 節参照）。

参考文献

・飯倉照平、『南方熊楠―梟の如く黙坐しおる―』、ミネルヴァ書房、2006

・Wikipedia、Frederick William Henry Myers の項目、2012 年 1 月閲覧

・岡本清造翻刻資料（未刊行 1914～1925 年翻刻分）（南方熊楠顕彰館所蔵）
・小此木啓吾編集代表、『精神分析事典』、岩崎学術出版社、2002
・Oppenheim, Janet, *THE OTHER WORLD: Spiritualism and psychical research in England, 1850-1914*／邦訳：和田芳久、『英国心霊主義の抬頭』、工作舎、1992
・河合隼雄、『ユング心理学入門』、培風館、1967
・神坂次郎・南方文枝、「父　熊楠の素顔」、『新文芸読本南方熊楠』、河出書房新社、1993
・『広辞苑第 5 版』、岩波書店、電子辞書版
・「〔資料〕土宜法龍宛南方熊楠書簡」、紹介：武内善信、『和歌山市立博物館研究紀要』第 25 号、2010
・鶴見和子、『南方熊楠―地球思考の比較学―』、講談社学術文庫、1981
・中瀬喜陽、『覚書　南方熊楠』、八坂書房、1993
・中瀬喜陽編、『門弟への手紙』、日本エディタースクール出版部、1990
・橋爪博幸、『南方熊楠と「事の学」』、鳥影社、2005
・橋爪博幸、「南方熊楠と現世肯定―新出の土宜法龍宛書翰に見られる「物」と「心」―」、『文明と哲学』第 3 号、日独文化研究所、燈影社、2010
・長谷川興蔵・武内善信校訂、『南方熊楠　珍事評論』、平凡社、1995
・Progoff, Ira *Jung, Synchronicity and Human Destiny: Noncasual Dimensions of Human Experience,* 1973／邦訳：河合隼雄・河合幹雄、『ユング心理学選書⑫ユングと共時性』、創元社、1987
・Polanyi, Michael *The Tacit Dimension,* 1967／邦訳：高橋勇夫、『暗黙知の次元』、ちくま学芸文庫、2003
・Myers, Frederick William Henry, *Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*, Kessinger Pub Co, 1903
・南方熊楠顕彰会学術部編、『南方熊楠 小畔四郎往復書簡（1）』、南方熊楠顕彰館、2008
・南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究 6』、2004
・南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究 7』、2005
・南方文枝、『父南方熊楠を語る』、日本エディタースクール出版部、1981
・南方文枝、「追想〔父の茸絵の事など〕」、1989（飯倉照平・長谷川興蔵編、『南方熊楠百

話』、八坂書房、1991 所収）

・茂木健一郎、『「脳」整理法』、ちくま新書、2005

・湯浅泰雄、『共時性とは何か』、山王出版、1987

・Jung, Carl Gustav, *MEMORIES, DEAMS, REFLECTIONS*, 1963／編者：アニエラ・ヤッフェ、邦訳：河合隼雄・藤縄昭・出井淑子、『ユング自伝 2』、みすず書房、1973

・Jung, Carl Gustav、Pauli, Wolfgang Ernst, *THE INTERPRETATION OF NATURE AND THE PSYCHE*, 1955 ／邦訳：河合隼雄・村上陽一郎、『自然現象と心の構造―非因果的連関の原理―』、海鳴社、1976

・吉川寿洋、「弟常楠宛南方熊楠の手紙」、『熊楠研究 1』、南方熊楠資料研究会、1999